

札幌市文化財調査報告書

XX

1979

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 XX

K446 遺 跡

1979.7

札幌市教育委員会

例 言

- 1 本書は、昭和53年6月12日から7月8日にかけて実施した市営麻生球場（仮称）予定地（旧北海道拓殖銀行グラウンド）内に係るK446遺跡の発掘調査報告書である。地番は、札幌市北区麻生7丁目である。
- 2 本調査は、札幌市教育委員会文化課文化財保護係の加藤邦雄、羽賀憲二の協力を得て、上野秀一が担当した。
- 3 本書の編集および執筆は上野が担当している。
- 4 発掘調査、整理において下記の人々より助言と協力を賜った。
札幌商科大学教授・札幌市文化財保護委員 大場利夫
北海道教育庁文化課
北海道大学文学部北方文化研究施設 大井晴男、林 謙作、岡田宏明、岡田淳子
札幌大学 石附喜三男
北海道開拓記念館 野村 崇
江別市教育委員会社会教育課 高橋正勝
宮城県多賀城調査研究所 桑原滋郎、岡村道雄、高野芳宏
山形県教育庁文化課 川崎利夫
酒田市教育委員会社会教育課 小野 忍
秋田県教育庁文化課 富樫泰時、畠山憲司
秋田市教育委員会社会教育課 小松正夫
青森県教育庁文化課 山道紀郎、新谷 武、成田誠治
青森県立博物館 鈴木克彦、三宅徹也、岩本義雄
札幌市文化資料室 ほか
- 5 発掘調査には、下記の人々が従事した。
右衛門佐時雄、朝日征行、浦口 護、朝日 章、内山久美子、西條美智枝、北海道工業大学などの学生ほか。
- 6 挿図作図・浄書は、右衛門佐時雄（土器ほかの実測・トレース）、浦口 護、朝日 章（拓本・復元）、西條美智枝（図面トレース）、横地桂子、金井邦彦、野瀬美恵子、近野広子（水洗・註記）、岡田知子（校正）が当った。
- 7 放射性炭素による年代測定は、学習院大学理学部木越邦彦研究室に依頼した。
- 8 発掘・整理作業、報告書出版については、社会教育部体育課のたえざる協力があったことを記し、感謝の意を表する次第である。

凡 例

- (1) 挿図の竪穴住居址実測図縮尺60分の1，同かまど実測図縮尺30分の1。
- (2) 土器実測図縮尺4分の1，土器拓影図縮尺3分の1，4分の1。土製品・石製品実測図縮尺3分の1。
- (3) 遺構実測図および遺物実測図・拓影図のスクリーン・略号については，下記のとおりである。これ以外のものについては，個々に註記した。

〔遺構〕 セクション図，平面図にかけたスクリーンの内訳は第1表のとおりである。略号は，

SP：柱穴

C：木炭

F：焼土

Pu：軽石

住居址，かまどの方位は，すべてNO°Eで統一表示してある。

〔遺物〕 P：遺物番号（土器）

S：遺物番号（礫，石片）

PK：遺物番号（かまど内）（土器）

SK：遺物番号（かまど内）（礫）

L：出土層位

K：かまど覆土





フ：住居址覆土

土器実測図，拓影図中のセクションにスクリーンをかけたものは，

須恵質：点々（網目）

内 黒：斜線

第1表 スクリーン一覧表

	攪乱層
	焼土層
	焼土+炭層
	炭 層

目 次

第 1 章	旧琴似川水系の竪穴住居址群について	11
第 2 章	発掘調査の方法と層準	25
第 1 節	発掘調査の方法	25
第 2 節	層 準	25
第 3 章	遺構および出土遺物	27
第 1 節	第 1 号竪穴住居址	27
第 2 節	第 2, 3 号竪穴住居址	35
第 3 節	第 4 号竪穴住居址	43
第 4 節	第 5 号竪穴住居址	46
第 5 節	第 6 号竪穴住居址	48
第 6 節	第 7 号竪穴住居址	54
第 7 節	第 8 号竪穴住居址	56
第 8 節	第 9 a, 9 b 号竪穴住居址	58
第 9 節	第 10 号竪穴住居址	61
第 10 節	ま と め	64
第 4 章	土器群について	70
第 1 節	分 類	70
(I)	甕 (深鉢)	70
(II)	壺	78
(III)	坏 (浅鉢)	78
(IV)	支脚 (五徳)	82
(V)	甌	82
第 2 節	編年の位置について	85
結 語		101
引用・参考文献		103

挿 図 目 次

巻首図版	旧琴似川水系の竪穴住居址分布図	9
第1図	遺跡付近地形図	13
第2図	札幌市K436(1), K41(2)遺跡出土土器実測図	20
第3図	遺跡付近地形図(1:2,000)	21
第4図	発掘区配置図および遺構関連図(1:400)	23
第5図	発掘区(point α - β)セクション図	25
第6図	第1号竪穴住居址実測図	28
第7図	第1号竪穴住居址かまど実測図	29
第8図	第1号竪穴住居址遺物出土分布図	30
第9図	第1号竪穴住居址出土遺物(1)	32
第10図	第1号竪穴住居址出土遺物(2)	33
第11図	第2号竪穴住居址実測図	35
第12図	第2号竪穴住居址かまど実測図	36
第13図	第2号竪穴住居址遺物出土分布図	37
第14図	第3号竪穴住居址実測図	38
第15図	第3号竪穴住居址かまどおよび第2号竪穴住居址遺物出土状態実測図	39
第16図	第2号竪穴住居址出土遺物(1)	40
第17図	第2号(1),第3号(2)竪穴住居址出土遺物(2)	41
第18図	第2号竪穴住居址出土遺物(3)	42
第19図	第4号竪穴住居址およびかまど実測図, 同出土遺物	44
第20図	第5号竪穴住居址およびかまど実測図, 同出土遺物	47
第21図	第6号竪穴住居址実測図	49
第22図	第6号竪穴住居址かまど実測図	50
第23図	第6号竪穴住居址出土遺物(1)	52
第24図	第6号竪穴住居址出土遺物(2)	53
第25図	第7号竪穴住居址およびかまど実測図, 同出土遺物	54
第26図	第8号竪穴住居址およびかまど実測図, 同出土遺物	56
第27図	第9a, 9b号竪穴住居址およびかまど実測図, 同出土遺物	59
第28図	第9a号竪穴住居址出土遺物	60
第29図	第10号竪穴住居址およびかまど実測図, 同出土遺物	62
第30図	K446遺跡竪穴住居址一覧表(1:200)	65

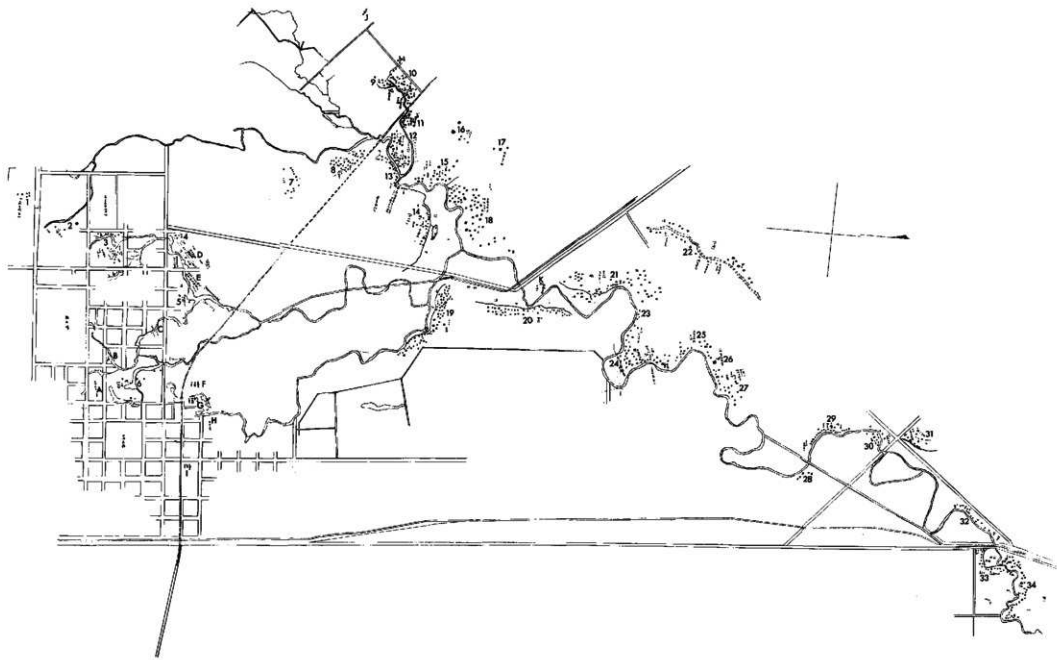
第31図	発掘区出土土器実測図(1)	72
第32図	発掘区出土土器実測図(2)	73
第33図	発掘区出土土器拓影図(1)	75
第34図	発掘区出土土器拓影図(2)(30~51), S W地区出土土器拓影図(52~56).....	79
第35図	K 446 遺跡出土土器一覧表	83

表 目 次

第1表	スクリーン一覧表.....	4
第2表	札幌市旧琴似川水系の竪穴住居址群一覧表.....	14
第3表	K 446 遺跡竪穴住居址柱穴一覧表	66
第4表	K 446 遺跡竪穴住居址一覧表.....	69
第5表	北海道内須恵器・轆轤成形土師器出土地名表.....	95

図版目次

- 1 A 遺跡透景
B 遺跡発掘風景
- 2 札幌市K 436 (1), K 41(2)遺跡出土土器
- 3 A 第1号竪穴住居址
B 第1号竪穴住居址かまど址
- 4 第1号竪穴住居址出土土器(1)
- 5 第1号竪穴住居址出土土器(2)
- 6 A 第1号竪穴住居址出土土器(3)
B 上製紡錘車
- 7 A 第2, 3号竪穴住居址
B 第2号竪穴住居址かまど址
- 8 A 第2号竪穴住居址土器出土状態(1)
B 第2号竪穴住居址土器出土状態(2)
- 9 第2号竪穴住居址出土土器(1)
- 10 第2号, 第3号竪穴住居址出土土器(2)
- 11 A 第2号竪穴住居址出土土器(3)
B 第4号竪穴住居址
- 12 A 第4号竪穴住居址かまど址
B 第4号竪穴住居址出土土器
- 13 A 第5号竪穴住居址
B 第5号竪穴住居址かまど址
- 14 A 第5号竪穴住居址出土土器
B 第6号竪穴住居址
- 15 A 第6号竪穴住居址かまど址
B 第6号竪穴住居址土器出土状態
- 16 第6号竪穴住居址出土土器(1)
- 17 A 第6号竪穴住居址出土土器(2)
B 第6号竪穴住居址出土土器(3)
- 18 A 第8号竪穴住居址
B 第8号竪穴住居址かまど址
- 19 A 第7号竪穴住居址かまど址
B 第9 a, b号竪穴住居址出土土器(1)
- 20 第9 a号竪穴住居址出土土器(2)
- 21 A 第10号竪穴住居址
B 第10号竪穴住居址かまど址
- 22 A 第7, 8, 10号竪穴住居址出土土器
B 棒状礫
- 23 発掘区出土土器(1)
- 24 発掘区出土土器(2)
- 25 A 発掘区出土土器(3)
B 発掘区出土土器(4)
- 26 A 発掘区出土土器(5)
B 発掘区出土土器(6)
- 27 A 発掘区出土土器(7)
B 発掘区出土土器(8)
- 28 A S W地区発掘区出土土器
B 遺跡発掘風景



巻首図版 旧琴似川水系の壑穴住居址分布図

第1章 旧琴似川水系の竪穴住居址群について

(巻首図版, 第1, 2図, 第2表, 図版2)

昭和48(1973)年,札幌市では埋蔵文化財保護の体制が整備されたが,その中で数多くの事前調査と共に,急務として実施されたのが市内における埋蔵文化財包蔵地の所在確認の分布調査であった。昭和48年5月から,現地踏査と既刊文献(高倉・河野1956,岩崎・宇田川ほか1963など)による現状確認調査を実施し,昭和49年3月現在で,334遺跡,その後昭和50年3月現在で407遺跡を確認した(札幌市教育委員会編1974,1975,1976)。これらの遺跡は,山林とか包含層の深い事例を除いて,ほぼ札幌市全域に及ぶ範囲を踏査した結果であった。

この時点において,今回発掘調査したK446遺跡を含む旧琴似川水系(後述)に関連した遺跡は,本地帯が早くから市街地化していたこともあって,現地確認されていたのは,北大植物園内のC136,137,138,知事公館内のC139,北大農学部農場内のK39遺跡などしかなく,さらに21遺跡が前述の2文献から,その存在が予想されていただけである。

ところが,昭和50年4月,偶然の機会に滝川市在住の高畑家に,旧琴似川水系にあった竪穴住居址群の,肉眼観察による分布地図(巻首図版)があることがわかった。本地図は,5,000分の1の縮尺で,街路地,琴似川水系,建物名,地主名が記入され,その中に円形,方形,十字形などの印(赤および黄色の彩色)で,竪穴住居址の所在が1軒1軒記入されたものであった。地図中に記載された地主毎に竪穴住居址群を分類すると34グループある(第1図,第2表,羽賀1975)。住居址総数は,記入された印の実数では720軒,図中に註記された地主毎の軒数で合計すると738軒ある。結局,本地図から存在が明らかになった遺跡は39カ所に及び,昭和51年1月現在の台帳では,札幌市内の遺跡は451カ所登録されるに至った(札幌市教育委員会編1977)。今次発掘地点も,18個の竪穴住居址群があるとされた地域の南西側に当り,実際の発掘調査で,地図に示された竪穴住居址の位置と大きな誤差がなく,遺構が検出されたことは,地図の正確さを証明するものであった。

この地図は,後述するとおり,明治年間中葉に作成されたものと考えられるが,本地図に示された琴似川水系は,現在そのほとんどが失われ,かろうじて一部用水路として残っているのみである。しかしながら,少なくとも明治年間頃までは,本水系は,道庁,北大植物園,知事公館の池などに名残りを留める札幌扇状地の境界泉にあたる湧泉列(ヌブサムメム,ビシクシメム,キムクシメム)(小山内・杉本・北川1956,山田1965)に源を発する小河川(後述)と,円山・宮ノ森方面の山から流れてくる河川(後述するケネウシベツ川など)を現在の中央競馬場北側付近で合わせ,北高等学校付近を経て,麻生町に至り,篠路町内で,フシコサッポロ川に合流していた河川なのである(第1図)。この水系は,国土地理院発行の5万分の1地形図でみると,「明治29年版」(1896)では,現在の麻生町の南側に「琴似川」と付され,「篠路村」の「本村」付近で「伏戸札幌川」と合流

している。「大正5年版」(1916)では、「琴似川」は、新川までで、一部途切れて河川は描かれていたが、「古川」という名称に変わっている。「昭和10年版」(1935)では、ほとんどが暗渠と化し、街路に沿って流れている。また、時期は不明であるが『北海道蝦夷語地名解』(永田1891)によると、ケネウシベツ(赤揚)川とコトニ(琴似)川が合流した先は、「シノロ(篠路)川」と呼ばれていたらしい。そして、山田(1965)によると、コトニ川とは元来、シノロ川の上流にあって、現在の都心部を流れていた河川で、「コトニ」を本流とし、「サクシコトニ」、「セロンベツ(別称チエフンベツ)」、「ノシケコトニ(別称シンノシケコトニ)」などの支流をあわせた水系であったが、明治初年に、開拓使がケネウシベツ川筋に新村をつくり、「琴似村」と命名したため、ケネウシベツは、琴似村の川なので「琴似川」と呼ばれるようになり、「シノロ(川)」の辺までその名が及んだと説明している。なお、明治4、5年頃の市街図では、この琴似川水系はさらに南側まで延びていたことが誌されている(明治四年及五年札幌市街之図：札幌史学会編1897)。このように、本遺跡付近を流れていた河川は名称も変り、また現在河川跡すらも残っていない部分が多いが、少なくとも明治年間頃までは、秋味がとんとん廻る川であったといわれる。

さて、このような正確な分布地図が作成された時期と、その製作者は誰であったのであろうか。本地図中には、それに関する記載は全くなく、また本図を載せた書籍を見出すこともできない。

地図に記入された建物名で推察すると、「師範学校(敷地)」(南2,西14~19)が、南1条西15丁目付近に新築移転したのが、明治27年9月1日である。また北2、3条西17~19丁目付近に「蠶業伝習所用地」があるが、この伝習所(北1,西19)が設置され、開業したのが明治23年で、明治34年には「北海道農事講習所」に改められている。場所が少しずれているが、用地とある所から本図に示された場所は、将来の用地として用意されたものと推察することもできよう。「札幌病院」(北1,西8)は、当地に新設されたのは明治23年である。そして、「博物館」は、明治10年「仮博物館」、同15年「札幌博物館」、同17年「札幌農学校付属博物館」と変化している(以上、伊藤1911、札幌市史編集委員会編1958による)。以上の事実の内、「師範学校(敷地)」の年代が最も新しいもので、このことより明治27年以降と結論できるようである。人名でみると、「藪 惣七」は、明治7年に渡道、札幌に移住し、明治18~32年にかけて、札幌区総代を努めた人物である。「森 源三」は、明治8年に開拓使仮学校設置と共に来道し、初代の札幌農学校長、七郡部長(明治20年)を経て、道内初の衆議院議員(明治34年)になった人である。「調所廣文」は、明治2年に開拓使に入り、明治11年開拓使大書記官、同15年札幌県令、同19年貴族院議員になった(金ノ・高野1914による)。また、明治7年に設置され、翌年に入植を開始した琴似屯田入植者280名(高倉・河野1956)の内、「伊藤忠太郎」、「田中松五郎」、「石山松吉」、「大野菊三郎」、「渡辺清五郎」、「佐藤庄十郎」、「神指元太郎」、「高野庄(莊)三郎」、「林源次郎」、「大関雄孟」、「大塚治三郎」、「大竹巳代松」などの名が地図中にある。これらの人物からは、細かい年代を決定することは難しいが、明治20年代前後を中心に活躍していた人達が書かれていることがわかる。河川の状態は、明治24年頃の市街図の様相(山田1965)、明治30年代頃の市街図(札幌史学会編1897)に極めて類似している。以上のことからみて本地図は、明治20年代のしかも後半頃に作成されたものであろうと考えられる。



旧琴似川流域の遺跡分布図 (縮尺1:20,000)

第1-2表 札幌市旧等似川水系の竪穴住居址群一覧表（巻首図版）

* No.	地主・建物	所在地（現在）	竪穴数		出土物および記事	遺跡番号
			記入数	実数		
1	師範学校敷地	南2条西14~19		6		C 412
2	敷 惣 七	南1~北1条西16	3	3		C 413
3	森 源 三	北1, 2条西15, 16（知事公館）	19	19+3	土器（5カ所）、黒曜石	C 139, C 414
4	今井 今朝五郎	北5条西16	5	5	土器5個	C 422
5		北6条西12, 13		3	「春秋水人リシナラン」、湿地	C 422
6	博 物 館	北2~4条西7~9 （北大、農、付属、植物園）	8	8		C 44, C 136, C 137, C 138
7		北11, 12条西18~20	13	13	湿地（沼）	C 423
8	興 所 廣 丈	北13~15条西19, 20（中央卸売市場）	30	30	土器、鍋、小斧、銅、砥石、細長石	C 424
9	伊 藤 忠太郎	琴似24軒2条1	6	6	刀剣	N 425
10	田 中 松五郎	同 24軒2, 3条1	46	42	黒曜石、土器（2カ所）、銅、紡績車	N 426
11	前 田 三郎	同 8軒1条東5	15	15	土器、朝鮮土器、斧（十文字の印あり）	N 427
12	石 川 松 吉 作 相 清 清 作	同 8軒1, 2条東6	36	29	土器（2カ所）、銅、細長石、朝鮮土器、鎌、頭骨、煙管吸口	N 428
13	谷 七太郎	北15, 16条西18~20 北17, 18条西16~18 （札幌中央競馬場北側）	22	22	鉄器、土器、「刀剣」朝鮮土器ニ類スルモノニ尺ノ土中ヨリ伊藤伊右 門発掘（掘）	C 429
14		北15, 16条西18~20 （札幌中央競馬場北側）	28	28	ツバ、砥石、土器、内手鍋（4個）、髹漆、湿地（沼）	C 430
15	大 野 菊三郎	琴似8軒3, 4条東5, 6	15	18	砥石、鍋、土器（2カ所）、マキリ、タシロ、斧	N 431
16	渡 辺 清五郎	同 8軒3, 4条東4		6	なし	N 432
17	佐 藤 庄十郎	同 8軒5条東3, 4		3	なし	N 433
18	神 指 元太郎	同 8軒5~8条5, 6	60	60	「土器見当ラス」	N 434
19	藤 園	北18, 19条西10~13（北大農学部農場）	75	75	湿地（沼）	K 39
20		北21~24条西12, 13（ * 第2農場）	42	42	湿地（沼）	K 435
21	高 野 庄三郎	北24~27条西13, 14	55	55	銅	K 36, K 436, K 437の一部
22	高 野 豊 作 瀬 田 幸 吉 林 藤次郎	北25~29条西15~17, 新川	23	23	石斧、黒曜石、土器、細長石、滝地（旧河川跡沼）	K 35
23	田 中 藤次郎	北27条西11, 12	12	12	なし	K 437の一部
24	大 大 藤 三郎 大 藤 三郎	北27~29条西10, 11	43	33	朝鮮土器、刀剣、内手鍋、「土器内手鍋ニ類スルモノ」	K 438
25	大 竹 巳代松	北29~31条西10, 11	18	18	なし	K 439
26	兼 池 新治郎	北32, 33条西7, 8	8	8	48㌢（の方形の住居址）	K 440
27	庄 司 重 正	北33, 34条西7, 8	12	12	土器「此近傍以前ハ穴ヅクアリシト思ハル」	K 441
28		北36, 37条西3, 4		5	なし	K 442
29	庄 司 英 七	北37, 38条西5~7	27	23	マキリ、細長石、平靴、銅、土器	K 443
30	牧 野 清 作	北39, 40条西5, 6	10	10	鍋、石、土器、タシロ	K 444
31	桑 島 信 造	北40, 41条西6~新琴似8条1（寛王寺）	10	10	平靴、タシロ、紡績車	K 445

* No.	地主・建物	所在地(現在)	竪穴数		出土物および記事	遺跡番号
			記入数	実数		
32		麻生町7, 8		18	飾石, 銅破片	K 446
33	倉谷 仁一郎 岩井 佐平	北46-48条東1, 2	18	19	摺鉢, 湿地(沼)	K 447
34		北48, 49条東1~4		38	鉄鍋, 烏貝, 土器, 鎌, 斧, マキリ, 内手鍋	K 448
	合計		738	720		
A	札幌病院	北1西8(札幌テレビ局敷地内)			刀剣	C 416
B		北2条西10			内手鍋, マキリ	C 415
C		北4条西11			土器, マキリ, タシロ	C 450
D	今井 今朝五郎	北6条西15			朝鮮土器及貝塚土器, タシロ, 細長ノ石, 貝殻(貝殻), 土器, 「アイヌ人骨燻袋ト共ニ出ス」	C 449
E		北6条西14			「瑠璃玉, メノウ石, 軽石, 人骨, 鍬, 斧, 鍋, 鎌等出デタリ」	C 421
F		北6条西8			黒曜石, 土器, 人骨	C 418
G		北6条西7			結核車, 土器, 握握状黒曜石	C 417
H		北7条西6			朝鮮土器	C 419
I		北6条西4(札幌駅構内)			黒曜石, 土器, 石斧	C 135
J		琴似24軒3条4			黒曜石	N 168
K		北33条西13(武蔵女子短大構内)			黒曜石, 朝鮮土器	K 120

・第1区の番号は, 羽賀(1975)と一致させてある。

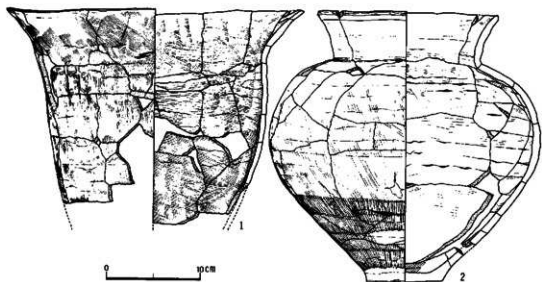
さて、旧琴似川水系の竪穴住居址群については、文献上でも早くから触れられている。明治30年刊の『札幌沿革史』(札幌史学会編1897)では、「地理」の章に「穴居跡」の一項があり、「札幌地方に於て、最も穴居跡の多き所を、琴似川沿岸地とす、其総数八百六十個、……、穴居跡中六百零四個は、円山、山鼻、琴似の三村に存在し、残数二百五十六個は、区内にあり、其所在の位置は、北一條北六條西」(十五丁目辺、及び博物館内、札幌農学校附属園内、其他の處にあり、……、形状は、円形、四角形、十字形等あり、……、竪穴の所在地に普通の鉄鍋、内手鍋、煙管、朝鮮土器、刀剣、あいぬ頭蓋骨、等埋没する(云々)』(本文p.7, 8)という記載がある。この中の、竪穴の形状(特に十字形)および出土資料の種類をみると、前記の地図にある註記(第2表参照)とほとんど一致していることが判る。この項目は、永田方正が、札幌史学会々頭に宛てた報告(『札幌沿革史脱稿に付報告』)によると「会員高畑直一の記事なり」(前掲、續言p.7)とある。

明治32年の河野常吉(1899)の報告では、「竪穴の所在地」の一項の中に「友人高畑直一君の調査に拠れば、石狩国琴似川の岸には八百六十余個ありしとの事なり。但し此處は最早開墾せられて現存するもの少なし。」(p.17)とあって、前述した地図は、「高畑直一」の手によって製作された可能性が強いと判断される。なお、藤本英夫(ふじもと1968)によれば、明治35年の河野常吉の北海道人類学会の講話(「遺跡遺物の保存に就いて」)の備忘録にも、上述の文献と同内容の記録があるようである。

そして、明治44年に出版された『札幌区史』(伊藤1911)では、『札幌沿革史』に詳しく記録されている、北6条西4丁目(現札幌駅構内)の遺跡は、明治28年に発見されたとあり(p.125)、そして「明治二十七八年の頃開墾猶今日の如くならざる際の調査には、円山、琴似、山鼻附近の地は、其数殊に夥多にして、琴似川本支流附近に在るもの、其数約六百を以て算せり」(p.127)と、具体的に調査年代が明治27、28年頃であると記されている。この年代は、前述した地図の建物名、河川路、人物名からの年代推定と全く一致している。

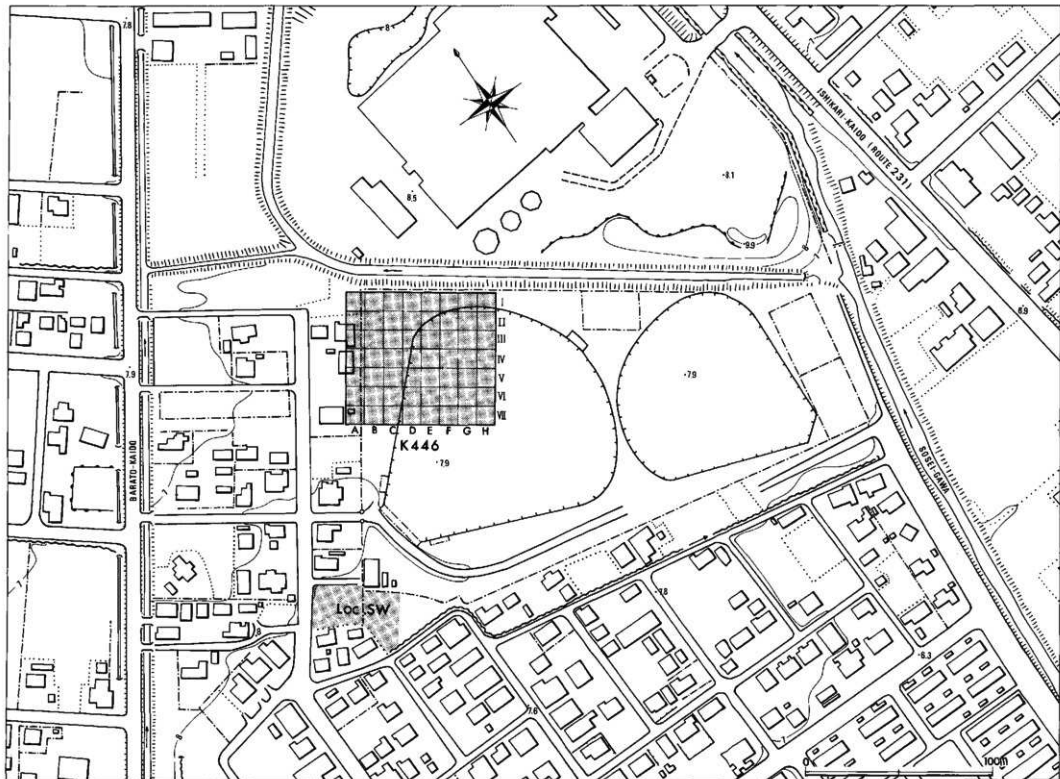
結局、本地図が、高畑家に蔵されていた事実を含めて、「高畑直一」によって、明治27、28年——明治20年代後半に作成されたものと判断できるのである。ただ、本地図に示された竪穴総数は738軒(ないし720軒)であり、『札幌沿革史』にある860軒とは著しい差がある。これは、本地図に図示されていない円山、山鼻地区、その他の札幌区内の竪穴をも含めて計算しているためなのであろうか。

ところで、本地図に示された当時の調査が、極めて正確なものであったことは、今回のK446遺跡の発掘調査によって証明された訳であるが、しかしながら、昭和27年7月の北大調査団による北大遺跡の調査(北大調査団1955)では、サクシトニ川流域の9,500坪の牧草地帯中から、明確なものの73個、不明確なものの10個の計83個の竪穴状の凹みが確認されたとある。これは、本地図と比較すると、「農園」(No.19:K39)と記載されている部分の南東半分の約30基の竪穴が記入された地域に当り、約2.5倍の数が北大調査団の調査でみつかったことになる。従って、旧琴似川水系全体でみれば、完全に埋没した例なども考慮すると、竪穴の実数は2~3倍近くあった可能性もあろう。また、河野広道らによるその後の調査(河野1956、岩崎・宇田川ほか1963など)においても、新たに10数か所(K113, 114, 115, 116, 118, 113, 40, 41, C134など)の竪穴住居址を含む遺跡がみつかった。

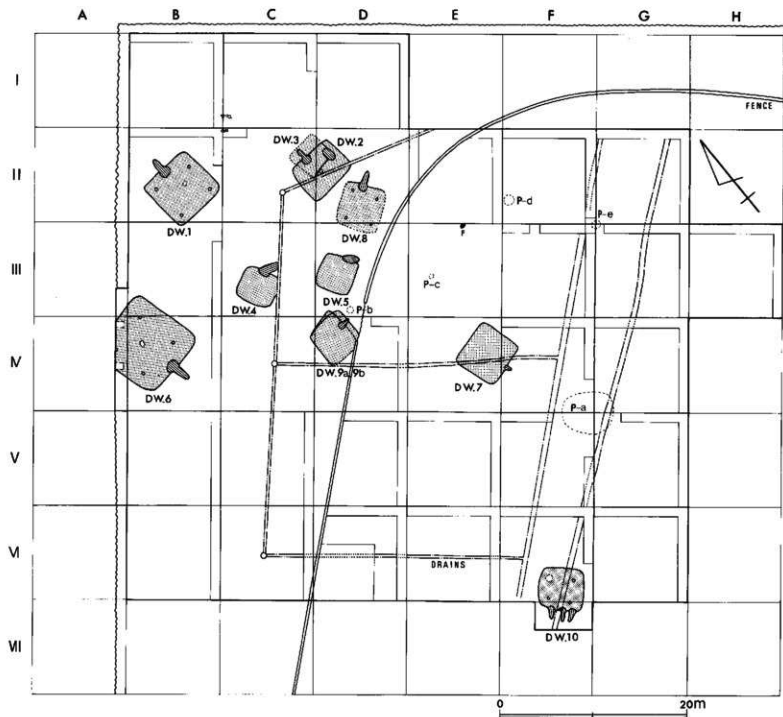


第2図 札幌市K436(1), K41(2)遺跡出土器実測図

第2.図および図版2に示した土器は、上述した旧琴似川水系の遺跡から出土した資料の一部である。1は、K436遺跡の北端部の北区北24条西14丁目、昨年試掘調査した際に、試掘坑から唯一みつかった土器である。2は、昭和7年5月8日、北大工学部裏（K41遺跡）の竪穴住居址より、河野・高倉・後藤によって発掘された土器の一部である（後藤1937、岩崎・宇田川ほか1963）。



第3図 遺跡付近地形図(1:2,000)



第4図 発掘区配置図および灌漑開通図(1:400)

第2章 発掘調査の方法と層準

第1節 発掘調査の方法(第3, 4図, 図版1A)

今回の調査は、市営麻生球場(仮称)新設工事にともなう事前調査で、調査対象地の内、東南東約20,000㎡は、土質調査と明治年間の古地図(前述)によって、旧河川跡および低湿地であることが判明していたため、それ以外の地域について試掘調査を実施した。この結果、対象地の北東隅約4,200㎡と南西隅の畑地(Loc. SW)約1,600㎡にのみ現地形が残り、他の地域は、旧北海道拓殖銀行グラウンド造成によって粘土層面まで削平されていた。ただ、北東隅部分においても、ブルベン付近は、表土上部が削平され、再堆積層のみであり、外野レフト部分は、旧耕作土層が厚く遺存し、その上に10~20cmの厚さの盛土がある(第3図)。

遺跡地付近の標高は、7.2m程である。

調査方法は、遺跡地4,200㎡に対して、北西側の敷地境界を基線にして、10×10mのグリッドを組み、北東と南東に1m幅のブリッジを残して、ほぼ全面発掘している。ただし、フェンスの北東部の攪乱の著しい所は除外した(第4図)。

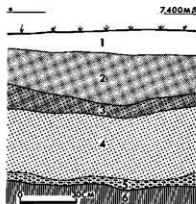
発掘総面積は、約2,880㎡である。

なお、Loc. SWに関しては、2×2mグリッドを組み、全面積の1/4を掘ったが、若干の遺物を得たのみで、下部(平均80cm)まで再堆積層であった。

第2節 層 準

K 446 遺跡は、北区麻生町の旧北海道拓殖銀行野球場から、創成川下水処理場にかけてある遺跡である。

現在球場の北東側には創成川から分流した用水路が流れ、屯田付近で一部また創成川に合流している。この用水路は、切換えと直線化工事がされているが、旧琴似川水系の名残りである。前述した明治中葉頃の河川路でみると、川は球場の南東端から入り、第2グラウンドの南西側を流れ、第1グラウンドの中央から蛇行し、下水処理場の建物内を北流している。そして、竪穴住居址は、第1グラウンドの内野からブルベンを経て処理場の北西側に点々と分布していたようである。従って、住居址群は、低湿な氾濫原とでもいえる場所に立地していたものと考えられる。



第5図 発掘区 (point α - β) セクション図

第5図は、B—I区南東線の南西隅のセクション図である。

第1層：黒褐色土層（耕作土。木の根入る）。

第2層：暗褐色粘質土層（リモナイト顕著）。

第3層：暗灰褐色砂質土層（やや粘性ある）。

第4層：灰褐色砂質土層。

第5層：泥炭層。

第6層：灰褐色粘質土層。

基礎は、第6層の粘土層であるが、その上は、泥炭層の薄層をはさんで、砂質土層が厚く堆積している。この第3～5層は、明らかに氾濫原堆積物に由来をもつものである。遺構でみると、第1号竪穴住居址では、地山のA～D層は、各々第3～6層に対応するもので、従って第3層上面が、住居址の掘り込み面（旧地表面）である。第2号においても同様で、地山のC、Da・b、E層は、各々第3、4、6層に対応するが、泥炭層（第5層）は認められない。掘り込み面は、明らかではないが、第1号と同様第3層の上面にあったものと考えられる。第3～10号竪穴住居址においても、上部が削平された例が多いが、壁および床面の層は、第3、4層の砂質土層である。この中で、第6号においては、床面直下に泥炭層が認められた。この泥炭層は、北西側に立地する第1、6号の床面直上ないし直下のみ認められ、南東側においては確認されていない。

第3章 遺構および出土遺物

11基の竪穴住居址は、B-D-II~IV区に9基集中し、E、F-IV区とF-VI、VII区に各1基ずつ分布している。なお、E-III区の北東端中央には焼土(50×40cm, 第4図F)と土器(2個体)が出土(P-c)し、住居址があった可能性もあるが、付近一帯は削平が著しく確認はできなかった。また、F、G-IV、V区の直径4mの範囲(P-a)からは、須恵器を含む多量の土器が出土したが、遺構の存在は確認されていない。さらに、D-III区(P-b)、F-II区(P-d)、F、G-II、III区(P-e)においては、完形ないし半完形土器が、まとまって地山層に喰い込んでみつがっているが、遺構との関連は不明である。

第1節 第1号竪穴住居址(第6~10図, 図版3A~6B, 22B-1~5)

B-II区と一部B-III区にまたがってみつかったものである。試掘調査の段階で、第I層(暗褐色土層)の存在から遺構の可能性が指摘され、表上除去の際にも、耕作土中から多量の土器の出土をみた。

平面形はほぼ隅丸方形で、大きさは6.2×6.1mである。掘り込み面は、後述するA層上面にあって壁高は35~37cmである。主軸は、N350°Eで、かまどは北壁の中央より30cm程西側にある。また、住居址のほぼ中央に、60×38cm、厚さ8cm程の焼土と炭の薄層からなるマウンドが、第Vb層中(床面より約11cm上)にあったが、本住居址とどのような関係にあるかは明らかではない。また、かまどの袖と北東隅付近の床面直上に幅広く焼土と炭の混じった層の分布が認められた。

柱穴は、四隅に各1本あり、その形態は、SP-1~3は隅丸方形、SP-4は円形で、直径は17~26cm程である。深さは、各々-54、-20.5、-49、-38cmである。なお、SP-2は、2段に掘り込まれ、下部は円形になっており、最大径は15cmである。また、SP-4は、西にやや傾斜している。柱穴の周りに、2点破線で示したのは、柱穴の掘り方の範囲である。

住居址の覆土および地山の堆積状況は以下の如くである。

第I層:暗褐色土層(全体に黒く汚染)。

第II層:暗黄褐色粘質土層。

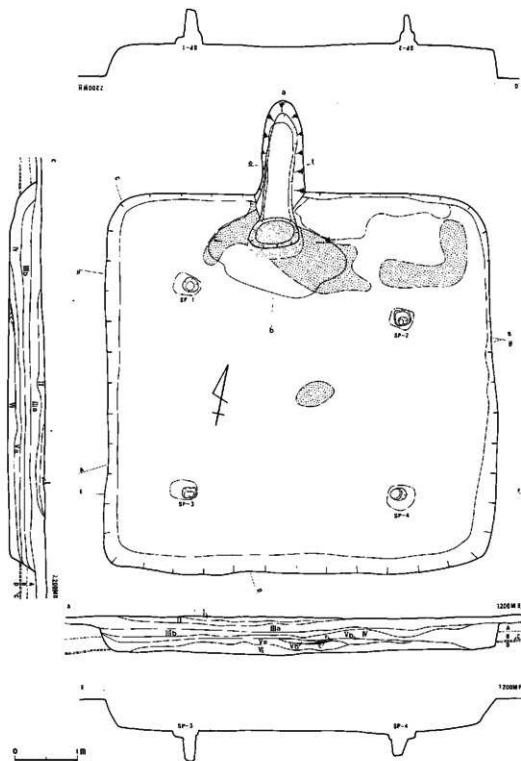
第IIIa層:黄褐色(砂質)土層(砂質的であるが、堅くしまっている)。

第IIIb層:黄褐色砂質土層(やわらかい)。

第IV層:暗黄褐色粘質土層。

第Va層:褐色砂質土層。

第Vb層:灰褐色砂質土層。



第6图 第1号型穴住居址实测图

第Ⅵ層：暗黄褐色粘質土層。

地山は、

A層：暗黄褐色砂質土層（やや粘性がある）。

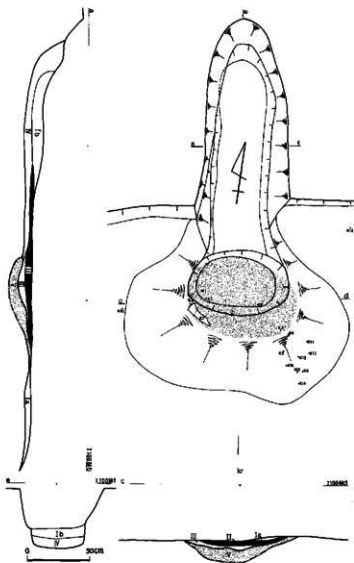
B層：黄褐色砂質土層（やや粘性がある）。

C層：泥炭層。

D層：黄褐色粘土層。

に分層できた。

覆土は、黄褐色系統の粘質土層と砂質土層が互層をなし、地山の壁は砂質土層（A、B層）で、床面は黄褐色粘土層（D層）である。従って、壁よりも覆土の方が全体に粘性があり、しまりがあった。また第Ⅳ層は、かまどのある北側では床面について堆積するように完形ないし半完形土器の主だったものは、この部分からみつかっている。さらに、第Ⅴa層も、住居址西壁付近では床面について堆積している所から、第Ⅳ～Ⅵ層までは比較的短期間に堆積したものと考えられる。また、第Ⅰ～Ⅲb層（10～30cm）の同質の砂質土層は、本住居址の掘り込み面の



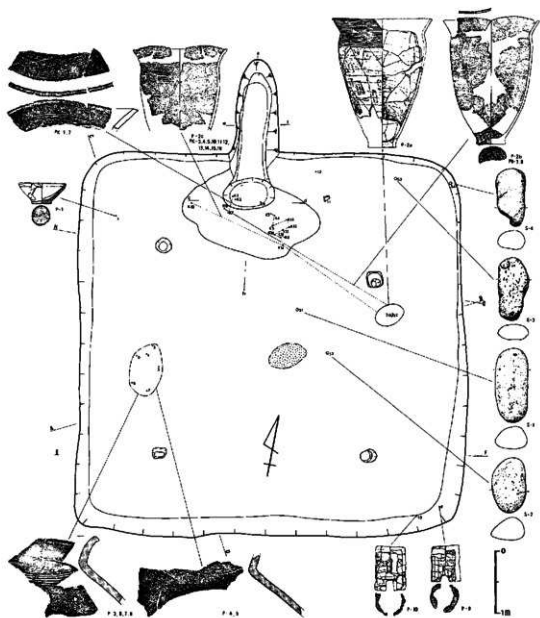
第7図 第1号壺穴住居址かまど実測図

の高さが、7.000～6.950mで、遺跡内では低い所に立地していることとも関連して、何らかの突発的な自然の営力（水害等）によって、一度に貯った可能性が強いと考えられる。

かまど（第7図、図版3B）の煙道は、ほぼ北（N352°E）で、主軸と平行している。袖部分は、床面より7cm程全体に高く造られ、その大きさは1.79×1.37mの楕円形を呈している。その中央に、底面が焼けた80×52cmの大きさの炊口がある。煙道は、ほぼ水平で下場で長さ1.52m。上部からの掘り抜きと考えられ、煙道部の縦断面の大きさは、e-fセクションで41×8cmで、形態は長方形である。袖の東側には、数多くの土器片（PK-4～6, 11～16）が集中して出土した。

かまどの層位を示せば以下の如くである。なお、煙道上部の層は実測していない。

第Ⅰa層：暗黄褐色砂質土層（住居址の覆土）。



第8図 第1号竪穴住居址遺物出土分布図

第Ⅰb層：黄褐色砂質土層（かまどの覆土）。

第Ⅱ層：黒色炭層。

第Ⅲ層：白灰褐色灰層。

第Ⅳ層：暗褐色砂層（炭粒を含む）。

第Ⅴ層：赤褐色焼土層（地山）。

遺物の出土状態に関しては、第6図に代表的なものを、そしてかまど周辺出土のすべてのものを第7、8図に示した。住居址北西隅から坏の半完形土器（第9図4）。SP-2の南より、P-2a、bの完形・半完形の変形土器2個体（同図1、2）、かまどの袖から半完形土器1個体（同図3）、住居址西側中央より、P-3-8の1個体分の須恵器の甕（第10図1、2）、南東隅壁よりP-9、10の支脚2個体（第9図5、6）、北東部よりS-1-4の棒状礫（第10図6-9）などが出土している。出土層準は、第9図1-3は第IV、VI層、同図4-6、第10図4、6、7は第IV層、第10図1は第IV、Va、VI層、同図9は第Vb、VI層である。これらは層的にみると異なった土層中に含まれるが、出土位置と層堆積を検討すると床面ないし床面直上のレベルにあり、従って上述した資料は、いずれも相伴する可能性が高いといえる。

遺物（第8-10図、図版4-6B）

第9図1-3、第10図1-3は、変形土器である。

第9図1は、器高40.5cm、口径31.7cm、底径8.9cmのほぼ完形の土器である。口縁部文様帯の直下に、胴最大幅があり、文様帯の中央部がかなりくびれ、その上の口縁部は外反する。底部は、底から1.5cm程の所がややくびれ、その下は閉き張り出しているもので、全体に細長い土器である。底部は1/4程しか残存しないが、圧痕文はない。内外面に刷毛目状の整形痕が明瞭に認められるが、外面は縦、内面は横と斜めで、共に底部近くは整形痕は認められない。文様は、口唇部内外に棒状工具による縦からやや斜めの三角形の刻目があり、また口唇部9cm程には幅1mm程の細い沈線文が24本前後不規則に横に巡り、所々2股に分かれたり、あるいは交叉している（図版4-1）。

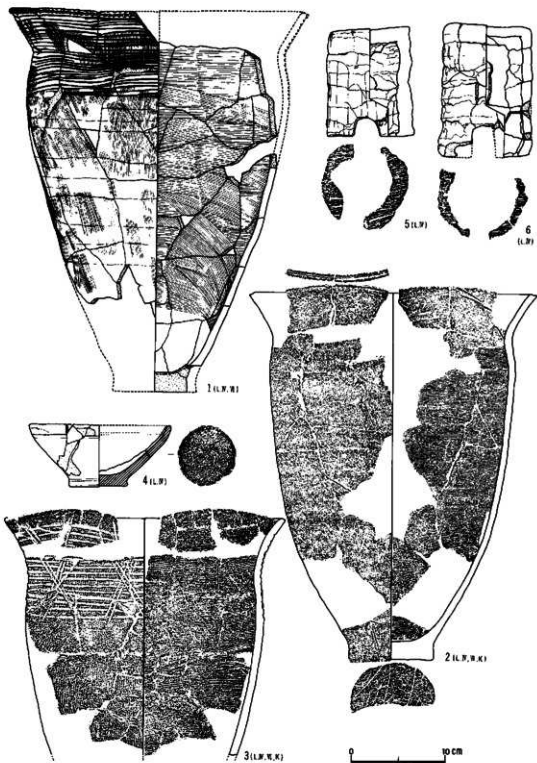
同図2は、推定器高39cm、推定口径30.5cm、底径8cmの半完形土器である。底から33cmまでは接合したが、口縁部は同一個体と考えられる3片の破片から推定した。胴部最大幅は、口唇部下7cm程の所にあり、その上は若干くびれ口縁部はゆるく外反し、底部はややくびれ軽い張り出しがある。整形痕は、1と同様に入っているが、外面のはかなり磨り消されている。口縁部には、特に文様はなく、くびれ部分の整形痕が所々横に走っている程度である。口唇部上は、棒状工具による整形で、浅く窪んでいる。底には、笹の葉の圧痕がある（図版5-2A、B）。

同図3は、3片の大形破片から推定したもので、推定口径は約30cmである。整形痕は、1、2と同様で、内外面共に明瞭に残っている。口唇部下11cm程まで幅3mm位の横走沈線文が15本程規則的に巡り、その間に2本単位のX字状の沈線文が7-8cm間隔で入っている。器形は、文様帯直下に胴最大幅がきて、文様帯の中央で若干くびれ、その上はゆるく外反する（図版4-2A、B）。

第10図3は、口縁部の破片で、口径の開きからみて、前述第9図2に近い器形になると思われる。口唇部上は2と同様浅く窪み、口唇部下2、3cmの所に細い沈線文が1条横に巡るが、一部消えている所もある（図版5-1）。

色調は、4例とも灰褐色～暗灰褐色である。

第10図1、2は、同一個体の須恵器の甕（広口壺）の口縁部破片である。推定口径10cm、口縁部の頸部のくびれ部分の推定径は8cm程である。胴部はかなり大きく膨らみ、口縁部は外反し、口唇

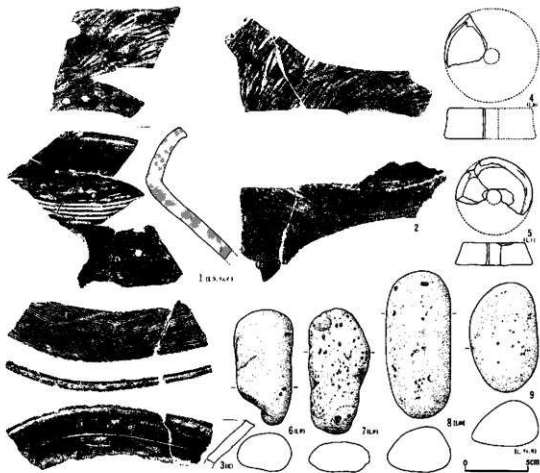


第9圖 第1号壑穴住居址出土遺物(1)

部には張り出しがある。頸部のくびれより下の内面には、木目様叩き目痕が残っているが、上部はかなり消されている。また、くびれ直下の外面にも、横に規則的な叩き目痕が一部残っている。破片内の胴部外面と口唇部上には、緑色のまだらな自然釉がかっている。また、口頸部の内外は、黒灰色で、光沢がある。胴部内面および胎土の色調は灰色で、やや細砂が多く吸湿性が高い(図版6A)。

第9図4は、環の半完形土器である。器高6.6cm、口径15.1cm、底径6.1cmの大きさで、口唇部下1cm程の所に、浅く細い沈線文状のものが部分的に認められる以外文様はない。この部分から口縁部は、ややきつく立ち上がり、内面のこの部分は浅く窪んでいる。底部は、甕形土器と同様な作りで、ややくびれ張り出しがあり、低い台がついていると表現できる。底面には、刷毛目状工具によるU字状の整形痕(文様?)がある。これは、回転糸切り痕を模したものであろうか。内面から外面の口唇部直下までは黒色処理がなされ、特に内面は、篋ミガキによって光沢をもつ程磨き上げている(図版4-5)。なお、環の破片は、これ以外には覆土から1片出土しただけである。

第9図5, 6は、支脚である。5は、全く欠損なしでみつかった。器高11.6cm、上辺径8.3cm、



第10図 第1号壑穴住居址出土遺物(2)

下辺径9.2cmで、上辺がほぼ平らで、下辺が開いた中空のものである。内外面の所々に1.5～2cm程の厚さの輪積み痕が明瞭に残るが、外面は幅広(1cm程)の工具で縦に寛ケズリが施されている。下部には、2.5×2cm程の窓が対で開けられ、底面は整形痕のような刷毛目状の圧痕がある。6は、高さ14.2cm、上辺径8.5cm、下辺径8.3cmの長方体である。内外面には、輪積み痕が明瞭に残る。他は、5と同様である。色調は、共に灰褐色であるが、6の方は、所々赤褐色を呈し、加熱され跡いが、5は、加熱された痕は顕著ではない(図版4-3, 4)。

第10図4, 5は、土製紡錘車である。4は、1/4程の破片で、上辺径6.4cm、下辺径7.5cm、厚さ2.5cm、穴の直径1.3cmで、側面は浅く窪んでいる。5は、1/2程の破片で、上辺径5cm、下辺径6cm、厚さ1.8cm、穴の直径1.2cmで、断面台形のものである。現在52gで、本来は80g前後あったと考えられる(図版6B-1, 2)。

同図6～9は、長さ9～11cm、幅4～5cm、厚さ3.0～3.5cm前後の棒状の自然礫である。特に加工、使用痕はない。重量は、148～380gである(図版22B-1～5)。

第2節 第2, 3号竪穴住居址 (第11~18図, 図版7A~11A)

第2, 3号竪穴住居址は、共にC, D-II区にあり、第3号は、第2号の北側に重複し、第2号の覆土を切って構築している。従って、第3号の方が新しい。

第2号竪穴住居址 (第11図) は、長軸5.54m, 短軸4.5mの大ききで、隅丸長方形を呈する。確認面からの壁高は51~54cm程である。かまどは、北壁中央より西53cm程の所において、煙道はほぼ北に走る。主軸はN356°E。住居址中央の床面直上 (第V, VIa層中) に、56×35cmの大ききの楕円形の焼土と炭の薄層からなるマウンド (厚さ5~10cm) がある。柱穴は、SP-1の1本 (21×21cm, -23cm) しか検出できなかったが、本来は4本柱の住居址であったと考えられる。

セクションは、南北方向1本しか示さなかったが、以下のとおりである。

第I層：暗黄褐色砂質土層。

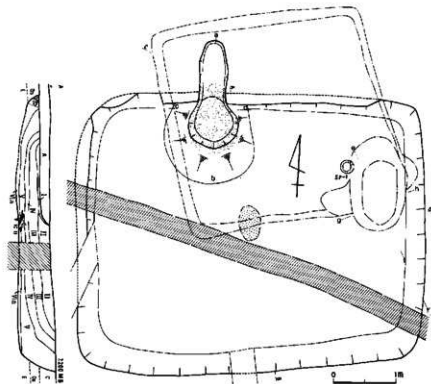
第II層：黄褐色 (砂質) 土層 (やや粘性あり)。

第III層：暗黄褐色砂質土層。

第IV層：黄褐色粘質土層。

第V層：暗黄褐色粘質土層 (シルト質に近い)。

第VIa層：褐色粘質土層 (炭を含み、遺物を多く包含した層)。



第11図 第2号竪穴住居址実測図

第VIb層：暗褐色砂質土層。

地山は、

C層：暗黄褐色砂質土層。

Da層：(灰)黄褐色砂質土層。

Db層：灰褐色砂質土層。

E層：灰黄褐色粘土層で、C、Da・Db、E層は、第5図のセクションの各々第3、4、6層に対応する。第5層の泥炭層は認められなかった。A層は、第3号竪穴住居址の覆土である。層の流れは、第VIa層が床面について5cm程の厚さで堆積し、第V層は、壁面から第VIa層上部に比較的厚くある。全体に、前述した第1号竪穴住居址に比べ総合的な堆積の仕方をしている。なお、住居址東側の堆積も、本セクションとほぼ同様のものであった。第16、18図に示した遺物は、第18図8～10例を除いて、すべてこの第V、VIa層中から出土したものである。なお、住居址中央床面には、野球場の排水溝が走っている。

かまど(第12図、図版7B)については、煙道の方はN359°Eで、ほぼ北に延びている。軸は、床面より中央で約7.5cm、壁付近で14～17cm程全体に高く造られている。大きさは、1.42×1.34mである。その中央に、81×74cmの大ききで、地山面の焼けた炊口があり、若干窪んでいる。煙道は、下場で90cmの長さがあるが、中央部は第3号の構築と発掘時の確認の際削平し、不明である。

層位は、

第I層：灰褐色砂質土層。

第II層：暗灰褐色砂質土層。

第IIIa層：暗褐色土層(多くの炭粒に若干の焼土粒を含む)。

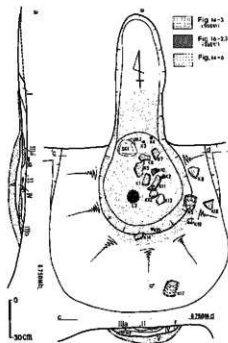
第IIIb層：(灰)褐色土層(多くの焼土粒に若干の炭粒を含む)。

第IV層：白灰褐色灰層(所々に大粒の焼土粒が入る)。

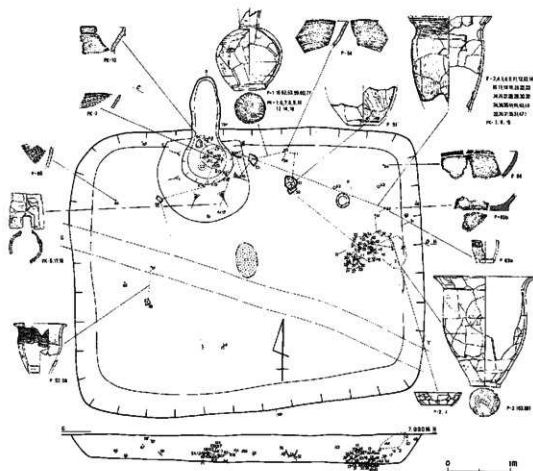
第V層：赤褐色焼土層(地山)。

遺物の出土分布は、第12、13、15図にそのすべてを图示した。

第16図1の壺形土器(図版8B)は、住居址東壁中央の第V層中よりまとまって出土したもので、出土レベルは、壁際に沿って覆土上部～中位である。なお、直接接合しないが同一個体と思われるP-63は、床面直上から出土している。同図2は、1の若干西よりの床面からその直上(第V、VIa層)に集中し、それにかまど付近にも破片が若干とんでいる。同図3の須恵器



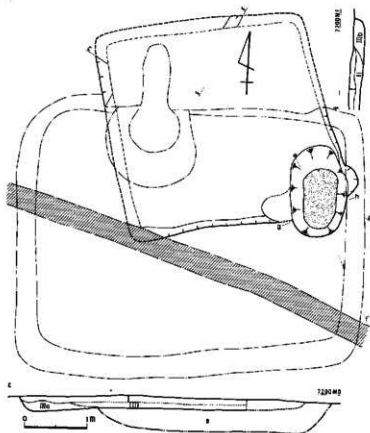
第12図 第2号竪穴住居址かまど実測図



第13図 第2号竪穴住居址遺物出土分布図

器の長頸壺（図版8A）は、半数近くがかまどの覆土上部に貼付されたような状態で出土し、それ以外は、かまどの東側と西側に散発的にみつかっている。いずれも、床面か床面直上のレベル（第V、VIa層）である。同図4、5は、やはり東壁付近の床面直上（第V層）のレベルから、6の支脚は、かまどの軸からみつかっている。第18図1～4の須恵器の坏および甕の破片は、かまど覆土とその東、西の床面直上（第V層）から出土し、第16図1を含めて、第16図1～7、第18図1～4、5～7などは、すべて同時期の所産の可能性が強いと考えられる。なお、第17図1は、覆土上部（第II層）と攪乱層中からみつかったもので、本住居址に伴うものかどうかは明らかではない。

一方、第3号竪穴住居址（第14図）は、第2号の北東部に半分以上重複して、その上部に構築されたものであるが、北側の地山層は、後世の攪乱をうけており、壁・床面などの全体形は、明確に捉えることはできなかった。小トレンチに沿うセクションラインで推定したプランは、3.47×3.34mの大きさの隅丸方形の住居址であった。壁高は確認面から21～24cm程である。かまどは、南東隅に壁に平行して設けられ、煙道はほぼ南に向いている。主軸はN79°Eである。柱穴は、確認で



第14図 第3号竪穴住居址実測図

層堆積は、

第Ⅰ層：暗黄褐色粘質土層。

第Ⅱ層：暗黄褐色土層。

第Ⅲ層：茶褐色土層（焼土粒と炭粒を主体とする）。

第Ⅳ層：黒色炭層。

第Ⅴ層：灰褐色灰層。

第Ⅵ層：黒色炭層。

第Ⅶ層：赤褐色焼土層（地山）。

かまどの作り方は、第Ⅰ層が二次堆積したものとは断定できなかったため明らかではないが、g-hセクションで判るように、かまど内は77×10cmの大きさで、かなり横幅がある。下底面は、煙出口に向かってゆるく上っている。

遺物で、本号に明らかに伴うと考えられる資料は、第17図2の環Ⅰ点である。かまど内に逆さに置かれた状態（第15図）で出土した。全体に焼けている所から、支脚として再利用されていた可能性がある。

きなかったが、後述する同形態の第4、5号竪穴住居址の例からみて、伴わない可能性が強い。

層堆積は、

第Ⅰ層：灰黄褐色粘質土層。

第Ⅱ層：茶褐色砂質土層

（リモナイト沈澱）。

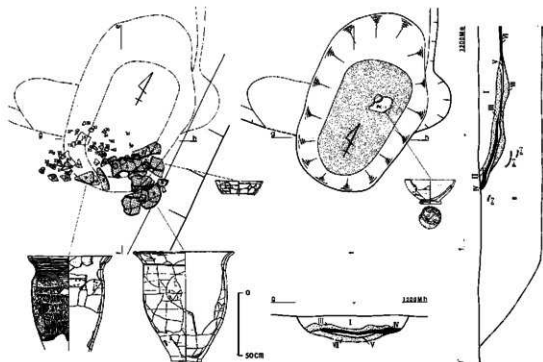
第Ⅲa層：暗褐色砂質土層。

第Ⅲb層：灰白色砂質土層

（ややしまっている）。

なお、C-Dセクションにおいては、層の乾燥状態が著しかったため、第Ⅰ、Ⅱ層は明瞭に分層できなかった。B層は、第2号竪穴住居址の覆土である。

かまど（第15図）は、大きさ148×93cmの楕円形で、下底面は焼けている。方向はN153°Eである。



第15図 第3号竪穴住居址かまどおよび第2号竪穴住居址遺物出土状態実測図

遺物(第16~18区, 図版9~11A)

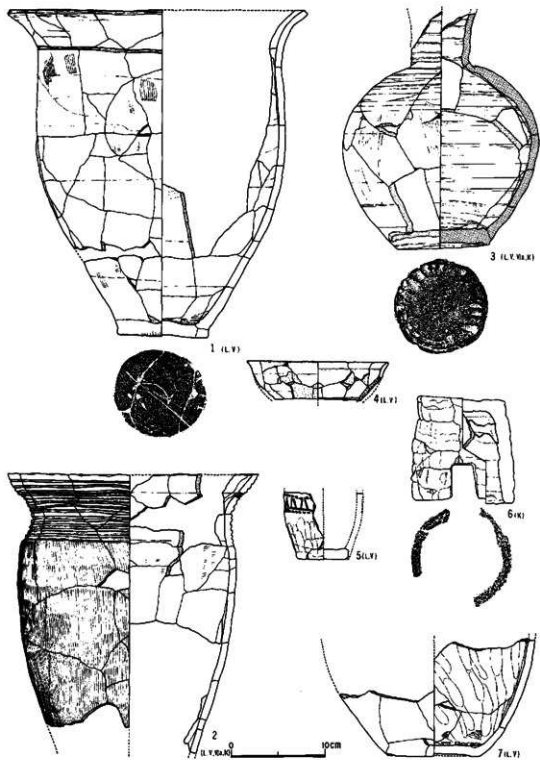
第2号竪穴住居址出土遺物は, 第16, 18図, 第17図1の資料である。

第16図1, 2, 5, 第17図1, 第18図3, 4, 7, 8は変形土器である。

第16図1は, 器高34.7cm, 口径31.7cm, 底径9.6cmの大形品で, 胴最大幅が器中央にあり, そこからほぼ真直ぐに立上がり, 口唇部下4cm程の所に幅広の浅い沈線文が1条横に巡る。そこから口縁部は外彎している。口唇部上は, 整形で若干窪んでいる。整形は, 刷毛目状の整形痕が外面のごく一部(実測図下部中央)にしか認められず, あとは内外面共整形(ナデ?)され, 外面はかなり平滑に仕上げている。底面には, 圧痕(笹の葉)がある(図版9-1)。

同図2は, 口径26.5cmのやはり大形の土器で, 口唇部下7.3cm程に段があり, この上に文様帯が展開する。文様帯の中央は若干くびれ, 口縁部は外反し, 全体にやや細長い器形である。口縁部文様帯は, 約14本の段が横に巡るが, 上の方は沈線文状になっている。口唇部は, 寬によって若干窪ませている。整形に関しては, 外面のは胴部に縦方向の刷毛目状整形痕が明瞭に認められるが, 内面は横方向の刷毛目状整形痕が一部残る程度で, 寬ミガキによってほとんど平滑になる程磨き上げている(図版10-2)。色調は, 1は褐色から灰褐色, 2は灰褐色から暗灰褐色である。

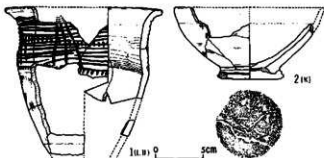
同図5は, 小形品で, 口唇部は欠損している。底径5.4cmと底の大きい土器で, 文様帯部分は破片内ではややすぼまっている。文様は, 上下に三角形の横走る刺突文列があり, その中に鋸歯状と横走る沈線文がある。外面は, 手摺の痕が残るが, 内面は, ナデにより平滑になる程入念に仕



第16图 第2号型穴住居址出土遺物(1)

上げている(図版9-2)。

第17図1は、底部を欠くが、現存高16cmで、本来は17.5cm程であったと考えられる。口唇部が 16.2×15.3 cmと、横断面が楕円形の中形の土器である。胴最大幅から上は文様帯で、若干くびれながら口唇部付近は強く外彎している。文様は、細い沈線文が横に不規則



第17図 第2号(1)、第3号(2) 壺穴住居出土土遺物(2)

に走り、その上に3本単位の沈線文が縦に6単位入っているが、その間隔は不規則である。口唇部の外角には刻目が入り、上は沈線文状に窪んでいる。整形は、外面は縦の刷毛目状整形痕が残るが、全体に粗い横方向のナデによってかすれている。内面は、横の刷毛目状整形痕が一部に認められるが、ほとんどの部分は横方向の寛ミガキによって消えている(図版10-4)。

色調は、5は暗灰褐色を基調とし一部黒褐色、第17図1は、灰褐色である。

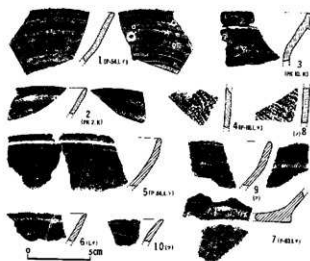
第18図7は、中形の変形土器の底部片で、内面は黒色処理されている。

第18図3、4、8は、須恵器の甕の破片で、色調はいずれも灰色を呈する。3は、口縁部片で、轆轤水挽き成形痕が残る、破片内の下部からゆるく外反している。口唇部直下には、鋤状の張り出しがある。4、8は胴部の小片である。叩き目痕(珠数状)が外面にある。器厚は5mm前後で薄い(図版11)。

第16図3は、須恵器の長頸壺である。口唇部と胴部の一部を欠損するが、あとはほぼ完形の土器である。現存器高25.2cm、胴部長18.8cm、胴最大幅20.8cm、頸部最小幅6cmの大きさで、頸部と胴部の間には段状にへこみがある。胴部は大きく球状に膨むが、左右で膨みが異なる。底には、貼付による低い台が作出され、底面外縁にその整形のための指頭(?)による斥痕(菊花状文)と一部にその後に加えられた沈線文がある。

製作方法は、頸部と胴部、底部を別々に作り接合したもので、底部は、円盤状の粘土板を胴部の内面に引いてかぶせて接合しており、頸部は胴部中にはめ込み状態でつけたものである。頸部と胴部は、最終ないしその前段階で、轆轤水挽き成形が認められ、頸部の内外面と胴部内面には轆轤痕が、そのまま残っているが、胴部の外面は上部を除いて、その後に入れられた縦(主体)と横方向のナデによる整形で、轆轤痕は消されている。器厚は、胴部で7~13mm、頸部で6mmで、色調は外面は暗緑色、内面は灰色で、胎土は赤褐色であるが、厚い所では黒色部分がサンドイッチ状にはさまれている。なお、現存部分の中においては、寛書き記号は認められない(図版9-4)。

7は、大形土器の底部位の破片である。底径9.6cmで広く、張り出しはない。器外面は加熱されたためか、全体に艶く元の面は一部しか残っていないが、かなり滑らかに調整されていたようである。内面は、幅広い工具(指頭?)による縦の整形痕と、底部と胴部をつないだ際の工具の刺突の痕がそのまま残っている。底面は、1/2近くが大きく剝脱している(図版10-3)。



第18図 第2号竪穴住居址出土遺物(3)

第16図6は、支脚である。器高11.4cmで、上辺径9.3cm、下辺径10.7cmで、やや下辺が広がっている。上辺面は、ほぼ平らで、一部ナデ痕が残っている。下の窓は3.5×2.7cmで比較的大きい。側面(胴部)には、1.5~2cmの粘土紐の跡が明瞭に残っているが、加熱され、全体に鈍くなっている(図版9-3)。

第16図4、第18図1、2、5、6、9、10は坏である。

第16図4は口縁部の1/4程の破片で、加熱され鈍くなっている。推定口径は、15cmで、口唇部下1.4cmまでの所は、浅く

窪んでいる。器厚は4mm程で薄いが立上りはかなりきつい所から、高さのある器形かと考えられる。整形は不明(図版10-1)。

第18図5、6、9、10は、内面と外面の上部に黒色処理が施された資料で、いずれも内外共器面は入念に整形(ミガキ)し、平滑になっている。5は、口唇部直下に段状に1本の沈線文が走る。胴部は、やや膨みがある。6も、口唇部直下に沈線文が走るが、浅く不明瞭である。9は、口唇部下2cm程の所からきつく立上る。10は、小片であるが、若干外彎の傾向がある(図版11A)。

同図1、2は、須恵器の坏の資料である。共に轆轤水挽き成形で、再調整はない。立上りは、きつい所から塊のような深い器形と考えられる。色は灰色であるが、1の口唇部からその下にかけては、重ね焼きした時の黒い痕がついている(図版11A)。

一方、第3号竪穴住居址出土資料は、第17図2の坏の半完形土器1点である。器高7.5cm、口径16cm、底径7cmを数え、口唇部下2cm程の所からきつく立上る。底部は別に接合したもので、低い台付坏ともいえる。台には沈線文が2本走り、段々になっている。外面下半には、刷毛目状整形痕が一部あるが、内外共に比較的に入念に荒ミガキによる整形をし、平滑になっている。器内の半分程は、黒色処理がされ、底面には笹の葉の圧痕がある(図版10-5)。

第3節 第4号竪穴住居址（第19図，図版11B～12B，22B-6）

C-Ⅲ区にあって、試掘調査の段階で確認されていたものである。3.98×3.78 mの大きさのやや不整の隅丸方形の住居址である。壁高は確認面から20～38 cmをはかり、柱穴は認められない。かまどは、東北東壁中央よりやや北北西（17 cm程）に炊口があり、煙道は南東方向に延びている。主軸はN69°Eである。

層堆積は、

第Ⅰ層：暗褐色粘質土層（耕作土。草の根を多く含む）。

第Ⅱ層：黒褐色土層（若干の黄褐色粘土粒が点在し、根を多く含む）。

第Ⅲa層：黒色土層（さくさくし、しまりが無い）。

第Ⅲb層：暗黒褐色土層（黄褐色の粘土粒を含み、堅くしまっている）。

第Ⅳ層：暗茶褐色土層（やや多く粘土粒を含み、第Ⅴ層への漸移的な層）。

第Ⅴ層：暗黄褐色粘質土層（若干炭粒を含む）。

第Ⅵ層：黄褐色砂質土層（地山）。

かまど（図版12A）は、特に炊口に掘り込みとか袖は認められず、床面と同一レベルの面が78×62 cmにわたって焼けているだけである。住居址内側（78×30 cm）は、炭が多く認められ、底（床）面はやや焼けている程度である。煙道側（78×32 cm）は、炭は殆どなく茶褐色に底面が焼けている。煙道はN131°Eの方向に走るが、煙出口付近は、排水溝による攪乱で切られ不明である。

層堆積は、

第Ⅰ層：灰褐色土層（黄褐色の粘土粒と小礫を含む）。

第Ⅱ層：暗褐色粘質土層（黒色土粒と粘土粒、若干の小礫を含む）。

第Ⅲa層：黄褐色砂質土層（かなりの炭粒を含む）。

第Ⅲb層：暗黄褐色（砂質）土層（若干の炭粒を含む）。

第Ⅳ層：暗黄褐色土層（第Ⅲb層より暗い）。

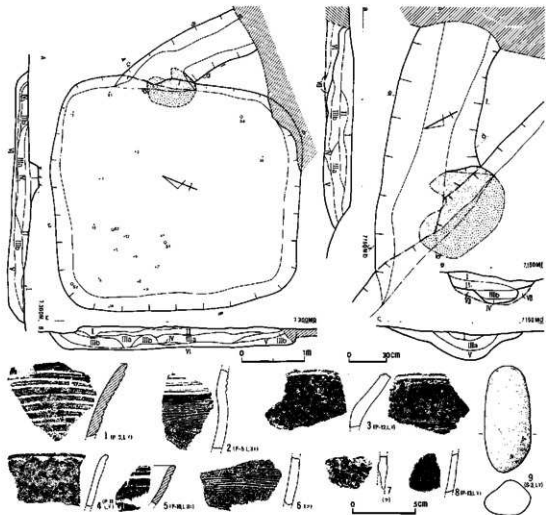
第Ⅴ層：黄褐色砂質土層（第Ⅲa層より、さらに炭粒を多く含む）。

第Ⅵ層：茶褐色砂質土層（若干焼け、炭粒も含む。地山）。

第Ⅶ層：暗黄褐色砂質土層（若干の炭粒を含む。地山）。

この中で、第Ⅰ、Ⅱ層は再堆積層で、上から掘り込んで作られ、e-fセクションで見ると、煙道は現在35×11 cmの大きさで、不整長方形を呈している。傾斜は、炊口付近でやや窪み、中央からゆるく上っている。

遺物の出土分布は、第19図の住居址平面図中に全点を示した。上器は破片ばかりであるが、殆ど床面ないし床面直上から出土している。棒状礫（S-3）、軽石（S-1、2）は床面から、黒曜石の削片（S-4）は覆土上部から出土している。



第19図 第4号竪穴住居址およびかまど実測図、同出土遺物

遺物 (第19図1～9, 図版12B, 22B-6)

1～3, 7, 8は、壺形土器の破片である。1は、ゆるく外脣し、横走する幅広の沈線文群がある。外面は、縦の刷毛目状痕があり、内面は内黒である。2は、やや胴張りし、その上に段状に沈線文群が横走する。横の刷毛目状痕がある。7は、2と同一体の胴部片と考えられるものである。3は、ゆるく外反する資料で、口唇部上と内面直下に段状に沈線文が入っている。8は、胴部片で、器厚5mmで、径も小さい所から小形品であつたろうか。色調は、灰褐色から暗灰褐色である。

4は、短頸壺の頸部の破片と思われるもので、立上りはきつい。口唇部はやや外に張り出す。色は、明るい灰褐色である。

5は、環の破片で、口唇部直下に深い沈線文が1条あり、内黒である。

7は、加熱されて、内外共に赤褐色を呈する胴部片で、器面がほとんど調整されていない。

は不明である。

9は、棒状の自然礫である。重量132g (図22B-6)。

第4節 第5号竪穴住居址 (第20図, 図版13A~14A)

D-Ⅲ区でみつかったもので、大きさ3.98×3.82mのやや不整の隅丸方形を呈するが、北西壁は攪乱が床面まで及び、立上りの一部を検出しただけである。壁高は、確認面から14cmである。かまどは、北東壁の南東よりあり、煙道は南東方向である。主軸はN57°E。柱穴はない。

層堆積は、

第Ⅰ層：暗黄褐色粘質土層。

第Ⅱ層：暗黄褐色砂質土層（堅くしまっている）。

これらの層の上部には、グラウンド造成の際の盛上が、10~5cm程の厚さである。地山は、黄褐色砂質土層であるが、床面直下には、一部泥炭を含む薄層（粘質土層）がかむ所もあった。

かまど（図版13B）は、全体で127×62cmの大きさの楕円形を呈し、その内住居址側の半分程の底面は焼けている。この部分から次第に上がり煙出口につながる。煙道の方位は、N123°Eである。なお、かまどの上部も削平され、煙道内部が確認面に露出している。

層堆積は、

第Ⅰ層：黄褐色粘質土層（焼土と炭粒を若干含む）。

第Ⅱ層：黄褐色粘質土層。

第Ⅲa層：茶褐色土層（炭粒を含む）。

第Ⅲa層：暗灰褐色土層（若干の炭粒を含む）。

第Ⅲb層：黒褐色土層（炭粒を主体とした層で、若干の焼土粒を含む）。

第Ⅲc層：暗黄褐色土層（若干の炭粒を含む）。

第Ⅳ層：黄褐色砂質土層。

第Ⅴ層：茶褐色土層（炭粒を含む）。

第Ⅵ層：赤褐色焼土層（地山）。

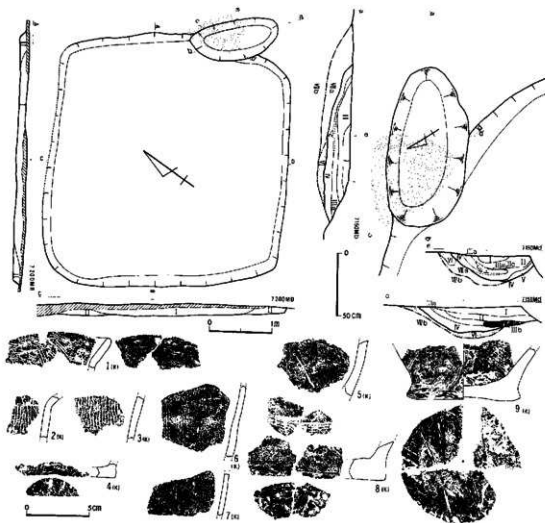
第Ⅶa, Ⅶb層：黄褐色砂質土層（aは、かたくしまり、bはやわらかい。地山）。

本かまども、上からの掘り抜きで、第Ⅰ、Ⅱ層は、埋土である。なお、第Ⅲ、Ⅳ層の層界、層中には薄い炭層（細かい破線で示した線：C）が数本人っている。なお、e-dセクションでみると煙道内部は、かなり横幅が広く作られているようである。

遺物は、かまど内覆土中と攪乱層中より、土器片が出土したが、住居址覆土からは、遺物は出土していない。

遺物 (第20図1~9, 図版14A)

1~4は、同一個体である。小形の菱形土器と考えられる。推定口径12cm、底径は5cmである。胴部は心持ち膨らむ傾向があり、口径部下2cm位の所から、強く外反する。刷毛目状整形痕が、内は横、外は縦・斜めに入っているが、内面は、その後荒ミガキで入念に調整されている。底面には、笹の葉の圧痕がある。色は、赤っぽい灰褐色。



第20図 第5号竪穴住居址およびかまど実測図，同出土遺物

5～9は，変形土器の破片である。5は底部位付近の破片，6，7は胴部片，8，9は底部片である。5～7は，外面には縦の刷毛目状痕が残るが，内面は篋ミガキで光沢をもつ程平滑に整形されている。9は，かなりの大形片で，底径9cmを数え，強い張り出しがある。底面には，笹の葉の圧痕があるが，縁辺を除いて，幅広の工具によって削りとられ凸凹になっている。色は，8が灰褐色，他は暗灰褐色である。

第5節 第6号竪穴住居址 (第21~24図, 図版14B~17B, 22B-7~11)

A, B-Ⅲ, IV区にまたがってあるが, 北西隅は, 敷地外のため確認できなかった。8.33×8.37 mの規模を有し, 今次発掘した住居址の中で最大のものである。プランは, 隅丸方形で, 壁高は確認面から55cm程である。柱穴は4本あり, 直径28~25 cm, 深さは33~37cmで, 真直ぐ掘られている。かまどは, 南壁中央にある。主軸はN173°Eで, ほぼ南北方向である。また, 住居址中央よりやや北の位置に, 焼土を主体とした, 大きさ54×37cm, 厚さ2~3cmの層があるが, レベルは, 床面より18 cm程上の第V層と第Ⅵ層の間にはさまれている。

層堆積は,

第Ⅰ層: 黄褐色粘土層 (二次堆積した盛土)。

第Ⅱ層: 黒褐色土層 (上部には, 二次堆積した粘土粒 (第Ⅰ層) を含む。第Ⅱ, Ⅲ層の間には, 炭の薄層(C)がある)。

第Ⅲ層: 暗黒褐色土層 (パミス (Pu) を所々にかむ)。

第Ⅳa層: 暗茶褐色土層 (粘土粒が点在し, 第Ⅱ, Ⅲ層に比べ堅くしめる)。

第Ⅳb層: 茶褐色土層 (粘土粒を多く含む)。

第Ⅴ層: 暗黄褐色粘質土層 (第Ⅳa層の土粒が点在する)。

第Ⅵ層: 黄褐色粘質土層 (第Ⅴ層より粘性が強く, 炭の薄層(C)を数層かむ。かまどおよび南壁側にのみ堆積する層)。

第Ⅶ層: 黄褐色砂質土層 (炭粒が点在し, 砂っぽい)。

第Ⅷ層: 暗黄褐色砂質土層 (かまどの袖。地山)。

なお, 東壁の南側の壁際セクション (E-Fセクション) は

a層: 暗黄褐色粘質土層 (上述の第Ⅴ層に対応)。

b層: 黄褐色粘質土層 (第Ⅵ層に対応)。

c層: 炭混じりの黄褐色(粘質)上層 (第Ⅵ層+炭(C))。

d層: 黄褐色粘質土層 (第Ⅵ層に対応)。

e層: c層と同じ層。

f層: 黄褐色砂質土層 (若干炭粒が混じる。第Ⅶ層に対応)。

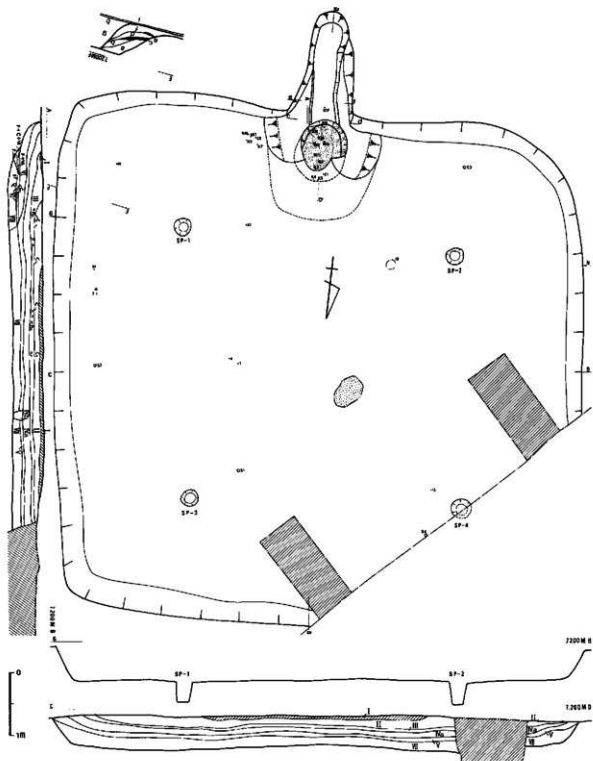
g層: 黄褐色砂質土層 (地山)。

h層: 泥炭層 (地山)。

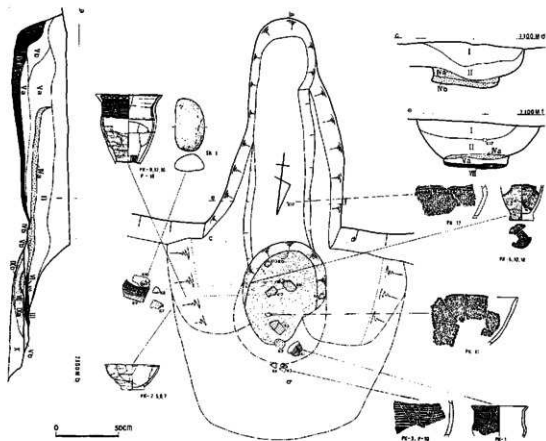
i層: 黄褐色粘土層 (地山)。

すなわち, 第Ⅶ層は, 住居址南側 (かまど側) においてのみ認められ, その中に炭の薄層が2~3枚かんでいる。壁は黄褐色砂質土層で, その下に泥炭層があるが, これは, 住居址東南隅付近では, 床面直下のレベルにあり, それが西にいくに従い漸次下がり, SP-2付近においては, 床面下45 cm程の所にある。泥炭層の下は, 黄褐色粘土層であるが, 床面には頭を出してはいない。

かまど (第22図, 図版15A) については, 袖は, 192×155 (推定) cmの大きさで13 cm程の高さの



第21图 第6号壁穴住居址实测图



第22図 第6号竪穴住居址かまど実測図

マウンドとして、現在確認でき、その中央に、97×73 cm程の大きさの一部がやや窪んだ炊口がある。炊口の底面付近の地山は著しく焼けている。煙道はN173°Eの方向に走り、長さは下場で1.63 mである。後述するように上からの掘り抜きで、煙道の大きさは、c-d, e-fセクションでみると現在52×12 cm程の長方形である。

層堆積は、

第Ⅰ層：(暗)黄褐色粘質土層（全体にやや暗く汚染され、南側は堅くしまっている。前述のA-Bセクションの第Ⅵ層に対応する層である）。

第Ⅱ層：黄褐色土層（若干の炭粒を含む）。

第Ⅲ層：黒褐色土層（炭を主体とした層で、焼土が若干含まれている）。

第Ⅳa, Ⅳb層：茶褐色土層（焼土と炭粒を含むが、第Ⅳb層の方が炭が多い）。

第Ⅴa, Ⅴb層：第Ⅴa層は、黄褐色砂質土層。第Ⅴb層は、暗黄褐色砂質土層（若干の炭を含む）。

なお、第Ⅴb層は煙道出口付近にのみ認められ、第Ⅴa層中にはさまっている。

第Ⅵ層：灰褐色灰層。

第Ⅶ層：茶褐色土層（炭と焼土粒からなる層）。

第Ⅴ層：黒色炭層（若干第Ⅴa、Ⅴb層の黄褐色砂質土粒を含む）。

第Ⅴa、Ⅴb層：赤褐色焼土層（第Ⅴb層の方は焼けが弱く全体に白っぽい。元来は、A-Bセクションの第Ⅴ層に対応する）。

第Ⅴ層：（暗）黄褐色砂質土層（A-Bセクションの第Ⅴ層に対応する）。

上述の内、第Ⅱ層は、煙道構築の際の埋土で、内部の充填層は第Ⅲ～Ⅴ層である。煙出口の大きさは、72×50cmで、楕円形と考えられる。

遺物の出土分布は、かまど周辺出土のものほとんどを、第21、22図に、住居址内出土物に関しては、主だったものを第21図に示した。

床面ないし床面直上（第Ⅵ、Ⅶ層）から出土した完形ないし半完形土器の資料は、第23図1（P-18、PK-9、12、16）、同図4（P-19）、同図5（PK-2、5、6、7）などで、いずれも住居址南側から、出土している。また、このレベルからは、他に23片の土器破片と軽石1個も出土した。かまど周辺では、かまどの炊口の内部（第Ⅵ層）から数多くの土器片（PK-1、2、5、6、11、12、13、15、16、18）が、またかまどの東側（第Ⅵ、Ⅶ層）から、PK-7～10、SK-1などがまとまって出土している（図版15B）。なお、これ以外では、第Ⅳa層中より比較的多くの土器片（30片）が出土している。覆土直上（第Ⅱ、Ⅲ層）では、9片の土器片が出土している。この中で、文様の判る変形土器の資料に関しては、すべて第23図1、2、第24図2～11のタイプであった。なお、第24図12（P-15）は、須恵器の甕の破片で、床面（第Ⅶ層）から出土している。

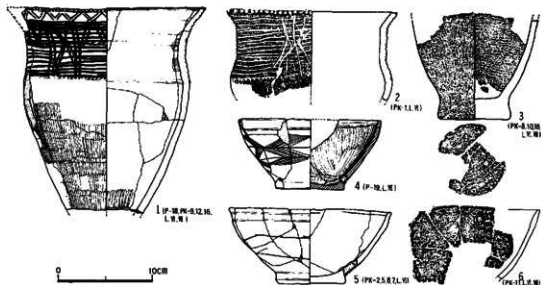
遺物（第23、24図、図版16～17B）

第23図1～3、第24図2～12は、変形土器である。

第23図1は、底部を除いて欠損がほとんどない土器である。現存器高21.5cm、推定器高は23cm程と考えられる。口径は21cm。胴最大幅から上は文様帯で、若干のくびれをみせてゆるく外彎している。文様は、口唇部直下に2本単位の鋸歯状沈線文、その下は17本程の横走沈線文が密に巡り、その中に4ヵ所、2本単位の縦の沈線文と、その間にX字状の沈線文の組み合わせの文様が入っている。また、横走沈線文群のほぼ中央に刺突文列を横に施し、この上には鋸歯状沈線文を加えている。また、口唇部の外の角と文様帯の下縁にも、刺突文（刻目）を入れている。口唇部上は、浅く窪んでいる。整形は、内外面共に寛ミガキが顕著（特に下半）に施されている。色は、灰褐色から暗灰褐色（図版16-1）。

同図2は、口縁部の1/4程の破片で、不規則な横走沈線文群の中に3本単位の縦・斜めの沈線文群がある。口唇部角と文様帯の下には刺突文列がある。その他、器形、口唇部の状態は1と同様であるが、外面は刷毛目状痕が一部観察できる。内面は寛ミガキ（図版16-2）。

第24図2～11も、前述の文様構成と同様の資料で、2、3は、やや幅広く浅い沈線文があり、3は、口縁部片で、口唇部は内傾して調整されている。4、5は、沈線文が細い例で、横走沈線文の上に3本単位の斜めに沈線文が入る。下縁には刺突文はない。6は、沈線文は細く深く、3本単位の斜めの沈線文は、途中でクロスしている。7～11は、浅くやや幅広い沈線文が施されたものであ



第23図 第6号竪穴住居址出土遺物(1)

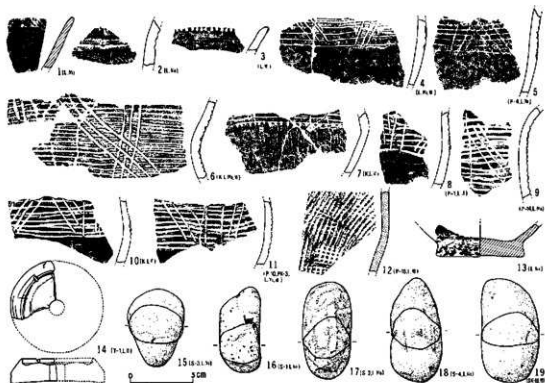
る。7には、下部に刺突文列があるが、8、10、11にはそれは認められない。2を除いては、いずれも口唇部に欠く。色調は、灰褐色から暗灰褐色（図版17A、B）。

第23図3は、底部片で加熱され、少し脆くなっている。底が2.1cmで厚く、張り出しがある。器形は、立上りがかなり急である所から、細長いものである可能性がある。底には、笹の葉の圧痕がある。色調は、一部赤褐色に変色しているが灰褐色を基調とする（図版16-3）。

第24図12は、1点だけみつかった須恵器の甕の胴部片である。器厚6mmで比較的大形品であったと考えられる。外面には、珠数状の叩き目痕があるが、内面は磨消されている。色は灰色（図版17B右下）。

第23図4～6、第24図1、13は環である。4、5は、ほぼ完形品である。4は、高さ7.4cm、口径15.2cm、底径7.2cmの平底のかなり深い器形である。3本の細い沈線文が横に入り、その間を斜めの沈線文群を2方向に繰り返して施し、綾杉文風に描いている。なお、口唇部直下にも、1ないし2本の不明瞭な浅い沈線文状のものがあるが、文様かどうかは不明である。内面と外面上部には、黒色処理が施され、また内面には寛ミガキ整形が放射状に入り、光沢のある部分もある。外面は、ナデ整形で、滑らかに調整されている。内部の底面は、中央がややとび出している。第24図13も、底部片であるが、本例に類似したタイプである（図版16-4）。

同図5は、器高7.9cm、口径17.3cm、底径7.1cmの大形品で、口唇部下1.3cmの所に段状に沈線文を入れ、その間は浅くへこんでいる。その下の胴部には、2本の細い沈線文が不規則に入っている。また、内面の口唇部直下にも、きわめて細い沈線文が1条ある。底は、低い台付とも表現でき、やや張り出しがあり、底面の内面は、丸くなっている。内面はミガキ、外面はナデによる整形をしている。色は、内外共に灰褐色を基調とし、一部うすい黒斑がある（図版16-5）。



第24図 第6号竪穴住居址出土遺物(2)

同図6は、4、5と同様の大きさの資料と考えられるが、口唇部から1cm程はややへこんでいる以外文様は特にない。内面は寛ミガキ、外面はナデと一部ミガキが入っている。色は、赤味がかった灰褐色(図版16-6)。

第24図1は、破片内外に黒色処理がされ、内外面共寛ミガキで平滑になっているが、内面の方が入念である。特に文様はない(図版17A左上)。

第24図15~19は、長さ8.3~6.2cm、幅4.5~3.2cm、厚さ3.2~2.7cmの棒状の白然礫である。特に使用痕はないが、15の図示面下部と19の図示裏面の一部は黒くすすけている。重量は、92.5~157.9gである(図版22B-7~11)。

第6節 第7号竪穴住居址（第25図，図版19A，22A-A）

E、F-N区にあり、グラウンド造成のため壁の上部は削平され消失している。現在確認できる大きさは、5.57×5.0mで、プランは隅丸方形である。かまどは、南壁にあるが、かまどの上部も削平され、下底部の一部しか確認できなかった。主軸は、N166°E。柱穴は、四隅に1本ずつある。排水溝による攪乱が中央を走る。また、北壁の西側付近は、浅い2～3cmの帯状の窪みがあった。

層は、床面直上の1層のみ確認した。

第I層：灰褐色粘質土層。

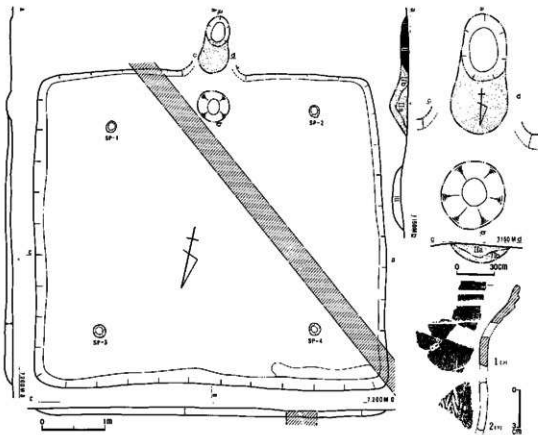
床面直下の地山は、褐色砂質土層で、リモナイトを多く含んでいる。

かまど（図版19A）は、下底面の炭層と焼土面しか遺存せず、全体の構造・形態は不明である。煙道の方位は、N178°E。

層堆積は、

第I層：黒色炭層。

第IIa層：赤褐色焼土層（地山）。



第25図 第7号竪穴住居址およびかまど実測図，同出土遺物

第Ⅱb層：黄褐色砂質土層（上部は軽く焼けた痕が確認できる。地山）。

なお、かまどの北側にある54×51cmの大きさの皿状の窪みは、炭混りの暗褐色土層（第Ⅲ層）で充填されていたもので、かまどに伴う施設であつたろうか。

遺物は、覆土中から若干の土器片を得たのみである。

遺物（第25図1，2，図版22A-A）。

1は、口縁部の破片で、全体にゆるく外彎しながら、口唇部近くで強く立上っている。この部分に2本の沈線文によって段が作出されている。また、その下にも同様の低い段がある。破片内の下部には沈線文の断片が認められるが、構成は不明である。内外面共に黒色処理が施され、外面には刷毛口状痕、内面には寛整形痕（ミガキ）がある。2は、口縁部片で、鋸歯状沈線文群が密にある。

第7節 第8号竪穴住居址 (第26図, 図版18A, B, 22A-B)

D-II, III区にあり, 北東壁が一部残るが, あとは壁および床面の一部まで削平されている。推定では, 一辺5~4.5mの大きさであったかと思われる。かまどは, かなり残っており, 北東壁の中央にある。柱穴は, 4本あるが, すべて不整形である。

かまど (図版18B) の煙道は, N 56° E に走り, 南西側72×63cmの範囲の底面は焼けており, 袖が認められた。

層堆積は,

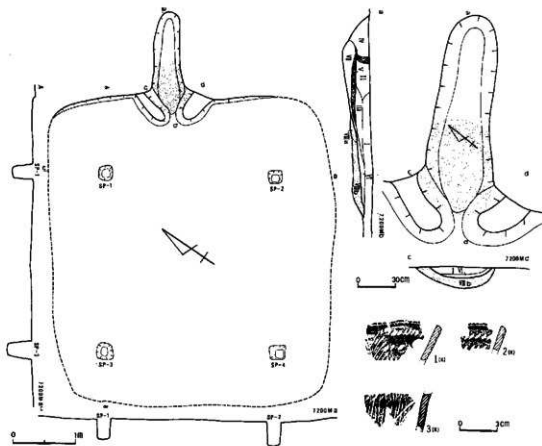
第I層: 暗赤褐色土層 (焼土と若干の炭粒点在)。

第II層: 暗黄褐色粘質土層 (所々黒くすすけた状態になっている)。

第III層: 黒灰色土層 (炭粒を多く含んだ黒色土層中に, 粘土粒点在)。

第IV層: 暗黄褐色粘質土層。

第V層: 黒色炭層。



第26図 第8号竪穴住居址およびかまど実測図, 同出土遺物

第Ⅰ層：褐色土層（灰を含む）。

第Ⅱ層：第Ⅲ層と同じ。

第Ⅳa層：暗茶褐色土層（全体に黒くすすけ、焼けている。地山）。

第Ⅳb層：赤褐色焼土層（地山）。

この中で、第Ⅰ、Ⅱ層は、かまどの覆土で、従って掘り抜きによって作られたと考えられる。

遺物は、かまどの覆土中から土器片が数点みつかったのみである。

遺 物（第26図1～3、図版22A～B）

1～3は同一個体である。3で見ると、口縁部上部でゆるく外反する器形と考えられる。口唇部はやや外傾する。文様は、やや長めの刺突文列と、斜めと縦の沈線文群の組み合わせがあるが、全体の文様構成ははっきりしない。内外面共、黒色処理がなされ、内面は寛ミガキによって光沢をもつ程平滑に仕上げている。

第8節 第9a, 9b号竪穴住居址 (第27, 28図, 図版19B, 20, 22B-6)

C-IV, D-III, IV区で見つかったものであるが、野球場のフェンスおよび排水溝などの最近の擾乱が随所に入り、さらに確認面の地山層と覆土との差が不明瞭であったため、小トレンチを数本入れて確認した。その結果、上下2つの遺構が見つかった。

上の遺構(第9a号)は、平面図中の大きい方のプランのもので、1cm程の厚さの炭層の分布面(3.54×3.26mのL字状の範囲)で捉えたものである。東西の長さは4.5mであるが、北壁は擾乱のために検出できなかった。壁高は28cm程である。

層堆積(A-B, C-Dセクション)は、

第I層:茶褐色土層(下の第IIa層が全体に黒褐色に汚染された層と思われる)。

第IIa層:暗黄褐色粘質土層(炭粒を若干含む)。

第IIb層:灰黄褐色粘質土層。

第IIIa層:暗黄褐色砂質土層(下底面に、炭の薄層が水平的に分布する)。

第IIIb層:暗黄褐色砂質土層(炭粒を若干含む)。

第IIIc層:灰黄褐色砂質土層(炭粒を殆んど含まず、リモナイト附着)。

第IV層:灰黄褐色砂質土層(炭粒を若干含む。第9b号の覆土上部の層)。

地山は、

A層:黄褐色粘質土層。

B層:暗灰黄褐色砂質土層である。

下の遺構(第9b号)は、東西3.9mで、西壁は上の遺構と一致している。壁高は、確認面から55cm程、上の遺構の床面から27cm程である。東壁にかまどがある。主軸はN89°Eで、柱穴は、上下共に検出されなかった。

かまどの煙道は、小トレンチによって一部実測できなかったが、推定全長76cmで、ほぼ東(N86°E)に向いている。炊口は、68×66cmの大きさで円形にやや窪み、底面付近の地山は焼けている。

層堆積は、

第I層:(灰)褐色砂質土層。

第II層:黒色土層(炭を含む)。

第III層:灰褐色灰層(若干焼土粒を含む)。

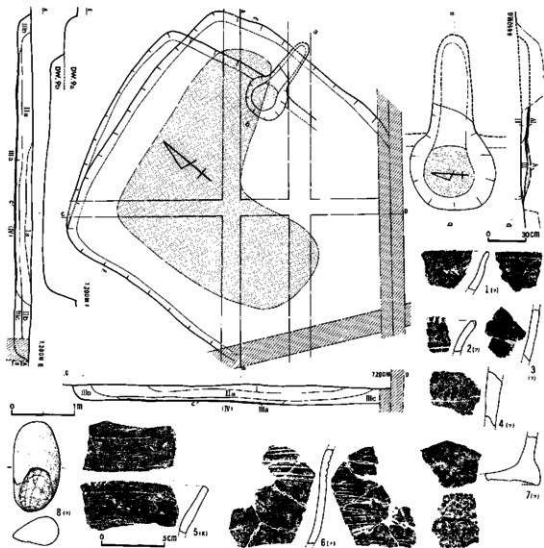
第IV層:黒色炭層。

第V層:赤褐色焼土層(地山)。

なお、両者は一部壁を共有している点から、改築された可能性が高い。

遺物は、第9a号の覆土中(特に第IIa, IIIa層)から、かなりの土器が出土している。ただ、その内半数近くは、焼けて脆くなっており、床面の炭層の由米と関連する可能性がある(第27図1-4, 6, 8, 第28図)。

第9b号では、かまどの覆土中から若干の土器片を得たのみである(第27図5)。



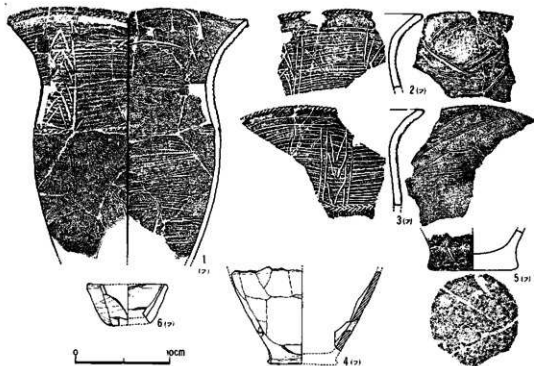
第27図 第9a, 9b号竪穴住居址およびかまど実測図, 岡出土遺物

遺物(第27図1~8, 第28図, 図版19B, 20, 22B-6)

第28図1~5, 第27図2, 3, 5~7は変形土器である。

第28図1は, かなり大形の破片から推定した復元実測図である。推定口径25.5cmで, 胴最大幅より上部に文様帯が展開する。横走沈線文が密(約22本)に施され, その上下に刺突文列がある。その中に縦の沈線文にはさまれた山形の沈線文群と, 断片で明らかではないが, 鋸歯状の沈線文群の組み合わせがあるようである。口唇部は外傾して調整され, その角に刺突文列(刻目)がある。器内外共に風化が著しいが, 刷毛目状痕が観察できる(図版20-1A, B)。

同図2, 3は同一個体である。口縁部は外傾し, ここに横走する不規則で密な沈線文群とその間



第28図 第9a号竪穴住居址出土遺物

に2本単位の縦の沈線文にはさまれて、1、2本単位の山形、逆山形の沈線文がある。文様帯の下縁には、逆くの字形の刺突文列がある。口縁部は、やや内傾し、浅く窪み、外の角には刻目がある。内外面に刷毛目状痕があるが、内面は、ナデと一部荒ミガキでさらに平滑に整形している（図版20-2A、B）。

第27図2は、口縁部小片で、刻目と沈線文がある。3は胴部片、5は、大形品の口縁部片で破片内では文様はない。6は、やや幅広いの浅い横走沈線文がある。同図7と第28図5は底部片で、5の底面には、笹の葉の圧痕がある。色調は、3のみは内外面共黒色であるが、あとは灰褐色を基調とし、一部暗灰褐色の部分がある（図版19B、20-5）。

第28図4は、推定底径7.5cm、器厚5mm程の薄手の中形土器の底部片である。内面は黒色処理が施され、荒ミガキで入念に整形されている。外面は刷毛目状痕が残るが、かなり平滑に仕上げている。底部には張り出しがある（図版20-3）。

同図6は、小形の鉢形土器である。高さ4.3cm、口径8.7cm、底径4.2cmで、特に文様はなく、内面は荒ミガキ、外面はナデによって整形されている（図版20-4）。

第27図1は、杯の破片である。口縁部外面下1.5cm程は浅くへこみ、内面には細い沈線文が1条ある。同図4は、加熱された全体に脆くなり、また器面の整形も特に認められない。器厚12mm。支脚の破片であろうか（図版19B）。

同図8は、棒状の自然礫で、重量は62gである（図版22B-12）。

第9節 第10号竪穴住居址（第29図、図版21A～22A-C）

F-VI、VI区に、1軒だけ離れてみつかった住居址で、規模は4.32×4.05mで、隅丸方形のプランを呈する。壁高は、確認面から19cm程で、上部は一部削平されているようである。かまどは、南西壁に3基並んで設けられている。主軸はN224°Eである。柱穴は、3本みつかったが、もう1本は北隅にあるマンホールの攪乱中にあつたと考えられる。また、中央に、排水溝による攪乱がある。

層堆積は、

第I層：黒色上層。

第II層：暗褐色（粘質）土層。

第III層：褐色上層。

第IV層：黄褐色砂質土層（地山）。

3基のかまど（図版21B）を、南東側からA、B、Cとすると、3基の関係は、切り合いがなく不明であるが、焼土層の厚さとか分布状態には、明瞭な差があるようである。

かまどAは、煙道の方位はN241°Eで、全長156cm、最大幅71cmで、3基の中で一番大きい。この内、中央部の100（推定）×77cmの範囲の底面は焼けていた。

層堆積は、

第I層：暗灰褐色粘質土層（炭粒を多く含む）。

第II層：茶褐色土層（焼土粒を含む）。

第III層：黒色炭層（灰が若干混じる）。

第IVa層：赤褐色焼土層（地山）。

第IVb層：灰白色粘質土層（上部は若干焼けている。地山）。

なお、かまどAのセクション、平面図中で、攪乱のスクリーンをかけてある所は、地層のひび割れの中に、青色砂層（B.S.）が入り込んだ所である。

かまどBは、煙道方位がN230°Eで、全体の規模は109×62cmの大きさであるが、この中の北東側67×62cm程の幅広い部分は、浅く窪み、また炭層が厚く堆積する所から炊口であつたかと思われる。煙道の長さは38cm程で短い。

層堆積は、

第I層：茶褐色土層（炭、焼土粒を含む）。

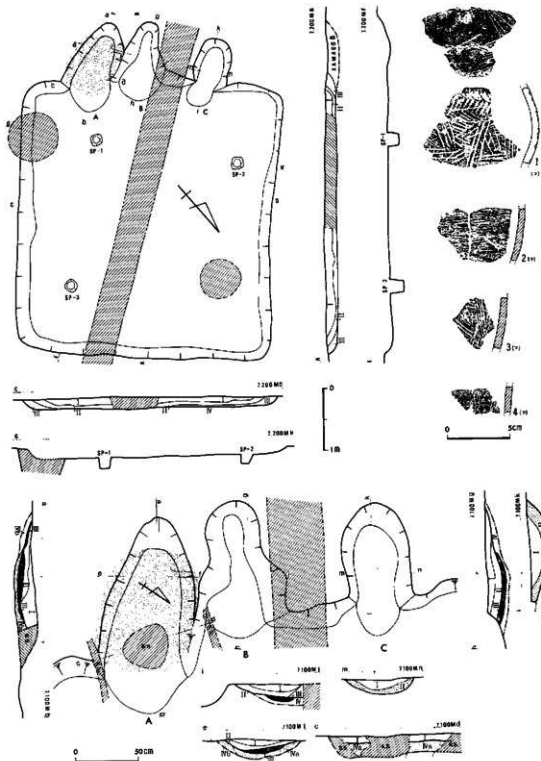
第II層：暗灰褐色粘質土層（炭、焼土粒を若干含む）。

第III層：黒色炭層。

第IV層：灰褐色粘質土層（若干の炭粒含む。地山）。

かまどCは、最も規模が小さく、105×54cmの楕円形を呈している。煙道方位は、N232°Eである。炭、焼土層はなく、かまどA、B程は使われていないようである。

層堆積は、



第29図 第10号竪穴住居址およびかまど実測図，同出土遺物

層堆積は、

第Ⅰ層：茶褐色土層（焼土粒を含む）。

第Ⅱ層：暗茶褐色土層（焼土粒、炭粒と灰を含む）。

遺物は、覆土中から土器片が数片出土しているのみである。

遺 物（第29図1～4、図版22A～C）

1は、破片内全面に沈線文があるが、器全体に膨みがあり、本来どのような器形なのか明らかではない。上部の逆くの字状の文様には、節が入っている。2～4は、同一個体の胴部片である。器厚5mm前後で、外面には刷毛目状痕、内面は黒色処理、ミガキが施されている。色調は、いずれも灰褐色。

第10節 ま と め (第30図)

本遺跡では、改築されたと考えられる例も含めて11軒の竪穴住居址がみつまっている。その概要については、第4表に示したとおりである。また、第30図には方位を一定にして、住居址の実測図を示した。

以下、紙面の関係で住居址の事実関係を、各項目毎に記載してまとめとし、特に対比とか考察は行なわない。

1 かまどの方位

本遺跡発見の11軒の住居址の内、第9a号はかまどを検出できなかったが、他の住居址においては1基あるもの9軒、3基あるもの1軒であった。かまどのある側の壁を天として、左右壁の方向から主軸を求めると第4表のようになる。大きく、4つの方向があることがわかる。

- (A) N350°~356°E (北)……第1, 2号。
- (B) N 54°~89° E (北東~東)……第3, 4, 5, 8, 9b号。
- (C) N166°~173° E (南)……第6, 7号。
- (D) N224°E (南西)……第10号。

煙道方位でみると、(B)が2つに分かれ、5つのグループになる。

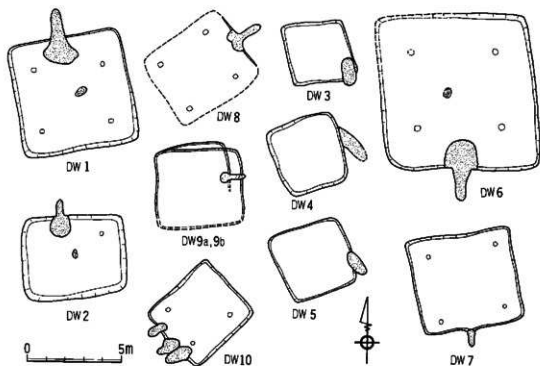
- (I) N352°~359°E……第1, 2号。
- (II) N56°~86° E……第8, 9b号。
- (III) N123°~153°E……第3, 4, 5号。
- (IV) N173°~178°E……第6, 7号。
- (V) N230°~241°E……第10号。

主軸と煙道方位の振れは、(I)タイプが、2~3°E、(II)タイプが、2°Eと3°W、(III)タイプが74°~62°E、(IV)タイプが0~12°E、(V)タイプが17~6°Eである。すなわち、(I)、(II)、(IV)、(V)タイプにおいては、振れは少ないか一致しているが、(III)タイプでは、煙道は主軸と関係なく、南東ないし南南東の方向に向いている。

かまどの位置は、(I)タイプでは、若干西側によるが、(II)、(IV)タイプは、壁のほぼ中央である。(III)タイプでは、第4号は壁中央に開口するが、第3, 5号においては、東南東壁の南南東コーナー付近にあり、壁とほぼ平行する状態で煙道が走る。(V)タイプの第10号においては、3基のかまどが検出されたが、それらの前後関係は明確にはできなかった。しかし、焼土層の厚さ、規模の点では、かまどAが最も利用され、一番大きい。かまどCには、焼土すら認められず、長期に亘って利用されたものではないと判断される。

2 平面形、規模

第8号と第9a, 9b号は、平面形の全容を明らかにすることができなかったが、他は以下の3種類



第30図 K446遺跡竪穴住居一覧表 (1:200)

の中にある。

- (1) 隅丸方形……第1, 4, 5, 7, 10号。
- (2) 隅丸平行四辺形(方形)……第3, 6号。
- (3) 隅丸長方形……第2号。

規模は、大略4つのサイズがある。

- (1) 長軸8.37m, 短軸8.33m……第6号。
- (2) 長軸6.2~5.54m, 短軸6.1~4.5m……第1, 2, 7号。
- (3) 長軸4.32m, 短軸4.05m……第10号。第9b号も入るかと思われる。
- (4) 長軸3.98~3.47m, 短軸3.82~3.34m……第3, 4, 5号。

3 柱 穴

柱穴は、4本柱を基調にするものと全く作なわないものがある。4本柱のものとしては、第1, 6, 7, 8号がある。さらに、第2, 10号は、攪乱と土層の関係で、すべてを検出しえなかったが、本来は4本柱の住居址と考えられる。第3, 4, 5号は、小規模の住居址で、柱穴はないようである。第9a, 9b号は、柱穴の有無の確認はできなかった。柱穴の形状、大きさについては、第3表参照。

第3表 K446遺跡竪穴住居址柱穴一覧表

竪穴住居址	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
第1号	1	24×23	54	掘り方、43×34(cm)
＊	2	26×25	20.5	＊、37×32、2段掘り込み
＊	3	22×17	49	＊、43×31
＊	4	26×21	38	＊、43×41、斜傾
第2号	1	21×21	23	他の3本未検出
第6号	1	28×25	33	
＊	2	28×25	37	
＊	3	28×27	34	
＊	4	31×(32)	36	半分未確認
第7号	1	18×15	16	
＊	2	19×16	21.1	
＊	3	20×19	16.7	
＊	4	19×18	11.2	
第8号	1	24×23	32	横断面隅丸方形
＊	2	22×21	37	＊
＊	3	27×26	39	＊
＊	4	25×22	36	＊
第10号	1	18×17	20	＊
＊	2	20×19	16	＊
＊	3	19×18	13	＊

4 炉 址 (?)

第1, 2, 6号の比較的規模の大きい住居址において、その中央部付近から、焼土と炭の薄層からなるマウンドがみつかった。いずれも、60～54×38～35cmの楕円形の範囲に分布するもので、厚さは、第1号では8cm、第2号では5～10cm、第6号では2～3cmである。堆積のレベルは、第2号にあっては、第V、VIa層中にあり、床面から床面直上にかけての部分であるが、第1号では第Vb層中で、床面より11cm上、第6号では、第V層と第VI層の間に挟まれており、床面からは18cm程上の高さで、直接住居址と関連しない可能性が強い。この点、今後の問題として残る。

5 かまどの構造

かまどの構造には、以下の3種類がある。

- (1) 第1, 2, 6号のタイプ
- (2) 第8, 9b号のタイプ
- (3) 第3, 4, 5号と第10号A, B, Cのタイプ

(1)は、規模の大きい住居址にみられるタイプで、袖は、現在床面より高さ7~14cm程のマウンドとして残っている。大きさは、1.92~1.42×1.55~1.34mである。このマウンドの中央に、浅く窪んで、床面が焼けた炊口と思われる所がある。97~80×74~52cmの楕円形を呈している。この炊口部内の充填層としては、一般に炭層および焼土と炭粒の混じった茶褐色土層が上部にあり、下部には灰層がある。いずれも、底面は10~7cm下まで及んで焼けている。煙道の長さは、1.63~0.9mである。煙道部における、内部の大きさは、現在第1号では41×8cm、第6号では52×12cmの長方形である。充填層は、第1号では、炭粒を含む砂層、第6号では、炭、焼土粒を含む茶褐色土層を主体にし、下部に炭層がある。煙道は、上からの掘り抜きで、掘り方は、煙道部よりかなり広く開けられている。なお、炊口部の充填層の上部は、砂質土層が堆積しているが、この中に数多くの土器片が入っていた。特に、第2号においては、その主体は須恵器の破片であった。かまどの壁を補強しているのであろうか。

(2)は、両側共上部の覆土は削平され、全体の構造は判断できないが、炊口は浅い窪みをなし、住居址内にあるものである。第9b号では、袖は明確ではないが、第8号では両袖が検出されている。いずれも、炊口部底面は焼けている。なお、第8号の煙道は、次第に下がっている。

(3)の例は、炊口と煙道とが特に区別できないタイプである。ただ、第4号では、煙道入口付近の床面が焼けていたことから、この部分が炊口であったものと考えられる。第3, 5号と第10号Aでは、かまど全体が、156~127×93~62cm程の大きさの楕円形をなして浅く窪み、底面は幅広い範囲で焼けていたものである。ただし、第5号では、焼土の範囲が住居址に近い側だけであり、また第3号では、支脚として坏が置かれていた所は手前の方であったことから、窪みの前半分程が炊口部に相当し、煙道部は短い広いものようであったのではないかと考えられる。第10号B, Cも、同タイプのものであったと思われる。

6 住居址の年代

11軒の住居址の中で、床面ないし床面直上、およびかまどから完形ないし半完形土器がまとまって出土しているのは、第1, 2, 3, 6, 9a号だけで、あとは覆土中から土器破片が出土したのみであった。前者の5軒について、後述(第4章、第2節)の時期区分で表現すれば、

- 第1号……據文第Ⅱ期後半
- 第2号……據文第Ⅱ期前半
- 第3号……據文第Ⅱ期後半~第Ⅲ期前半(?)
- 第6号……據文第Ⅲ期前半
- 第9a号……據文第Ⅲ期前半

同様に、後者側の覆土中遺物(土器片)の内容で時期区分すると、

- 第4号……擦文第Ⅱ期後半（住居址覆土）
- 第5号……擦文第Ⅱ期後半(?)（住居址覆土）
- 第7号……擦文第Ⅳ期（住居址覆土）
- 第8号……擦文第Ⅳ期（かまど覆土）
- 第9b号……擦文第Ⅱ期後半(?)（かまど覆土）
- 第10号……擦文第Ⅳ期（住居址覆土）

後者例に関しては、確証を欠く面があるが、一応、覆土中出土の遺物をもって住居址の年代とすると、時期毎には、

- 擦文第Ⅱ期前半……第2号
- 擦文第Ⅱ期後半……第1号、第4号、第5号(?), 第9b号(?)
- 擦文第Ⅲ期前半……第6号、第9a号
- 擦文第Ⅳ期……第7号(?), 第8号(?), 第10号(?)

となる。第3号は、時期を限定できないが第Ⅱ期後半か第Ⅲ期前半の所産である。

以上の年代とかまどの煙道方位を中心にした住居址の形態分類と対照すると、

- 擦文第Ⅱ期前半……〔Ⅰ〕（第2号）
- 擦文第Ⅱ期後半……〔Ⅰ〕（第1号）、〔Ⅱ〕（第9b号）、〔Ⅲ〕?（第3号、4、5号）
- 擦文第Ⅲ期前半……〔Ⅳ〕（第6号）
- 擦文第Ⅳ期……〔Ⅱ〕?（第8号）、〔Ⅳ〕?（第7号）、〔Ⅴ〕?（第10号）

なお、擦文第Ⅲ期後半の住居址は、今回の調査では検出されていない。

また、第2号と第3号は、重複した住居址で、第3号が第2号を切って構築している。さらに、第9a号と第9b号は、壁の1辺を共有している点から改築した住居址の可能性があると思われる。

第4表 K446遺跡竪穴住居址一覧表

竪穴 住居址	形 態	規 模 (m)			主 軸	柱 穴	かまどの 位 置	煙道の 方 向	備 考
		長軸	短軸	壁高					
主 要 遺 物									
1	隅丸方形	6.2	6.1	0.37	N350°E	4	北 壁 N352°E	住居址中央に焼土+炭のマウンドあり	
竈3, 環1, 支脚2, 須恵器大形甕破片(1個体分), 棒状燵5ほか(床面)								第Ⅱ期後半	
2	隅丸長方形	5.54	4.3	0.54	N356°E	1(+0)	北 壁 N359°E	住居址中央に焼土+炭のマウンドあり	
竈4, 環1, 支脚1, 須恵器長頸甕1, 向火破片1, 同燵破片3ほか(壁面~床面)								第Ⅱ期前半	
3	隅丸方形	3.47	3.34	0.24	N79°E	なし	南東壁隅 N153°E	第2号の上部に重複して構築	
環1:(かまど内)								第Ⅱ期前半~ 第Ⅲ期後半	
4	隅丸方形	3.98	3.78	0.38	N69°E	なし	東北東壁 N131°E		
竈・環破片(10数個体, 覆土中), 棒状燵1)								第Ⅱ期後半?	
5	隅丸方形	3.98	3.82	0.14	N57°E	なし	北東壁隅 N123°E	覆土上部削平	
甕破片若干(覆土中)								第Ⅱ期後半?	
6	隅丸方形	8.37	8.33	0.53	N173°E	4	南 壁 N173°E	住居址中央に焼土+炭のマウンドあり	
竈3, 環2, 須恵器甕破片1, 棒状燵5(床面)								第Ⅲ期前半	
7	隅丸方形	5.57	5.0	0.13	N166°E	4	南南東壁 N178°E	覆土上部削平	
甕破片若干(覆土中)								第Ⅳ期?	
8	隅丸方形 (推定)	(5.0)	(4.5)	不明	N54°E	4	北 東 壁 N56°E	床面まで削平	
甕破片若干(覆土中)								第Ⅳ期?	
9 ^a b	隅丸方形	4.5 3.9	不明	0.28 0.55	N89°E	未検出	東 壁 N86°E	2つの遺構, 改築(?)	
竈・環破片若干, 棒状燵1(覆土中)								第Ⅲ期前半 第Ⅳ期後半?	
10	隅丸長方形	4.32	4.05	0.19	N224°E	4	南西壁 A N241°E B N230°E C N232°E	かまど3基あり	
甕破片若干(覆土中)								第Ⅳ期?	

第4章 土器群について (第31~34図, 図版23~28A)

第3章の冒頭でも触れたとおり、第31~34図に示した発掘区出土遺物の主だったものはP-a-eの5地点と遺構のあったB-II、D-II区などから出土している。なお、P-a-e地点の遺物出土層準は、地山層に若干喰い込んだような状態で出土したものが多い。

各地点の出土資料を示せば、

P-a地点：第31図5、6、第32図5、第33図1、9、17、25~27、29

P-b地点：第32図1、9、第33図5

P-c地点：第31図1、3

P-d地点：第32図2、第33図7、23、28

P-e地点：第31図2

B-II区：第31図4、第32図3、4、7、8、11、第33図18~20、24

以下、器形毎に分類し、さらに各器形内でタイプ分類可能なものについては、文様・器形上から類・種分けした。なお、分類は遺構およびSW地区出土資料も考慮に入れて記述している。

第1節 分類

(I) 甕(深鉢) (第31図1、3~8、第32図1~3、6~11、第33図2、3、5~29、第34図49~51、図版23-1~5、24、25-3、4、26A、B、28A)

甕(深鉢)形土器は、大きく以下の8類に分けられる。なお、第1類は須恵器であるが、他は埴式土器である。

第1類(I-1) (第33図2、3、図版25B)

すべて須恵器で、2、3は胴部片である。外面には、2は珠数状の叩き目痕、3は格子目状叩き目痕があるが、内面は再整形され叩き目痕は消えている。2は器厚9mmで、灰褐色。3は器厚5mmで、外面は暗緑色、内面は暗灰色、胎土は赤褐色である。

第1号壺穴住居出土の第10図1、2、第2号壺穴住居出土の第16図3、4、8、第6号壺穴住居出土の第24図12も、この器形と考えられる。なお、第10図1、2に関しては、焼成は他の須恵器と明らかに異なり、前述したように自然釉がかかっている。第16図3は、口縁部片で、口唇部につば状の張り出しがある。

第2類 (第31図1, 3, 第33図5, 6, 図版23-1, 24-1, 25B)

口縁部に、段ないし段状の沈線文が1条あるか、それすらも認められないもので、口唇部にも刻目はなく、幾つかのものに整形による浅いへこみ(凹線)が認められる程度のもので、2種類ある。

a種 (I-2-a) (第31図1, 図版23-1)

沈線文によって段を作っているもの。第31図1は、器高32.4cm, 口径28.3cm, 底径9cmの胴部が細長く、口縁部の開きの大きい七器で、口唇部下7cm程の所に幅広い沈線文によって作出した低い段があり、その上3cm程の所から強く外反している。なお、くびれの部分には所々沈線文状に横に篋状の整形痕がある。器厚は3.5-4mmと極めて薄い。刷毛目状整形痕が、外面(縦)ではかなり残っているが、内面(横)ではごく一部しか観察されない。なお、内面に輪積みの粘上紐の接合面が所々明瞭に残っている。色は、暗灰褐色と赤褐色の部分とがあり、全体に艶い感じである。

b種 (I-2-b) (第31図3, 第33図5, 6, 図版24-1, 25B)

段がほとんど沈線文化し、その位置が口唇部近くになり、口縁部の開きも小さいもの。なお、沈線文すらも消失した資料もこの仲間に加える。

第31図3は、口径20cm, 胴最大幅15.8cmで、口唇部下4cmの最大幅の所に浅い沈線文を1条巡らせ、段的なものを出し、口縁部はゆるく外彎している。口唇部は、整形でやや窪んでいる。器内外共、刷毛目状整形痕の上から一部磨ミガキをしている。補修孔が1対あり、色は灰褐色。

第33図5, 6は、小片で段ないし沈線文の有無は明らかではないが、破片内で文様はないもので、共にゆるく外彎している。

同種の資料は、住居址出土例では、第9図2, 第10図3(第1号), 第14図1(第2号), 第19図3(第4号), 第20図1-4(第5号), 第27図5(第9b号)などがある。

第3類 (第31図4, 6, 7, 第33図7-12, 図版23-3-5, 25B)

本類は、口縁部に口唇部下1-2cmを除いて横走沈線文群が施されたグループである。口唇部には文様のない例が多いが、刻目のある資料も若干ある。3種類に分かれる。

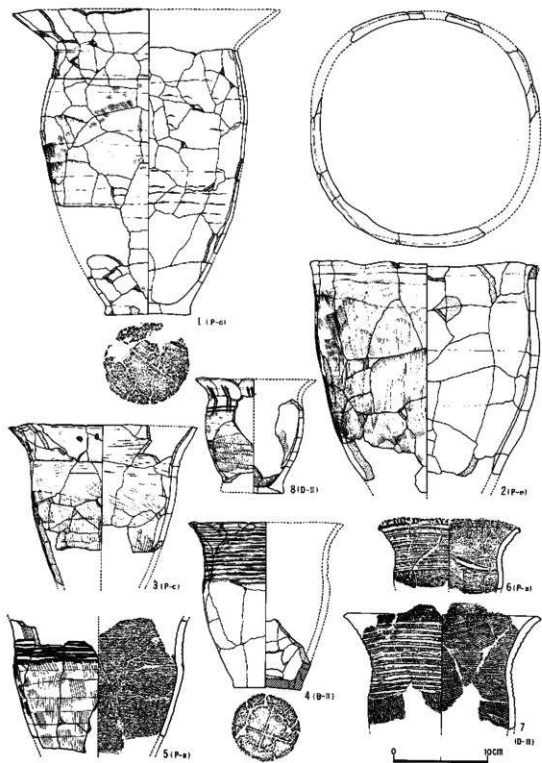
a種 (I-3-a)

本種は、発掘区からの出土例はない。第2号竪穴住居址出土の第14図2の資料が唯一のものである。段状に沈線文を巡らせたもので、胴部と口縁部文様帯の間には明瞭な段がある。口縁部の開きもかなり大きい。

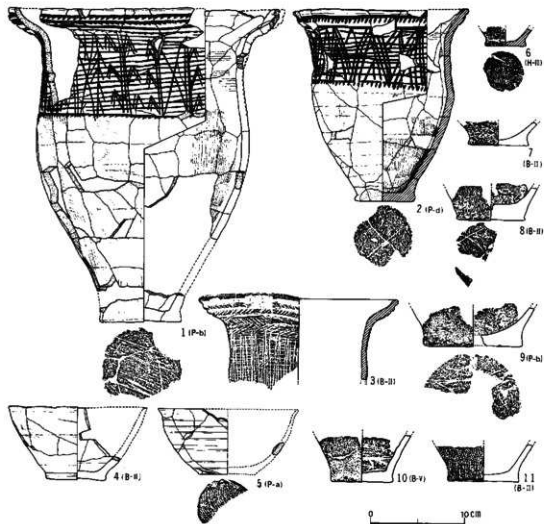
b種 (I-3-b) (第31図4, 6, 第33図7, 9-11, 図版23-3, 4, 25B)

幅広い沈線文を隙間なく施しているが、段状にはなっておらず、胴部と口縁部文様帯の境界も、a種程明瞭ではなく、口縁部の開きも小さい。

第31図4は、器高17.6cm, 口径16.4cm, 底径7cmの中形土器で、胴最大幅から上に幅5mm程の幅広い沈線文が隙間なく施され、一部は段状になっている所もある。口縁部はゆるく外彎している。口唇部の上は、整形で浅く窪んでいる。内面は、黒色処理と磨ミガキがなされ、入念に整形されているが、一部刷毛目状痕が残る。外面も一部に刷毛目状痕が残る程度に、ナデによって平滑に整形



第31图 兖州区出土土器实例图 (1)



第32図 発掘区出土土器実測図(2)

されている。底面には、笹の葉の痕(3方向)がある。外面の色は褐色。

第31図6は、口縁部の1/4程の破片である。幅約4mmの幅広で浅い沈線文が、一部は重なって密に施されている。口縁部はゆるく外彎する程度であるが、口唇部は強く張り出し、そこにやや深い刻目がある。色は、内外面共暗茶褐色を基調とし、一部褐色の所がある。内外面共ナデ整形され、堅い焼成である。第33図10、11も、文様・焼成・色調の点で類似の資料であるが、10の口唇部の張り出しは弱く、刻目は間隔が開いている。同図9も、色調は灰褐色であるが、前述の3点に近いものである。同図7は、やや深い沈線文が施されている。色は灰褐色。

遺構で同じ仲間の資料は、第19図2(第4号)、第24図2(第6号)などがある。

c種(I-3-c)(第31図7、第33図8、12、図版23-5、25B)

沈線文の間隔が開き、完全に沈線化したグループである。ただし、口縁部文様帯中には刺突文列

はまだ一切認められない。胴張りは、さらに弱くなる。

第31図7は、推定口径21cmのかなり大形の土器で、胴張りは弱く、口縁部がゆるく外彎し、口唇部はやや張り出す。刷毛目状整形を施した後に、幅3mm程の幅広の沈線文を間隔を開けて巡らしている。

第33図8は、1~1.5mmの細い沈線文が巡る。同図12は、胴部から外彎の傾向のある破片であるが、やや幅広の沈線文がある。色は、灰褐色~茶褐色である。

同様な例は、第19図1（第4号）、第27図6（第9a号）などがある。

なお、第1号竪穴住居址出土の第9図1の資料も、沈線文、口唇部の刻目の状態からみて、本種に入るかと思われるが、文様帯中央で強くくびれ、全体でくの字状になっている器形は特異である。

第4類（第31図5、8、図版23-2、24-2）

本類は、横走沈線文群と共に、その中に縦ないし斜め（それが複合されてX字状、八字状のものもある）に沈線文が付加されたグループである。横走沈線文群の下縁、さらには中に刺突文列（横）がある例が多い。また、文様帯のくびれが弱くなり、逆に口唇部付近で強く外彎する点も特徴といえるかもしれない。2種類ある。

a種（I-4-a）（第31図5、8）

本種は、沈線文（群）が文様帯の下部のみにある仲間である。

第31図8は、器高12.1cm、口径12.8cm、底径6.6cmの小形の土器である。口唇部下3~3.5cm程の所に2本の横走沈線文をつけ、それに2.5~3.5cm間隔で2本単位の縦の沈線文がある。口縁部は、文様帯中央でやや強くくびれ、口唇部近くで強く外彎している。口唇部は、ほぼ平らに整形されている。内外面共、莖ミガキされ、刷毛目状痕は文様帯中央に若干残る以外、殆ど観察できない。

同図5は、口唇部と胴部下半を欠損する破片である。文様帯下部に6本程の横走沈線文群があり、その上は無文帯、下縁には縦位の刺突文列がある。縦ないし斜位の沈線文は、破片内では認められない。

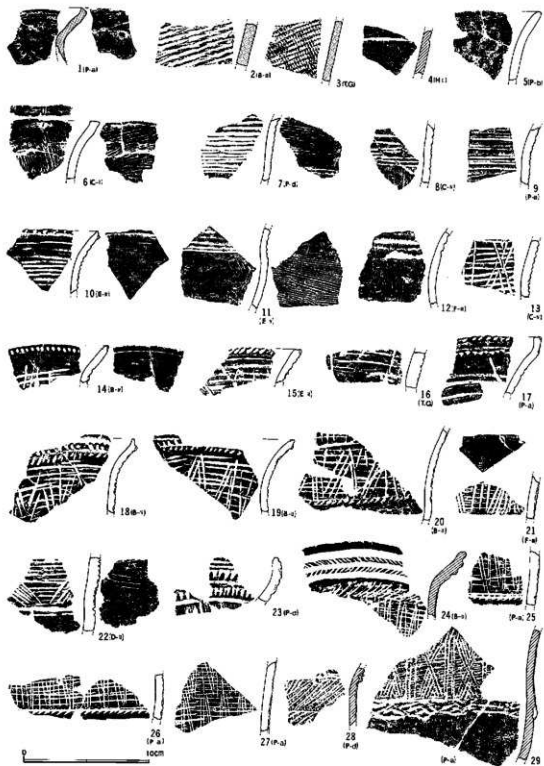
色は、共に灰褐色を基調とし、一部茶褐色~暗灰褐色を呈している。

同様な資料は、第2号竪穴住居址出土の第14図5がある。これは、上下の刺突文列にはさまれて下部に1本の沈線文、その上に山形の沈線文がある。

b種（I-4-b）

本例は、発掘区では出土していない。第2号竪穴住居址の第15図1、第6号竪穴住居址の第23図2を標式とする。文様帯下縁に胴最大幅があり、強く張り、文様帯中央はほぼ真直ぐ立上り、口唇部付近で強く外反ないし外彎する。やや不規則な横走沈線文群が密に巡り、その間に縦と斜めの組み合わせ（三叉状）の3本単位の沈線文が入っている。文様帯下縁と口唇部角には刺突文列（刻目）があるが、口唇部のは比較的大きめである。なお、第24図7（第6号）も、胴張り、刺突文列の特徴から、この仲間かもしれない。

また、第1号竪穴住居址出土の第9図3も、本種に類似したものであるが、胴張り、口唇部の反



第33图 尧墟区出土土器拓影图 (1)

りは弱く、横走沈線文群がやや太めで、規則的であること、刺突文列ないし刻目がない点など、2本単位のX字状の沈線文が施されてはいるが、前述した第3類のc種の仲間の可能性が高い。

第5類 (第33図14~17, 22, 図版26A)

本類は、胴最大幅より上部に文様帯があるが、張りはあまり強くなく、文様帯中央はゆるくくびれ、口唇部付近もゆるく外彎する器形で、屈曲部はない。横走沈線文群が、口唇部下1~2cmを除いて、かなり密に施され、その上に縦位、斜位、山形、逆山形(V字状)の沈線文が、かなり幅広く施されている。口唇部には、刻目があるが、文様帯の下縁の刺突文は、あるグループとないグループがある。破片が小さく、文様構成が不明のものが多いため、それらのものはb種として一括説明する。

a種 (I-5-a)

発掘区の資料中には、明確に本種に分類できるものはない。第9a号竪穴住居址出土の第28図1~3と第6号竪穴住居址の第23図1がこの仲間である。いずれも、口唇部の角と文様帯下縁に刺突文列(刻目)がある。前者は、1ないし2本の縦位の沈線文間に、山形ないし逆山形(V字状)の沈線文が組み合わさった文様があり、第28図1では、縦位の沈線文を山形、逆山形状沈線文の組み合わせがあるが、それらの間隔は広く、横走沈線文群だけの所が残っている。なお、第28図1の口唇には張り出しがあり、口唇部直下の文様帯の上縁にも刺突文列がある。後者は、前者のモチーフに、さらに文様帯上部に鋸歯状の沈線文が展開している。

b種 (I-5-b) (第33図13~17, 22)

本種は、(1)口唇部を有する破片、(2)口唇部が欠損した口縁部に分けて記載する。

(1) 第33図14, 15, 17の資料で、いずれも口唇部に刻目が入る。14は、刻目は深く、横走沈線文群が、口唇部ぎりぎりまで入っていることなどから、前述の第3類b種の可能性もある。破片内で、4本の縦・斜めの沈線文がある。15は、外反の強い器形で、口唇部内側に細い沈線文状のものが巡る。17は、口唇部付近で、強く立上るもので、その屈曲部にも刺突文列がある。横走沈線文群の間隔は広いようである。透構では、第24図3(第6号)、第27図2(第9a号)などが同じ仲間である。

(2) 第33図13, 16, 22の資料は、大きく2つに分れる。1つは、13の仲間で、横走沈線文群の中に、間隔の広い縦位の数本の沈線文群で区切りながら、その間に2~3本単位の斜位およびX字状の展開の沈線文が、ほぼ全面に亘ってあるもので、沈線文は幅広い。第6号竪穴住居址出土の第24図8~11の同種の資料でみると、文様帯の下縁には刺突文列はないようである。もう1つは、16, 22の仲間で、前者より狭く鋭い横走沈線文群の間に、3本ないし数本単位の斜位の沈線文群が、横走沈線文に対してゆるい角度で入っているもので、破片内の観察では、それ程密ではない。やはり、文様帯の下縁には刺突文列はない。同種の資料には、第6号竪穴住居址出土の第24図4~6がある。

第6類 (第32図1~3, 第33図18~21, 23~27, 29, 52, 図版24-3~5, 26A, B)

口唇部下1.5~2.5cmの所で、強い外反ないし外彎の傾向を認め、口唇部付近でほぼ真直ぐに立

上という特異な形態になり、この部分が肥厚帯をなし、沈線文と刺突文による文様がある。その下は、横走沈線文が密に施され、その間を縦位ないし狭長山形の沈線文が隙間なく施され、文様帯の下縁には刺突文列があるのが特徴である。大きく、3つに分かれる。

●種 (I-6-a) (第32図2, 第33図18~21, 23, 図版24-5, 26A)

本種は、口唇部の肥厚はまだ顕著ではなく、反り、立上りもゆるい。沈線文はやや太めの傾向があり、横走沈線文間に、3本単位を基本にした傾斜のゆるい山形(鋸歯状)の沈線文が配され、さらに間隔の開いた所に、単線の山形の沈線文をもって埋めたものである。

第32図2は、器高20.3cm、口径18.6cm、底径6cmの中形土器で、口唇部はやや肥厚するが反りは弱い。2本の幅広の沈線文でくびれを入れ、中に刺突文が1列ある。内面は、黒色処理と寛ミガキが施されているが、外面はナデのみで、暗灰褐色を呈する。

第33図18~20は、同一個体と思われるもので、器厚4mmで薄く、口唇部直下の反りは弱いが、口唇部の所は強く立上っている。1条の貼付帯があり、その上と直下に逆くの字状に刺突文列がある。色は、灰褐色。同図21, 23も、小片であるが、この仲間と考えられる。

●種 (I-6-b) (第32図1, 3, 第33図24~27, 29, 図版24-3, 4, 26B)

口唇部の肥厚帯が発達したグループで、細い沈線文が、横位、縦位、斜位(山形、X字状など)に、かなり密に施されたものである。細かくみると、3つのタイプがある。

(1)は、第32図1の資料で、器高33.3cm、口径29.3cm、底径8.5cmの大形土器で、底部には張り出しがある。口唇部は、内彎気味に発達した肥厚部があり、4本の沈線文によって段状のひだを作出している。この上には、3列の刺突文列があり、上部2列はくの字状に配されている。横走沈線文群の間に、2, 3本単位の沈線文を縦位に3cm程の間隔で配し、この両側には2本単位の短い山形沈線文が対にあるが、縦位の沈線文2本元毎に、山形沈線文のかわりに、その間をX字状の沈線文で埋めている。文様帯下縁にも刺突文列がある。

(2)は、第32図3, 第33図24~27のグループで、3本の幅広の沈線文で作出された肥厚部は、大きくひだをうち、逆くの字状に長目の刺突文が2列施されている。横走沈線文は、さらに密になり、その上に2本単位を基調とした狭長の山形状の沈線文が隙間なく配され、下縁に刺突文列がある。なお、27のように2段になっている場合もある。第32図3と第32図24は、同一個体で、内面は黒色処理と寛ミガキが入っている。

(3)は、第33図29の例で、横位の沈線文は、さらに密に施され、破片内では3, 4本単位の縦位の沈線文の間に4, 5本単位の沈線文でX字状に文様を密に描いている。文様帯の下縁には2条の沈線文を横につけた上から貼付帯をつけ、これにもゆるい角度で山形に沈線文を刻んでいる。内面は黒色処理とミガキが入っているが、外面は細かな刷毛目状痕が残り、灰褐色を呈する。

●種 (I-6-c) (第34図52, 図版27B)

52は、口唇部が欠損するが、第7号竪穴住居址出土の第25図1と同種の仲間と考えられる。口唇部の反りは、b種と同様で、3本の沈線文によって段状のひだを作出しているが、この上に刺突文はない。破片下部には沈線文があるが、構成は不明である。共に破片内の内面は黒色処理がされてい

る。

第7類(Ⅰ-7) (第33図28, 第34図54, 図版26A, 27B)

この仲間は、いずれも断定的な資料で、全体の器形、文様構成など不明のものが多いが、基本的に横走沈線文群が姿を消し、細かな沈線文が、密にくの字、逆くの字(綾杉文)、山形(鋸歯状)、斜位などに施されたものである。種々のものがあるが、点数が少ないので細分しない。

28は、間隔をあけて横位の沈線文を引き、その間を斜位の沈線文で密に埋めたもので、上部の口唇部近くには刻目のある横の貼付帯が断片的に観察できる。また、その下にボタン状の貼付文があり、その上には十文字の沈線文がある。SW地区出土の54は、綾杉状、鋸歯状の密な沈線文群からなり、その境目に横走沈線文があるものである。

同種のもは、第25図2(第7号)、第26図1-3(第8号)、第29図1(第10号)などがある。前者では、刺突文列が多用されている。

なお、第32図6-11、第34図49-51は、変形土器の底部片である。いずれも軽い張り出しがある。

(Ⅱ) 壺 (第33図1, 図版25B)

変形土器には、長頸壺、短頸(広口)壺の2種類がある。

第1類 長頸壺(Ⅱ-1) (第33図1, 図版25B)

1の須恵器は、頸部の破片で、推定口径9.5cm、頸部の推定最大径7cmのものである。下部の立上りは垂直に近いが、上は強く外反し、口唇部付近は内彎気味である。通例認められるつば状の張り出しはない。輪軸整形の痕が認められ、色調は暗緑色で、胎土内はサンドイッチ状に赤褐色の部分がある。

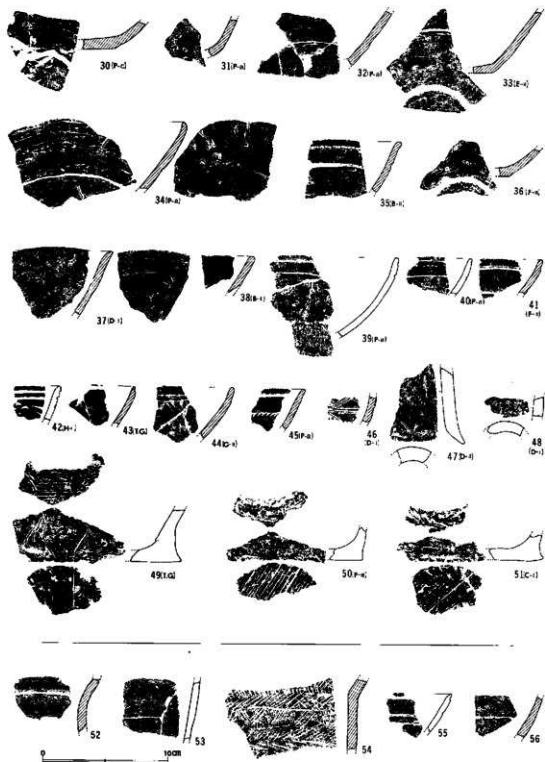
長頸壺は、第2号竪穴住居址(第14図3)でも出土したことは前述した。

第2類 短頸壺(Ⅱ-2)

発掘区からの出土はないが、第4号竪穴住居址から頸部片(第19図4)が出土している。推定口径は、16.5cm程である。なお、第2号竪穴住居址出土の第14図7の底部片も底径が大きく、くびれなしに立上る所から、この種の壺の可能性もある。

(Ⅲ) 坏(淺鉢) (第32図4, 5, 7, 第33図4, 第34図30-48, 55, 図版25A-1, 2, 26B, 27A, B)

器形、文様、成形、整形、焼成などの点から、以下の6類に分類したが、破片は特徴の把握が困難な例が多いため、完形土器を中心に行い、破片は第4類として一括して扱った。



第34图 兖州区出土土器拓影图(2)(30~51), SW地区出土土器拓影图(52~56)

第1類(Ⅲ-1) (第32図5, 第34図30, 図版25A-2, 26B)

本類は、須恵系、土師系の土器で、轆轤水挽き成形によっているものである。

第32図5は、器高6.9cm, 口径14.9cm, 底径6cmの深い坏形土器で、口唇部は外彎気味である。轆轤水挽きで成形され、回転糸切りによって轆轤から切り離されたもので、再調整は行っていない。色は、灰褐色を基調とし、一部うすい黒斑が認められる。器厚は3～6mmで薄い。焼成は、普通の捺文式土器、土師器より堅く、灰色を呈する須恵器よりはやわらかい。従って、環元炎焼成に達せず、酸化炎焼成の段階でとどまった須恵器と考えられる。

第2号竪穴住居址出土の第16図1, 2は、やはり轆轤水挽き成形で、完全に環元炎焼成された須恵器の坏の破片である。再調整は行われていない。1に関しては、かなり深い器形であったと考えられる。

第34図30は、轆轤水挽き成形し、回転糸切りで轆轤から切り離された後、内面を黒色処理し、内外面共にミガキをかけたものである。推定底径は5cm前後で、外面は灰褐色を呈し、通常の捺文式土器より焼成は若干堅い。底面には、黒斑が認められる。土師器の坏と考えられる。

第2類(Ⅲ-2) (第33図4, 第34図31～36, 41, 図版27A, B)

後述する第3類に比べて、底部の作りが、台、脚がつかず、また張り出しもないもので、胴中央ないしやや上部に、段ないし沈線文(1条)が巡るものである。全例内面は黒色処理され、口径の割に高い器形である。

第34図33, 36は、共に推定底径5.5cm程で、轆轤・回転糸切り痕は認められない。内面は黒色処理とミガキ、外面はナデ調整をしている。33は、胴中央ないし上部に段があり、その上の器厚は薄くなっている。外面の色は、33は灰褐色で、破片上部は黒色処理が及び、36は暗灰褐色。31も類似の底部位片かと思われる。

同図32, 第33図4は胴部片で、破片中央に1条の沈線文を入れ、低い段状に仕上げている。内面はミガキ、外面はナデ整形で、各々灰色、褐色を呈し、焼成は堅い。34は、口唇部は内彎気味で、胴中央に1条の沈線文が巡り、推定口径は14cm程である。内面は放射状に寛ミガキがあり、外面はナデ整形で、色は灰褐色から褐色を呈し、上部まで黒色処理が及んでいる。

同図35, 41は、1唇部下2～3cmの所に段があるもので、その上は薄くなっている。41では、口唇部直下にも段がある。35は、焼成は堅い。

第3類(Ⅲ-3) (第32図4, 図版25A-1)

本類は、壺形土器の底部のような張り出しのある低い台がつく仲間である。胴中央における段ないしそれから派生した沈線文は消失し、逆に口唇部下1～2cm程を浅く窪ませたり、内彎させ強く立上らせている。また沈線文を巡らせ、同様の効果を示そうとした例もある。さらに、胴部全面に亘って細い刻線による文様が描かれた資料もある。

第32図4は、器高7.7cm, 口径14.6cm, 底径6.1cmのかなり深い器形で、底には低い台がつき、

幅広い沈線文状のものを1条入れることにより、軽い張り出しを作っている。口唇部直下1cm程は、浅く窪む傾向がある。黒色処理はされていないが、ミガキは入っている。内面は特に入念で、色は灰褐色。

同種の資料には、遺構では、第9図4（第1号）、第23図4、5、第24図13（第6号）などがあるが、各々細かな特徴は異なっている。第9図4、第15図2は、口唇部は内面からの整形で強く立上り、4の底面には回転糸切り痕を模したと思われる刷毛目状の整形痕があり、2には底部の台の側面に2本の沈線文が巡る。さらに、第6号竪穴住居址の第23図4、5の胴部には細い沈線文を3条巡らし、4ではその間に綾杉状に沈線文が入られている。5の口唇部は浅く窪んでいる。黒色処理は、第9図4、第23図4が内面と外面の上部、第15図2は、内外面の半分程に施されているが、第23図5には認められない。いずれも内面のミガキは入念で、第23図4の内面では、疵痕が残っている。

第4類（第34図37～40、42～46、55、図版27A、B、28A）

小片のため、全体の特徴が明らかではないものを一括して説明する。ただし、第1類に属する資料はなく、多くは第3類として分類した仲間に入るものと考えられる。5種に分けられる。

a種（Ⅲ-4-a）（第34図39、40、42～45、55、図版27A、B、28A）

口唇部直下に1～2本の沈線文が巡るタイプである。

39、40、55は、口唇部直下と1.5cm程下に浅い沈線文が巡り、心持ち内彎の傾向がある。黒色処理は、39にはなく、40、55も不完全である。

42は、口唇部直下に2本の深い沈線文がある。45は、口唇部直下に沈線文状のものがあるが、工具を浅く横に連続刺突したものである。その下1.5cm程の所には、細い沈線文の上から、櫛目状の斜めの刺突文列がある。共に、内面から外面上部は黒色処理がされている。

43は、口唇部直下に段状に沈線文を入れたもの、44は、口唇部下1cm程の所に沈線文を入れ段を作出したもので、共に内黒である。

類似の資料には、第16図5、6（第2号）、第19図5（第4号）などがある。

b種（Ⅲ-4-b）（第34図37、図版27B）

口唇部下1.5～2cmの所が、浅く窪み、心持ち外彎傾向を認めるもの。37は、内黒で寛ミガキの痕がある。

同種のもの、第14図4（第2号）、第27図1（第9a号）の資料である。

c種（Ⅲ-4-c）

発掘区出土の資料中にはないが、第2号竪穴住居址出土の第16図9の破片で、口唇部下2cm位の所から強く立上る資料である。破片内、内外面は黒色処理がされている。

d種（Ⅲ-4-d）（第34図38、図版27A）

本種の口唇部直下には沈線文、刺突文はなく、さらに彎曲傾向も認められず、直立するグループである。38は、内黒。

同種のもの、第16図10（第2号）、第23図6、第24図1（第6号）などがある。ただし、第23図

6は、口唇部直下は一部浅く窪ませようとした痕がある。

e種(Ⅲ-4-e) (第34図46, 図版27B)

46は、細かな沈線文が、緩形文状に入ったもので、第23図4と同種の資料かと思われる。内黒。

第5類(Ⅲ-5) (第34図47, 48, 図版27B)

高環の台の可能性のある破片である。

47は、推定底径5.5cmで、底面近くは強く外彎し薄くなっている。平均器厚は10mmで、上部がやや厚くなっている。内外共に灰褐色。48は、小片で、現存部分の外径は4.5cm程である。赤褐色～灰褐色を呈する。

第6類(Ⅲ-6)

第9a号整穴住居址から出土した第28図6のコップ状の浅鉢形土器である。

(N) 支脚(五徳)

第1号整穴住居址から2点(第9図5, 6)、第2号整穴住居址から1点(第14図6)出土している。器高11～14cm程で、底径は、9～11cmである。輪積み痕が明瞭に残り、整形は殆どないが、第9図5には外面に鹿ケズリの痕がある。上辺は平担になり、下辺には対の窓が開けられている。

なお、第27図4(第9a号)、第19図7(第4号)の胴部片も、支脚の可能性がある。

(V) 甑(第31図2, 図版23-6)

2は、現存高24.4cmで、底部位近くまであり推定高は30cm弱であろう。口唇部の上面観は隅丸方形を呈し、大きさは25.2×24.5cmである。口唇部は丸く、やや外彎するが、その下から口唇部下18cm程まではかなりきつく立上っており、底部近くになって急にすぼまる特異な器形である。器厚も6.5～11.5mmで部厚い。口唇部下1～1.4cmの所に、極めて細い沈線文が1条巡る。外面には刷毛目状痕が明瞭に残るが、内面はナデによってかなり平滑に整形されている。色は、暗褐色。なお、底部に関しては、同一個体と思われる内面が剥脱した小片でみると、角は若干張り出すが、その上はかなりきつく立上っている。底面は1cm程しかないが、平らである。それ以外の特徴は、この破片だけでは明らかにできない。

本例は、底部位の状態が不明であるが、器形からみて甑の可能性が高いと考えられる。

	罍 (深鉢) 形土器 (含甗)	盞·甕形土器 (須惠器)	环 (浅鉢)	支脚
I 期	<p>112-a 112-b 112-c</p> <p>(発掘区) (甗)</p>		<p>111</p>	
II 期 前 半	<p>113-a 113-b 113-c</p> <p>(第2号壑穴住居址、床面一両直上)</p>	<p>114-a 111 111 111 111</p>	<p>111 114-b 114-c</p>	<p>111</p>
II 期 後 半	<p>113-c 113-b 113-c</p> <p>(第1号壑穴住居址、床面一両直上)</p>	<p>111 111</p>	<p>111 111</p>	<p>111 111</p>
II 期	<p>113-b 113-b 113-c 114-a 114-a</p> <p>(発掘区)</p>		<p>113</p>	
III 期 前 半	<p>115-a 114-b</p> <p>(第6号壑穴住居址、床面一両直上)</p>	<p>111</p>	<p>112 113</p>	
III 期 後 半	<p>116-a 116-b(1) 116-b(2)</p> <p>(発掘区)</p>			

第2節 編年的位置について (第35図, 第5表)

前節において、遺構出土の資料を含めて、出土したすべての土器群について、器種分類と各器種毎の文様・器形上からのタイプ分類を試みた。以下、それらについて編年的位置を探ってみたいと思う。

(1)

甕(深鉢)形土器を中心にみていくと、第1類(I-1)としたものは、須恵器である。破片が小さいものが多く、細かく分類することはできなかったが、第1, 2, 6号竪穴住居址における共存関係から判断すると後述する第Ⅱ期前半、後半と第Ⅲ期前半の濠文式土器に伴うものと思われる。詳しくは後項で述べる。

第2類(I-2)以下は、大きく「濠文式土器」の概念の中で捉えうるものである。

濠文式土器の編年に関しては、幾人かの研究者によって、その試案が示されているが、その中で佐藤達夫(1972)の編年は、各時期について、幅広い地域の具体的資料を数多く提示し、また最も細かく分類したものである。以下、同氏の編年大綱に従いながら、検討していく。なお、氏は編年表の中で、「土師器」も濠文式土器と併行して独自の変遷を辿ったとして、東北地方の資料と対比させながら、幾つかの段階を考えている。この是非については今検討する材料を用意できないが、本稿では、後述する第Ⅰ期に併行する齊藤(1967)のいう「北海道土師器第一、二型式」の段階と轆轤成形の坏以外は、両者を特に分離しないで、濠文式土器として一括して取扱う。

佐藤編年でⅠ期(前期前半)とされたものは、最古の時期に属するもので、アヨロの濠文土器A(名取・峰山1962)、発足Ⅲ群3種の一部、Ⅲ群4種(竹田・大島ほか1963)などで代表され、口縁部の刺突文、鋸歯状または交叉沈線文を共通文様要素とし、これらは直接縄文終末期に由来するとしている。

ここで認められる円形刺突文と鋸歯状の文様を基本にしたモチーフは、かつて札幌市N162遺跡(上野編1974)の報告で述べたとおり、所謂「北大式」の共通文様要素である。この中で「北大式」をA~F型の6タイプに細分したが、その内E、F型に関しては、縄文が完全に姿を消し、整形としてかなりのパーセンテージで刷毛目状整形痕、疵ミガキが出現し、しかもF型例の沙泊(沙泊川遺跡調査団1965)、小幌洞窟(北大解剖教室調査団1963)などでは(必ずしも共存とは断じ難いが)、共に「桜井第一型式」(桜井1958)の坏が出土したことをもって、F型さらにはE型も含めて、この段階から土師器——「桜井第一型式」の土師器の影響があったろうと推論した。同様の見解は、具体的根拠は明示されていないが齊藤(1967)も述べている。

しかし、この濠文式土器のはじまりを、この時期とする考えには異論もある。従来、濠文式土器の編年に関しては、東大編年(東大文学部編1964b)、石附編年(石附1968)、菊池編年(菊池1970)などがあるが、いずれもこの時期は、濠文式土器に先行する段階で、菊池は「ブレ濠文」、大井

(1970)は「捺文0」という呼称を与えている。しかし、本稿では以下の理由をもって、佐藤と同様にこの段階から捺文式土器と理解する。すなわち、土師器の影響をうけ、在来の土器群に根強く残っていた「縄文」という重要な文様要素が消失し、土師器の整形技法が用いられてくる点と北大式に認められた鋸歯状文という文様要素が、前述の變の第4類b種の段階をへて、後述する第Ⅲ期の山形、逆山形の文様へと受けつがれ、捺文式土器の基本モチーフの一部として取り入れられていると考えられること。そして後述するようにこの時期の後半(F型)には明らかにかまどのある竪穴住居址が出現していることから、この段階から捺文式土器そして捺文文化と考えられるのである。ただし、佐藤のⅠ期は、前述した分類のE型のみを指したものであり、F型は、その後のⅡ期(前期後半)の最初の時期に、横走沈線文のあるグループと共に入れられている。しかしE型とF型は、円形刺突文の有無を除けば、器形・文様・整形の上では共通するものが多く、同一のグループとみなした方がよいと考える。この両者を合せた段階に対しては、前述したように菊池(1972)は、「ブレ捺文」という呼称を与えている。本稿は、このE・F型の時期を、捺文第Ⅰ期とし、さらにE型を前半、F型を後半と仮称したいと思う。

本遺跡では、第Ⅰ期前半に属する土器群は認められない。同後半には、第2類a種が入るかと思われる。これは、第31図1の完形土器でみると、頸部に沈線文によって段を作出し、その上3cm程は内彎気味に立上り、そこからまた大きく外反するもので、この屈曲部にも沈線文状の重整形痕が横に走る。全体的にみて、口縁部は長く、胴部は高さに比べて幅がない狭長な器形である。この器形に類似のものには、余市郡余市町天内山遺跡(峰川・金子・松ド・竹田1971)のC区墓域外(第19図3)恵庭市柏木川遺跡(高橋編1971)のPIT 77(p.16-1, 3)、千歳市祝梅三角山D遺跡(大谷編1978)の2号竪穴住居址(Fig. 13-7)、石狩郡石狩町紅葉山25号遺跡(吉崎・横山ほか1975)の第2号住居址(第8図4)、浜益郡浜益町岡島洞窟(大場・石川1961)の第三遺物包含層(第50図15)などの資料がある。詳しくみると天内山は、発掘区出土資料のため同伴関係は不明であるが、器形的にみると、同区から共に出土した円形刺突文と鋸歯状、横走沈線文群のある第Ⅰ期前半の例(第18図1, 第19図1, 2)とも類似している。ただ、後者は口縁部の外彎は弱く屈曲部が明瞭ではない。柏木川では、頸部の沈線文は2条で、口唇部直下にも複数条の沈線文がある。また、3には口唇部には刻目が所々に入っている。そして、胴下部に段のある丸底に近い環を伴っている。祝梅三角山Dの變は、頸部、口縁部上部の屈曲部は段になっている。共存遺物には、頸部に2条の沈線文が巡る広口壺(同図8)と段のある丸底の環(同図4)が出土している。紅葉山25号では、口縁部のほとんどは欠失するが、頸部より上部に横走沈線文がある變も出土している。岡島は、柏木川例と同様、頸部と口唇部直下に複数条の沈線文があり、同層内からは、有段の環が出土している。上記3遺跡から出土した胴下半に沈線文による段を作出した丸底に近い平底の環は、所謂「国分寺下層式」の環に対比されるものであろう。

以上の遺跡から出土する變、広口壺、杯に器形・セットの上で最も近いグループは、斉藤(1967)によって北海道土師器第二型式とされた空知郡栗沢町由良遺跡(斉藤1973)、夕張郡由仁町岩内遺跡(宇田川1969)出土の資料で、環は桑原(1976)の指摘する如く「国分寺下層式」であり、由良では「甌」と

いう道内ではあまり出土しない器種を共伴しているが、これらも上述の土器群と同時期の所産と考えられる。また、恵庭市公園遺跡（大場・石川1966）の竪穴（第二址）、十勝郡浦幌町十勝太若月遺跡（石橋・山口・後藤・河村1975）土壇58、祝海三角山D遺跡1号竪穴出土の甕は、いずれも口唇部近くで内彎する傾向があるが、沈線文の入り方、共伴遺物は、柏木川、岡島洞窟例に類似し、同一グループの可能性が有る。すなわち、以上述べた土器群はすべて第Ⅰ期後半に入るものと思われる。

さて、佐藤編年のⅡ期で、より新しいとされた横走沈線文のあるグループに対比されるものに、第1, 2号竪穴住居址から出土した一括資料がある。まず、横走沈線文群のある甕を含む遺跡を、検討してみたい。遺跡名を列挙すると以下の如くである。

- 1 千歳市烏榎舞遺跡（ウサクマイ遺跡研究会編1975）、墓壇66-5。
- 2 江別市飛鳥山、志分別遺跡（後藤1935）、（第2, 3号）竪穴住居址。
- 3 ウサクマイ遺跡B地点（石附編1974）、第1, 4号住居址。
- 4 ウサクマイ遺跡N地点（石附編1977）、第4号住居址。
- 5 祝海三角山D遺跡（大谷編1978）、2, 3, 4号竪穴住居址。
- 6 恵庭市西島松南B遺跡（大場・石川1966）、第1, 2号竪穴。
- 7 恵庭市中島松遺跡（大場・石川1966）、竪穴住居址。
- 8 恵庭市茂漁古墳（後藤・曾根原1934）、第1, 14号墳。
- 9 千歳市蘭越遺跡（大場・石川1967）、竪穴住居址。
- 10 千歳市ママチ遺跡（石川・佐藤・金山1971）、竪穴住居址。
- 11 札幌市N 162遺跡（上野編1974）、第1号竪穴住居址A竪穴。

それに、単独表探資料として、浜益郡浜益町柏木地区（秋山町）（大場・石川1961；第20図1, 2ほか）、寿都郡寿都町朱太川右岸河口（砂丘地帯）（大場・棚瀬・金子1963；第14図）、室蘭市祝津遺跡（大場・岡本・見玉1962；第14図下段左）、標茶町穂路（大井1972；第296図2）などがある。

この種の甕は、大きく4つのタイプがある。

- Ⅰ 沈線文が段状に巡るもので、文様帯と胴部との境界は明瞭な段をなすものが多く、文様帯中央から下部が強くすぼまり、その上は外彎ないし内彎気味にやや大きく開く。……烏榎舞（第26図1）、飛鳥山（第5図8）、K446遺跡甕第3類a種など。
- Ⅱ 平行沈線文が、頸部付近にしかなく、口縁部上半は無文で、この部分が大きく外彎するもの。口縁部文様帯と胴部とは明瞭な段をなすものもあり、また口唇部とか文様帯中に刺突文列があるものもある。……飛鳥山（第5図5）、志分別（第11図11, 19）、ウサクマイB地点（第11図1, 5ほか）、中島松（第5図23）など。
- Ⅲ 細い沈線文が口唇部直下までやや不規則に密に施されたもので、頸部のくびれ、胴張りはやや強く、口縁部は比較的大きく外彎する。底径は小さく、全体に狭長な器形が多い。口唇部に刻目が入る例もある。……茂漁（第6図9）、ママチ（第41図4）、N 162（第6図1ほか）、蘭越（第6図160ほか）、柏木地区（第20図1ほか）、朱太川右岸河口（第14図

7.2), K 446 遺跡變第3類c種の一部など。

[Ⅱ] 平行沈線文が、口唇部直下まで施されているが、間隔がやや開き、別張り・頸部のくびれは弱く、口縁部の開きも小さいもので、底径はやや広いものが多い。……祝梅三角山D (Fig. 14-5, 15, 25-4 ほか)、西島松南B (第16図80, 第19図1, 28ほか)、茂漁 (第6図3), 祝津 (第14図下段左)、塘路 (第296図2), K 446 遺跡變第3類b種など。

以上のタイプの内、[Ⅰ]と[Ⅱ]は飛鳥山遺跡の竪穴住居址において共存している所から同一期のものであろう。なお、[Ⅱ]タイプは、前述した第Ⅰ期後半の甕と文様構成の上で相通じる部分がある。

共存した他の器種に関しては、飛鳥山では、内黒で、底部近くにやや幅広の沈線文が1条巡る平底の深い環 (B型) と轆轤水挽き成形による須恵器の環、須恵器の大形甕の破片など、志分別では段状に沈線文が巡る丸底気味の環 (A型)、沈線文のない深い環 (C型) と上述と同様の須恵器の環が出土している。ウサクマイB地点の第1号住居址からは、東南壁のかまど一帯から平行沈線文のある甕と共に轆轤成形の土師器の環が、覆土中から前述のA, B型の環が出土している。中島松では、出土状態は不明であるが、A型類似の環、茂漁第1号墳では、高環と須恵器の高台環が、N162では、刺突文と沈線文が横に鋸歯状に展開する小形甕と覆土から完全に沈線文化したB型類似の環、ママチでは、B型(?)の環、西島松南Bの第1号竪穴住居址では、高台環と須恵器の小壺、同第2号では、口縁部に平行沈線文が施された広口壺 (甕) が出土している。

これらの内で、環についてみるとA型とした丸底気味のものは、前述した所謂「桜井第一型式」の環と脈絡をもつが、より新しいタイプで、また飛鳥山とウサクマイB地点出土の須恵器および土師器の環は、轆轤成形で、底に回転米切り痕を残すものである。この2者と、B型の環、台付環を加えると所謂「桜井第二型式」(桜井1958) のセットとほぼ類似したものであると考えられる。また、須恵器の甕、壺も「桜井第二型式」の段階になって一般的に出現するものである。ただし、前述した遺跡の中でも、A, B型の環のみを伴うもの (飛鳥山、志分別、ウサクマイB、中島松、祝梅三角山D) と、B型類似と台付環のみを伴うグループ (西島松南B、蘭越、N162 など) では、時間差があるようである。すなわち、共存関係が明確でない祝梅三角山D遺跡例を除くと、甕の[Ⅰ],[Ⅱ]タイプを伴う遺跡が古く (前半)、[Ⅲ],[Ⅳ]タイプを伴う遺跡はそれに後続する段階 (後半) と理解できるであろう。すなわち、前述した[Ⅰ]~[Ⅳ]のタイプの甕を伴う段階を第Ⅱ期とし、これは、さらに前半([Ⅰ],[Ⅱ]のグループ) と後半([Ⅲ],[Ⅳ]のグループ) に細分できるかと考える。なお、佐藤編年では、[Ⅰ]~[Ⅳ]の甕はⅡ期初頭と土師器の中に分類され、かつまたその編年序列も上記の考えと異なっている。

さて、ひるがえって、本遺跡の状況 (第35図) をみると、第2号竪穴住居址出土一括資料は、甕では、[Ⅰ]型 (本遺跡分類、第3類a種)、沈線文が頸部に1条巡るもの (同第2類b種) と小形の刺突文と鋸歯状沈線文があるもの (同第4類a種) があり、それに支脚と須恵器の長頸壺、甕、環などを伴う。環に関しては、まとまった資料はなく不明であるが、台付的な底部をもつタイプも、1点出土している。一方、第1号竪穴住居址は、甕として[Ⅲ]型 (同第3類c種) と無文ないし1条の沈線文が巡るもの (同第2類b種)、平行沈線文群中にX字状の沈線文のあるもの (同第3類c

種)、それに台付的な坏、支脚、須恵器の甕(広口壺)を伴出した。すなわち、第2号は、前述の区分けでいう前半(の末)に、第1号は後半に属するかと考えられる。

なお、本遺跡で認められた如く、平行沈線文群のある甕に、平行沈線文がなく鋸歯状に沈線文が展開したり、また平行沈線文上にそれに交叉してX字状などの沈線文がきざまれる甕が伴う例は、N 162 遺跡第1号竪穴住居址A竪穴にもある。ただし、平行沈線文をもたないタイプは、中～小形の器形のものが多いようである。

以上の説明から、甕の分類で、第2類b種、第4類a種の所屬も、本項で触れた時期の前半～後半にかけての所産であるとする事ができよう。

なお、千歳市千歳神社裏(河野1932)の竪穴住居址、古宇郡神恵内村観音洞穴(石附1968)出土資料に関しても、縦に2本単位の沈線文が入り、それに千歳例では山形の沈線文が付加された甕と胴部に沈線文が巡る坏をとまなうものであるが、この種の文様は第Ⅱ期にすでに出現しており、また口縁部の形状からみて、これらも上述の段階の後半に編年されると考えられる。

さて、次に佐藤編年という後期の資料は、本遺跡の甕の分類に対比すると第4類b種～第7類までの土器群に相当する。前期に比べて出土資料点数が少ないので、以下概略を記すに留める。

佐藤は、Ⅲ期(後期前半)を、7期に細分している(宇田川1977a, b)に従って数字で呼称すると)、Ⅲ期1は、千歳神社例に代表されるもので、本稿では第Ⅱ期に含めたものである。Ⅲ期2は、発足I群、青山に代表されるもの、Ⅲ期3は、朱太川河口、Ⅲ期4は川下、Ⅲ期5は高丘、東納内、春立、Ⅲ期6は蘭越、下リヤムナイ、川口基線、Ⅲ期7は振老、天売などの遺跡出土資料を標式としている。しかし、遺憾ながら、本遺跡の分類と合致する細分はない。巨視的にみて、このⅢ期2～7には、第4類b種、第5類a, b種、第6類a, b種の諸タイプが入るものと考えられ、それらは大きく前半(第4類b種、第5類a, b種)と後半(第6類a, b種)に分けられよう。

なお、第6号竪穴住居址出土の一括セット資料でみると、第4類b種、第5類a種の甕と共に、3本の横走沈線文で区画された中に綾杉状の沈線文群が入った坏と須恵器の甕破片が伴っている。

Ⅳ期も、10段階に細分されているが、この時期には、第6類c種、第7類の横走沈線文群が消失したグループが入ると思われる。

すなわち、本遺跡出土の土器群は、佐藤編年の終末期(Ⅴ期)を除く、Ⅰ～Ⅳ期までの資料が認められるということになる。

(2)

さて、本遺跡の第1, 2, 6号竪穴住居址および発掘区から、須恵器と轆轤成形の土器の坏が出土したことは前述したとおりである。

北海道内出土の須恵器については、石附(1966)により、出土地名表が作成されている。それによると未発表資料を含めて29遺跡が挙げられている。しかし、短報のため須恵器を含む土器群の説明が不十分である点とその後かなりの資料が追加されたので、以下に出土状態が明らかな遺構の資料を中心にその概要について述べてみたい。

現在、管見に触れる範囲で、竪穴住居址、土墳墓、墳墓（古墳）などの遺構から、須恵器とそれに密接な関連を有する轆轤成形の坏が出土した遺跡は、17遺跡を数える。まず、竪穴住居址出土例からみていく(第5表参照)。

1 夕張郡由仁町岩内遺跡 (宇田川1969)

竪穴住居址は、3基残在し、内2基が発掘調査されている。1、2号共、同時期の土器群が出土している。この中で、2号は、4.4×4 mの隅丸方形の住居址で、かまどは南東壁にあり、煙道は南方向に向いている。床面出土遺物として、頸部に2条の浅い沈線文がめぐる甕と胴下半に沈線文が1条巡り、浅い段的なものを作出した丸味を帯びた小さな平底の坏、沈線文、段がない丸底気味の坏などと共に須恵器(写真3-7)が出土している。この中で甕および坏は、前述の分類に従うと第Ⅰ期後半に対比できるのではないかと考えられる。須恵器は、「深皿様の形態を呈する」口縁部片で、整形には回転台が使用されていると説明されている。写真によると、外面には明瞭な轆轤痕が観察でき、また内面にも轆轤挽きの擦痕がある所から、轆轤水挽き成形された須恵器の坏の可能性が強いのではないかとと思われる。

2 江別市飛鳥山遺跡 (後藤1935)

検出された竪穴住居址は、北東と南西部に張り出しがあるが、基本形は、一辺5.5 m程の隅丸方形の住居址と考えられる。中央と南西壁のやや南東側に炉址があると報告されているが、南西壁の方は、底面が深く焼け、木灰を残すと報告されている所からかまどの可能性が強い。第5図8の甕、同図6、9、10の坏をはじめ、出土遺物のほとんどは、かまど(?)付近を中心に南東壁側から出土したとあるが、須恵器の坏と甕の胴部片は、報告中には具体的に出土地点は明記されていない。須恵器の坏は、轆轤成形で、回転糸切り底である。甕は、内面に青海波の叩き目痕がある。共に灰色。捺文式土器の甕は、前述した第Ⅱ期前半のものである。

3 江別市志分別遺跡 (後藤1935)

5.0×4.65 mの大きさの隅丸方形の竪穴住居址が検出されているが、①柱穴が数多くある。②かまど(南南東壁)の中に、間層をはさみ木灰が2枚ある。③木炭、木灰が比較的上部にある。④遺物は、第Ⅱ層中にあったのは一部(第11図17)で、あとは第Ⅱ層上部とかまど中(同図11、15)であること等々から、本住居址は第Ⅱ層上面に床面がもう1つある「複合遺跡」の可能性があると報告されている。これは、同一かまどを利用している点から、札幌市N 162遺跡(上野編1974)第1号竪穴住居址A、B竪穴と同様、改築された住居址と考えられる。遺物は、かまどのある南南東壁側に集中して、捺文式土器第Ⅱ期前半の甕、広口壺、坏が出土している。また、出土状態が明確ではないが(覆土中?)、「土器器破片」、「捺紋土器破片各数種、北海道式刻紋土器片」、「厚手縄紋土器数種」と共に、飛鳥山と同様の須恵器の坏破片も出土しているとある。

4 恵庭市下島松遺跡（大場・石川1966）

一辺の長さ5mの方形の竪穴住居址1軒が発掘されている。かまどは南東壁。かまど付近から、胴下部に沈線文のある捺文式の坏（B型）（第Ⅱ期前半）、南側コーナーから須恵器の甕破片4点が出土している。第23図13は、口縁部片で、轆轤成形痕が残り、口唇部に張り出しがある。同図12、18・1、18・2は胴部片で、内外に叩き目痕があるが、内面のは少し磨り消されているらしい。なお、18・1の内面の叩き目痕は青海波である。

5 千歳市ウサクマイ遺跡N地点（石附編1977）

4軒の住居址ほかがみつまっているが、内第4号住居址は、5.1×4.64mの隅丸方形を呈し、南壁のやや西にかまどがある。床面およびかまど内から、第Ⅱ期前半に対比される捺文式の坏、甕が出土し、覆土中から同時期の捺文式土器と共に、須恵器の坏2点、甕破片1点がみつまっている。第15図5の須恵器の坏は、回転糸切り底で赤褐色（酸化炎焼成）であり、第55図64の甕の内面の叩き目痕は青海波である。なお、第1号住居址の覆土中からも、内面に青海波の叩き目痕のある資料を含む須恵器の甕破片が出土しているが、共伴した捺文式土器で、特徴の明確なものはない。また、発掘区出土の須恵器の破片の中には回転ヘラ切り痕のある坏があり、また数点酸化炎焼成の段階の資料がある。

6 千歳市ウサクマイ遺跡B地点（石附編1974）

4基の竪穴住居址が発掘されている。第1号は、一辺4.5mの隅丸方形の住居址で、かまどは南東壁の北東側にある。かまど一帯から、前述の〔Ⅱ〕型類似の捺文式の甕（第11図4）と共に内黒・轆轤成形の土師器の坏（回転糸切り；第11図）が出土している。また、住居址付近の1-1区旧地表面から、須恵器の甕（自然釉、内面青海波）、坏破片が出土し、報告者は住居址とほぼ同時期の所産とみている。第6号は、4.5×3.3mの隅丸長方形を呈する住居址で、かまどは存在しないと報告されている。住居址に伴う遺物は検出されなかったが、盛土上とか付近から内黒・轆轤成形の土師器坏（回転糸切り）と須恵器の坏蓋小破片が出土している。

7 恵庭市西島松南B遺跡（大場・石川1966）

2軒の住居址が発掘されている。第1号は、4.2×4mの隅丸方形の住居址で、かまどは南東壁にある。また、北西壁側に炉址がある。第16、17図に示された出土遺物に関しては、出土地点、層位は全く明記されていないが、第15図と写真27から判断すると、第16図80、第17図127、78の第Ⅱ期後半の捺文式の甕と高台坏はかまどの周辺、同図300の須恵器の小形甕（高さ11.8m）はかまど炊口付近から出土しているようである。須恵器の甕は、台がつき、底面に「×」の黒書き記号がある。色は灰色。

8 千歳市千歳神社裏遺跡（河野1932）

樽前の厚い火山灰層下から、竪穴住居址がみつまっている。ほぼ正円形を呈し、径3.1mの大きさと説明されているが、木炭の分布範囲からみて、一辺3~4m位の隅丸方形(ないし長方形)のプランの住居址ではないかと考えられる。かまどは東壁にある。報告された土器はすべてかまど周辺から出土している。甕(第7図、第8図1)は、横走沈線文群中に縦線と山形、Y字型の沈線文があるが、文様帯中央で強く屈曲し、外反が強い器形である所から、前述の第Ⅱ期後半の所産と考えられる。坯も同時期の特徴を示し、中央部に一条の沈線文が巡る、内黒・平底のものである。それに、図はないが、内黒の轆轤成形による土師器の坏2点(共に、回転糸切り、高さ5.8cm、口径15cm、底径6.5cm)と須恵器の小片が出土したと報告されている。須恵器は、無文で、ナデ痕があり、内外面光沢のある青灰色で、胎土中は暗赤褐色を呈するとある所から、壺の破片と考えられる。

9 厚田郡厚田村聚富土上遺跡(宇山川1965)

6軒の竪穴住居址がみつかり、この内、1号と4号から須恵器の壺が出土している。1号竪穴住居址は、7×6mの大きさと、隅丸方形のプランを呈し、南東壁に焼砂と若干の粘土、中央に焼砂がある。主な出土遺物は、第Ⅲ期前半の捺文式土器の甕と須恵器壺底部片である。4号は、8×6.5mの大きさと、形態は長方形を呈し、南壁にかまどがある。第Ⅲ期前半と考えられる捺文式土器の甕と共に、須恵器の長頸壺が出土した。口唇部と底部を欠損するが、頸部と胴部の境には2条の沈線文によって作出した凸帯があり、逆書き記号が肩部にある。成形、調整、色調については、いずれも記載はない。

10 石狩郡石狩町八幡町遺跡ワッカオイ地点(横山・石橋1975)

6軒の竪穴住居址が検出されているが、その内第4号住居址の覆土中から、内黒の轆轤成形の土師器の坏がみつかり、報告者は底面はヘラ切りと述べているが、底面は断片しか遺存せず、また図も示されていない。規模は5.2×4.8mで、隅丸方形である。かまどは北東壁にあり、中央に焼砂が認められている。覆土中からは、他に第Ⅲ期後半の捺文式土器の甕、かまど上から、体部に綾杉状の沈線文群のある坏が出土している。この坏には、文様帯区画のために横走沈線文が入っている所から、第Ⅲ期前半の所産である可能性が高い。

11 天塩郡天塩町天塩川口遺跡(街道・福田・山田1976)

4軒の竪穴住居址がみつまっているが、その内第1号住居址(かまど南東壁)のかまど内から須恵器の甕胴部破片が出土している。相伴遺物として、捺文式土器の大形甕、坏などがある。甕は、無文で、口唇部近くでややすばまり、そこから極端に強く外弯し、口唇部では心持ち内彎傾向を認める器形から判断して、第Ⅲ期後半に対比される資料と考えられる。

12 千歳市蘭越遺跡(大場・石川1967)

本遺跡の竪穴は「2重址」で、かまどは両址共、同一かまどを利用していると報告されている。

図でみると両址共長方形のプランで長軸は、両址において約125°違っている。ただ、第2址も、第1址のかまどを利用しているという理解には、多分に疑問があるが、実際どういう状態になっていたかは、報告からだけでは判断できない。また、出土遺物に関しても、一切出土位置、層位など明記されていないので、共存関係などは全く不明である。第9図の第1址出土とされた土器の中に、須恵器の長頸壺頸部片（灰青色）、甕胴部片2点（茶褐色と灰青色）の拓影図がある。また、第15図の第2址出土の土器とされた中には、須恵器の長頸壺、甕がある。第15図111は長頸壺で、頸部と胴部に凸帯が巡り、肩部に宛書き記号がある。内外灰青色で、底は平底と説明されている。同図10は甕(?)の口縁部片で、内面には轆轤痕が残り、口唇部付近は強く外彎している。同図32、68は甕の胴部片である。68は、口縁部に近い破片で、「器質はかたく釉薬に類する光沢を有し、まだらな霜降状をしている」と説明されている。自然釉がかかっているのであろうか。

13. 常呂郡常呂町トコロチャシ（東大文学部編1964）

トコロチャシからは、2軒のオホーツク文化期の竪穴住居址が検出されている。1号竪穴は、2個の竪穴が重複したもので、内側の竪穴の方が新しい。内、外の竪穴床面からは、貼付式浮文のあるオホーツク式土器（e群；藤本1966）が数多く出土している。その内で、内側竪穴床面から、土師器の環が出土している。内黒で、轆轤成形され、底は回転糸切りである。サイズは、高さ6.5cm、口径14.7cm、底径6.5cm。

14 斜里郡斜里町ピラガ丘遺跡第Ⅲ地点（金成1976）

第Ⅲ地点の砂丘の頂上部で10基の竪穴がみつまっている。その中で、2号と8号竪穴床面より、轆轤成形の半完形の土師器の環が出土している。2号では、それに捺文式の浅鉢（無文）、トビニタイ式の土器片、8号は捺文式の無文の小形甕を伴っている。捺文式土器については、無文の小形品のため、時期を推定することは難しいが、1号では破片だけであるが、トビニタイ式土器が共存した所から、それに近い時期の所産の可能性が強い。なお、3号竪穴からは、第Ⅲ期前半に属する捺文式土器の甕が出土しているが、それと切り合い関係にある長楕円形のビットからは、トビニタイ式の2個体の半完形土器がみつまっている。報告者によれば、ビットの方がやや新しいが、「トビニタイ土器の埋設は竪穴の廃棄とそれほど時間差があったとは思えない」（p. 12, 13）と述べている。

次に、土壌墓および墳墓（古墳）出土例としては、以下の3遺跡がある。

15 恵庭市上島松遺跡（佐藤・山田1974）

142×77cmの長楕円形の土壌墓の中から、口唇部付近に沈線文によって段を作出した内黒の環破片（第Ⅱ期後半か?）と共に、須恵器の宝珠形のつまみの付いた蓋と高台杯が出土している。杯は高さ6.3cm、口径15.6cm、底径9.3cmの大きさで、暗灰色を呈し、内面に轆轤痕が残り、底面には回転ヘラケズリ痕(?)がある。蓋は、径15.7cmで内外に轆轤痕を残す。天井部中央は、ほぼ平らで、途中からやや傾斜をもって下がっている。口縁部は強く屈曲し、やや内側に向いている。

16 恵庭市茂漁古墳群 (後藤・曾根原1934)

14基の北海道式古墳群が、茂漁川左岸丘陵上でみつまっている。第1号墳は、原形を留めない程破壊され、墓壇は検出できなかったようであるが、墳丘上から椽文式の小形の甕(第Ⅱ期、〔Ⅳ〕型?類似)、高坏、片口注口の浅鉢と須恵器の高台坏などがみつまっている。須恵器は内外に轆轤痕を残し、底は回転糸切りであると報告されている。高さ6.7cm、口径15cm、底径9cmの大きさで、灰褐色を呈する。第8号墳は、4.5×4m、高さ30cmの大きさの楕円形の墳丘を有するもので、墓壇はやはり判明していない。墳丘の頂きから、内黒の「底は二種の糸底」の高台坏が出土している。大きさは、高さ5.5cm、口径10.5cm、底径7cmである。回転糸切り底の土師器であろうか。第11号墳は、墳丘を残さないが、1.65×0.8mの墓壇がみつまっている。墳底から、3個の坏が出土した。第6図5は、須恵器の高台坏(?) (高さ8.7cm、口径14.8cm、底径8.5cm)、同6も、須恵器の低い坏(高さ3cm、口径11.8cm、底径8cm)で、底は丸味がある。第7図3は、椽文式の高台坏(高さ8cm、口径15cm、底径7.5cm)である。

17 江別市町村農場内遺跡 (河野1934)

2基の古墳が報告されているが、その内X江別のG号墳は、3.1×3mの大きさの円形の墳丘をもち、周囲に幅80cm、深さ30cm程の副溝をめぐらしている。墓壇の形態は明らかにされていない。副溝の底から須恵器の高台坏(第5図)が出土している。轆轤成形で、灰色を呈し、回転糸切り底のようである。大きさは、高さ8.7cm、口径14.5cm、底径8.7cmである。また、地表面には須恵器の甕(青海波のある資料を含む)と壺の破片も出土している。

以上であるが、ほかに表探資料で発表されたものも多くあり、また未発表の資料を含めるとかなりの点数になるが、ここでは列挙しない。ちなみに、第1章で触れた明治中葉に作られた古地図中にも、「朝鮮土器」という註記が7カ所ある(第2表)。

(3)

以上の遺跡と本遺跡第1、2号壜穴住居址床面～床面直上の資料を加えて一覧表にしたものが第5表である。須恵器、土師器の資料に関しては、断片的資料がほとんどで、その特徴を把握することが難しい例が多いが、出土状態の明らかでない例も加えて、その特徴に触れてみたい。

北海道内出土の土師質の坏には、大きく轆轤使用以前のもの和使用したものに分けられる。轆轤未使用の資料としては、函館市湯ノ川(斎藤1967)、岡汐泊第1地点(汐泊川遺跡調査団1965)出土の丸底のグループと栗沢町由良、由仁町岩内遺跡出土の坏に代表される副部中央よりやや下に段を有する丸底に近い平底のものが一般的なものである。これらは所謂「桜井第一型式」の坏に対比され、氏家編年(氏家1957)では、第5型式の「栗園式」に対応し、8世紀後半の年代が与えられてきた(桜井1958、石附1968ほか)。しかし、最近桑原(1976)は、この第Ⅱ型式を検討し、第Ⅰ型式は氏家(1967)のいう「国分寺下層式」と併行するという考えを提示し、その年代は、須恵器

第5表 北海道内須恵器・輪軸成形土器器出土地名表

No.	遺跡名	遺構 層積・横切 かも位置	時期	出土遺物(1)	出土遺物(2)	文献
1	由仁町岩内, 2号	竪穴住居址 4.4×4 m, 南東壁	第I期後半	甕, 坏 (須恵器)	埴(スズキ) 埴(ロクロ)	宇田川1969
2	江別市飛島山	竪穴住居址 5.5×5.5, 南西壁	第II期前半	甕〔I, II〕, 坏 (須恵器製)	埴(ロクロ, 糸切), 甕朝平片(青海波) (須恵器)	後藤 1935
3	江別市志分別	竪穴住居址 5×4.65, 南南東壁	第II期前半	甕〔II〕, 坏, 広口壺 (南南東壁製)	坏 (甕土?)	後藤 1935
4	恵庭市下島松	竪穴住居址 5×5, 南東壁	第II期前半	坏 (スズキ)	甕破片(含青海波) (須恵器)	大場・石川 1966
5	千歳市ウサクマイ, N地, 4号	竪穴住居址 5.1×4.64, 南壁	第II期前半	甕〔II〕, 坏 (かまど内, 須恵)	坏(糸切, 燧化末), 甕(青海波) (須恵土?)	石附編1977
6	千歳市ウサクマイ, B地, 1号	竪穴住居址 4.5×4.5, 南東壁	第II期前半?	甕〔II〕, (かまど付造)	坏(ロクロ, 糸切), 甕(青海波, 自然釉), 埴(ロクロ) (スズキ)	石附編1974
	札幌市K446, 第2号	竪穴住居址 5.54×4.5, 北壁	第II期前半	甕〔Iほか〕, 坏, 支脚 (須恵)	坏(ロクロ), 甕(内面磨消), 長頸壺 (スズキ)	
	札幌市K446, 第1号	竪穴住居址 6.2×6.1, 北壁	第II期後半	甕〔Iほか〕, 坏, 支脚 (須恵)	甕(内面一部磨消, 自然釉) (かまど内)	
7	恵庭市西島松南第1号	竪穴住居址 4.2×4, 南東壁	第II期後半	甕〔IV〕, 坏 (かまど付造)	小形壺 (ハツキ)	大場・石川 1966
8	千歳市千歳神社裏	竪穴住居址 3×3(?), 東壁	第II期後半	甕, 坏 (かまど付造)	坏(ロクロ, 糸切), 壺破片 (ハツキ)	河野 1932
9	厚田村緊宮上, 1号	竪穴住居址 7×6, 南東壁	第III期前半	甕 (須恵器内)	甕(須恵器内)	宇田川1965
9	〃, 4号	竪穴住居址 8×6.5, 南壁	第III期前半	甕 (須恵器内)	長頸壺 (須恵器内)	宇田川1965
10	石狩町八幡町, ワッカ オイ, 4号	竪穴住居址 5.2×4.8, 北東壁	第III期後半	甕, 坏 (須恵器)	坏(ロクロ, ヘラ切) (かまど内)	横山・石橋 1975
11	天塩町天塩川口, 第1号	竪穴住居址 不明, 南東壁	第III期後半?	甕, 坏 (須恵器)	甕(内面磨消?) (かまど内)	街道ほか1976
12	千歳市蘭越, 第1号	竪穴住居址 4.6×3.2, 南壁	第III期後半- 前半	甕, 高台坏, 坏(?) (須恵器内?)	長頸壺破片, 甕(内面磨消?) (須恵器内?)	大場・石川 1967
12	〃, 第2号	竪穴住居址 4.2×3.6, 南東壁	第III期後半	甕, 坏 (須恵器内?)	長頸壺, 甕(内面磨消?), 自然釉 (スズキ)	大場・石川 1967
13	常呂町トコロチヤシ, 1号内側	竪穴住居址 12.7×9, なし	オホーツク式 (e 甕)	オホーツク式 貼付式浮文 (須恵)	高台坏(ロクロ, 糸切) (ハツキ)	東大文学部 編 1964
14	斜里町ヒラガ丘, 2号	竪穴住居址 6.1×5.5, なし	オホーツク式 (f 甕)	小形甕(オホーツク式, トビニヤ式) (須恵)	埴(ロクロ) (須恵)	金盛 1976
14	〃, 8号	竪穴住居址 5.8×3.4, なし	第III期前半?	小形甕 (須恵)	坏(ロクロ, 糸切) (須恵)	金盛 1976
15	恵庭市上島松, 第4号	土壇基 1.42×0.77,	第III期	坏破片 (須恵)	高台坏(ロクロ, ヘラ切), 坏蓋(宝珠状つまみ) (スズキ)	佐藤・山田 1974
16	恵庭市茂流, 第1号	古墳 不明	第III期	甕〔I?〕(小形), 高台坏, 片口注口浅鉢 (須恵)	高台坏(ロクロ, 糸切) (ハツキ)	後藤・曾根原 1934
16	〃, 第8号	古墳 不明	第III期?	なし	高台坏(糸切?) (須恵)	後藤・曾根原 1934
16	〃, 第11号	古墳内墓壇 1.65×0.8,	第III期前半?	坏 (須恵)	高台坏(?), 坏 (スズキ)	後藤・曾根原 1934
17	江別市町村農場, 又江別のG号	古墳 3.1×3,	第III期前半?	なし	高台坏(ロクロ, 糸切), 甕(含青海波), 甕 (スズキ)	河野 1934

(注) 出土遺物1は, 標文式土器, 同2は, 須恵, 土師系土器。オホーツク式土器の分類は, 藤本(1966)による。

坏(6-a, 6-b類:岡田・桑原1974)との共伴関係から8世紀後半から9世紀半にかけての年代幅をもつものであろうとした。確かに、湯ノ川、汐泊例の坏は丸底で、「栗匱式」に対比することもでき、より古いステージのものと考えられるが、由良、岩内例は丸底に近い平底で、段状の沈線文もかなり底部近くにきており、この仲間には「函分寺下層式」に対比されるという見解は妥当性があると考えられる。すなわち、道内において、轆轤成形以前の坏には、2型式あると考えられる。

なお、利尻郡利尻町亦雄遺跡(岡田・楯田・西谷・西本ほか1978)では、オホーツク式土器を主体とした文化層から、関東地方の鬼高式土器末期のものに近似した、赤色に着色された丸底の坏が出土している。この「栗匱式」以前の資料が、(特に日本海沿いに)単独資料ではあるが、北海道内に流入している事実は、今後充分注意する必要があると思われる。

さて、轆轤成形による資料については、前述した以外に、江別市坊上山遺跡(河野・岩崎・宇田川1970;第19図、写真25)、舟部郡舟部町米太川右岸河口付近(大場・棚瀬ほか1963;第18図7.4, 7.6)、新冠郡新冠町美宇(扇谷・愛下ほか1967)、爾志郡乙部町采浜(高下1967)、松山郡上ノ国町四十九里沢A遺跡(其田1974)などがある。大きさは、ワッカオイ出土の口径17cm、高さ8.6cmの大形例を除くと、口径11~15cm、高さ4.8~6.8cmのサイズで、いずれも近い値である。口径と底径の比(底径/口径)は、0.36~0.48までであるが、0.42を平均値にして、その前後に集中している。すなわち、体部はやや内彎気味に立上り、口径の割に深いもので、底部の上部がややくびれているものである。轆轤からの切り離しで、明確なものは回転糸切りである。なお、ワッカオイ例は、ヘラ切りと説明されているが、底面の図が示されていないので是非は検討できない。整形については、ワッカオイ、ウサクマイB、トコロチャシ、采浜例は内黒であると記載されているが、あとは明らかではない。本遺跡発掘区出土の第33図30の底部片でみると、内面はミガキと黒色処理が施こされ、外面は、若干風化していて判然としなが、未整形のままのようである。

東北地方で、轆轤使用の回転糸切りの坏は、「表杉ノ入式」(氏家1957)といわれ、現在その年代は、10世紀前半を中心にかかなりの幅をもった時期と考えられ(氏家1967)、また須恵器坏との共伴関係からは、9世紀後半から11世紀後半までと推定されている(岡田・桑原1974)。

一方、須恵器の坏については、完形品に近い資料は、飛鳥山、茂漁第11号墳と白老郡白老町アヨロ遺跡(名取・峰山1962)、松前郡松前町大尽内遺跡(2点)(久保・小柳・桐谷1975)、本遺跡発掘区(第32図5)の6点だけである。飛鳥山例は、口径11cm、底径5.4cmで、その比は0.49、高さは3.8cmのもので、体部は心持ち内彎気味に立上る。底は、一部が欠失するが拓影図によると回転糸切り痕と判断できる。整形は不明。茂漁の例は、図も説明も不十分であるが、底径が広く、高さのないものである。K 446、アヨロ例は、各々口径14.9、12cm、高さ6.9、5.5cmで、かなり口径の割に器高がある。口径と底径の比は、0.46、0.4で、底は小さく、体部はやはりやや内彎気味に立上り、全体として、上述した土師器の坏の器形と類似する。整形は、K 446の資料でみる限りでは行なわれていない。大尽内出土の第18図5は、口径11.8cm、底径6cm(比は0.51)で、高さは4.6cmである。体部はやや直線的に上っている。同図6は、口径12.2cm、底径5.6cm(比は0.46)、高さ4.8cmで、内彎気味に体部は立上り、口唇部近くでやや外彎する。共に回転糸切り底であるが、整形に

については具体的記載はない。後者は、K 446、アヨロの器形に近い。なお、ウサクマイN地点の発掘区からは、回転ヘラ切り痕のある底部小片がみつまっているが、出土状態は明らかではない。

東北地方の須恵器の環の編年については、岡田・桑原(1974)によって、多賀城周辺の資料を中心に大綱が示されている。それに対比させていくと、茂漁例を除く、4遺跡の環は、第9類に相当する。第9類は、回転糸切り轆轤から離し、整形の行なわないもので、形態上から、(a)口径に比し、底径が比較的大きいもの(比は、0.5前後かそれ以上)、(b)口径に比し、底径の小さいもので、底径が小さくなるにつれ、体部長は増加する傾向にあるもの(比は、0.4前後)の2種がある。この基準で判断すると、飛鳥山と大尽内の第18図5例は、第9類aに、K 446、アヨロ、大尽内第18図6例は同bに対比できる。しかし、後者は、全体に高さがある点は若干異なっている。この傾向は、同形の土師器の環についてもいえるかもしれない。この種の深い土師器、須恵器の環の類例は、青森県南津軽郡洩洞町源常平遺跡(三浦・杉山ほか1977)第63号住居址と青森市近野遺跡(山道・三浦ほか1974)第24号住居址などにあり、青森県内に特に多いようである。この第9類の年代に関しては、a(9-a類)の上限は9世紀後半とし、10世紀前半までつづき、b(9-b類)は、はじまりを10世紀とし、終末を、1,000年前後におくと推定されている。

以上の事実から、前述した標文式土器の年代を求めると、第Ⅰ期後半は、前述した土器群が由良遺跡などの「国分寺下層式」の土師器と併行関係にあるという推定が許されるなら、8世紀後半から9世紀前半を中心とした時期であると考えられる。第Ⅱ期前半は、飛鳥山で出土した須恵器の環が、第9類aのタイプである点から、宮城県編年を援用すれば、9世紀後半から10世紀前半におかれる。

なお、第5表からも判断されるように、道内の標文式土器に伴う須恵、土師質の移入された環のあり方は、第Ⅱ期前半までは、須恵器であるが、それ以降は土師器ばかりで、須恵器はないという特異な傾向がある。同様のことは、後述する青海波のついた壺、そして壺に関してもいえることで、時期によるセットの差が明確にあるようである。

次に、高台環については、第5表に示した例と大尽内遺跡出土の第18図4があるが、土壇墓と北海道式古墳の墓内から出土したものがほとんどである。いずれも、轆轤成形であるが、整形については具体的内容は知りえない。ただ、上島松例は、写真で判断する限り、底面は回転ヘラケズリ調整を行っているようである。また、町村農場と茂漁第1号墳のは、回転糸切り痕があると説明されている。茂漁第8号墳と大尽内出土のものは、土師質であると説明されているが、あとは須恵器である。須恵器例は、形態的にみると2種類ある。第1類は、町村農場、茂漁第11号墳にあるもので、器高と底径がほぼ等しく(8.5~8.7cm)、全体として口径が狭く、器高の高いタイプである。体部は、ほぼ直線的に立上がり、体部下半に至って丸味をもちながら高台につながるため、屈曲部における稜は認められない。高台は厚く、外に拡がりみせる。第2類は、上島松、茂漁第1号墳で出土したもので、前者に比べて環部は大きく(15.6~15cm)、広いもので高さはやや低い(6.7~6.3cm)。体部は、心持ち内彎気味に立上がるが、下半に至り丸味を持ち高台につながる点は前者と同様である。高台部は、上島松例でみると強く外に拡がり、先端部が尖るものである。この2者は、宮城県伊治

城跡(氏家・桑原ほか1978)の分類に対比すると、第1類は、高台坪V、VI類、第2類は、同IV類となる。なお、上島松では、これに宝珠状のつまみのついた坏蓋が出土している。坏蓋は、これ以外に、ウサクマイB地点I-9区(石附編1974)、江別市坊主山(石附1966)でも出土している。

甕に関しては、第II期前半のものは、内面の叩き目痕を磨消しないものと青海波のついた資料が多い。それ以降になると一部磨消したものと、完全に磨消し、痕跡をとどめないものになる。同様の見解は、石附(1966)も既に述べている。

壺は、第II期後半になって顕著に伴出するもので、管見の範囲で知りうる限りすべて須恵器の長頸壺である。特徴の判断可能な資料としては、西島松南B遺跡第1号竪穴住居址、蘭越遺跡竪穴第1、2址、聚高土上遺跡1、4号竪穴住居址以外に、十勝郡幕別町農事試験場内(北構1937)、江別市坊主山、萩ヶ丘遺跡(河野・岩崎・宇田川1970)などで出土している。大きく、2種類ある。

第1類は、西島松南B遺跡にあるもので、高さ11.8cm、口径6cm、底径5.6cmの小形の壺である。最大幅は胴上部にあり、頸部は広く、短いものである。口唇部は、弱いがつば状の張り出しがある。底には、低い高台がつき、匁書き記号が底面にある。成形、調整については、報告からだけでは判断できない。

第2類は、蘭越第2址、土上4号竪穴住居址、坊主山、萩ヶ丘、幕別とK446遺跡の第2号竪穴住居址出土例のもので、胴部は、かなり強く球形にはらみ、最大幅は胴中央から上部にかけてのものが多く、頸部は、狭く長いものがつき、頸部と胴部の境には、蘭越、土上、坊主山、幕別例では、沈線文によって作出された凸帯が、K446では浅い幅広の沈線文が巡っている。底は、蘭越、土上1号竪穴住居址例は平底のようであるが、K446、坊主山、萩ヶ丘では低い高台がつくようである。特に坊主山とK446では、菊花状文がある。この菊花状文は、青森県内の前田野目砂田(村越・新谷1974;第7図9)、持子沢(坂詰1974;第3図2)、近野(山道・三浦・成田1974;図53-9、図69-11、図91-8)、牡丹平南(成田・古市編1975;第56図1)、三内(桜田編1978;第104図73、74)および岩手県江刺市瀬谷子(大川・高橋・伊藤1969;Fig.10-8)などにも認められる。

以上で、道内における須恵器、轆轤成形土師器杯の説明は終るが、これらの據文式土器とは異なる土器群は、どこから搬入されたものであろうか。須恵器に関していえば、北海道内では、いまだ窯跡はみつからない。一番近い所では、青森県五所川原市にある前田野目窯跡群、持子沢窯跡群などである。そして道内出土の須恵器類も、器形、整形、焼成などの点でこれらの窯跡群出土のものと同様している。その年代については、坂詰(1969など)は、安東氏との関連において須恵器生産の開始を捉え、平安末から鎌倉前半とした。しかし、最近多賀城跡を中心とした須恵器研究の成果に基づいて、もっと古く9世紀半から、1,000年を前後する頃という意見(桑原1977)も出ている。

なお、東北地方における據文式土器の様相と土師器、須恵器のかかわりあいについても触れる心算であったが、時間の関係で割愛するが、その内容については、桜井(1968)、高杉(1977)などが詳しく述べているので参照されたい。

ところで、本遺跡からは、円筒形の径の大きい特異な支脚が出土した。不明確な破片を除くと、

北壁にかまどをもつ第1, 2号竪穴住居址からのみ出土している。時期は、第Ⅱ期前半から後半にかけてである。道内において、専用の支脚の出土は、管見の限りはなく、ただ、甕・坏などの上器を再利用したものがあ程度である。同様の支脚は、青森県近野遺跡(山道・二浦・成田1974)の第2号(図36-4)、第12号(図48-1)、第21号(図65-2)住居址と岩手県の浮橋貝塚(村越1968; Fig.150-8)、秋田県能代市サシトリ台遺跡(秋田県教育委員会編1976; 挿図14-5)などで出土している。また、北林(1972)によれば、この種の支脚は、青森県内の製塩遺跡(大浦, 白砂, 瀬野, 玉清水Ⅲ, 竹達など)から、白砂式の製塩土器と共にしばしば採集されるもので、棒状の土製支脚と区別する意味で、「カマド用器台」という呼称を与えている。そして、「器台は支脚の改良されたもの」で、白浜式に伴った例は、製塩に際して、土製支脚と共に五徳として用いられたものであろうと説明している。

また、甕は、道内では、由良遺跡および江別市(?) (河野1959) から多孔式のものが出土している。また、石狩郡当別町(岩崎1965)から、1cm程の孔の開いた糸切り底の破片が出土している。本遺跡のもの(第31図2)は、底部が欠損し、孔の状態は不明であるが、口唇部直下に浅く細い1条の沈線文が巡り、そこからやや外彎傾向を認め、また口唇部の断面がやや尖る所から、第Ⅰ期に属する資料ではないかと考えている。

結 語

以上、各項日別に述べてきたが、K 446 遺跡は、撥文時代の第Ⅰ～Ⅳ期にかけての、竪穴住居址のある遺跡である。

住居址は、全部で11軒みつかったが、それらはかまど址の位置、規模などから5グループに分けられた。その中で、北壁にかまどをもつ第1、2号および東北東壁にかまどをもつ小形の第3、4、5号は、第Ⅱ期の所産で、あとは第Ⅲ期前半ないし第Ⅳ期の所産と考えられる。

また、第2号(第Ⅱ期前半)と第3号(第Ⅱ期後半～第Ⅲ期前半)は一部重複して構築され、さらに第9a号(第Ⅲ期前半)と第9b号(第Ⅱ期後半?)は改築されたと考えられる例であった。

第1、2号竪穴住居址からは、多くの撥文式土器(甕、坏)と共に、本州地方から移入されたとされる須恵器の長頸壺、杯、甕が出土した。東北地方においては、須恵器の坏をもとに、共作する瓦の年代から、その編年と絶対年代がほぼ明らかになってきているが、本報告では、この型式分類と年代観を採用して、撥文時代第Ⅱ期前半の年代は、9世紀後半から、1,000年を前後する時期の所産と推論した。第Ⅱ期は、従来の東大編年(東大文学部編1964b)では「撥文土器第1」、石附編年(石附1968)では「撥文式土器Ⅰ期」、菊地編年(菊地1970)では「撥文式土器A」にほぼ対比できるもので、各編年は、その年代を8～9世紀、8世紀末～9世紀前半、8世紀後半～9世紀と考えておられる。これらの年代観の主要な論拠は、桑原(1976)も指摘する如く、「蝦夷」などとの関連から、土器型式の変化の契機を、律令政府支配の北進といった政治的背景と関連させ、桜井編年を基準に出されたもので、遺物の編年学的研究に基づく実証的方法論に必ずしもよったものではなかった。本稿における推論も、搬入品という不安定な材料を用い、単純に多賀城址を中心とした須恵器の坏の年代観を、そのまま採用した点において、論拠の不充分さはいなめないかと思われる。また、本報告で引用した資料については、いづれも実見する機会をもたなかったため、報告書を基にした判断であって、大きな誤謬をしている部分があることを危惧している。従って、この推論の肉付けについては、今後の実証的な研究を通して果すことをお許し願いたい。

さて、K 446 遺跡は、偶然にも明治年間中葉に、高畑直一によって作られたと考えられる旧琴似川水系の竪穴住居址分布図が発見されたことによって、その存在が知られたものである。旧琴似川水系は、現在そのほとんどが失われ、痕跡すらも残っていない所が多いが、しかしこの水系には、市内最大の撥文時代およびそれ以降の集落があったことは明白である。その数は、700軒余とも2,000軒余とも推定される量である。現在、これらの遺跡がどれ程、破壊されずに埋蔵されているかは、正確にはまだ充分明らかにされていない。しかも、旧琴似川水系が流れていた所は、古くから市街地化し、また今もその傾向が増している。一日も早く、これらの遺跡群について、その実体を把握し、保護対策を講じる必要があると思われる。

[付 記]

[¹⁴C年代測定結果]

K 446 遺跡第 2 号竪穴住居址

C-1 (かまど内木炭) : 1,370±140年 B. P.

(A. D. 580年) (Gak-7,722)

C-2 (炉址? 内木炭) : 910±110年 B. P.

(A. D. 1,080年) (Gak-7,723)

(註: B. P. 年代は, 1,950年よりの年数)

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会編 1976 『能代・山本地区広域農道建設に伴う発掘調査報告』 秋田県文化財調査報告書37
- 石川 徹・佐藤一夫・金山哲夫 1971 『ママチ遺跡』(単)
- 石附喜三男 1966 『北海道の須恵器 ―その出土地名表と甕のたたくき目に関する一、二の問題』 『北海道青年人類科学研究会誌』8所収
- 石附喜三男 1968 『檜文式土器の初現的形態に関する研究』 『札幌大学紀要』1(教養部論集)
- 石附喜三男編 1974 『北海道千歳市ウサクマイ遺跡―B地点発掘報告書』(単)
- 石附喜三男編 1977 『ウサクマイ遺跡―N地点発掘報告書』(単)
- 石橋次雄・山口 敏・後藤秀彦・河村七五三喜 1975 『卜勝太若月―第三次発掘調査』(単)
- 伊藤正三 1911 『札幌区史』(単)
- 岩崎隆人・宇田川洋・河野本道・西野彰子 1963 『札幌市付近の遺跡―収録篇、分布図篇』 『郷土の科学』41/42所収
- 岩崎隆人 1965 『石狩郡当別町字梅戸通り出土の土器』 『銅路の古代文化』8所収
- 上野秀一編 1974 『N162遺跡』 札幌市文化財調査報告書V
- ウサクマイ遺跡研究会編 1975 『烏帽子』(単)
- 氏家典典 1957 『東北土師器の型式分類とその編年』 『歴史』14所収
- 氏家典典 1967 『陸奥国分寺跡出土の丸形環をめぐって』 『山形県の考古と歴史』所収(柏倉亮吉選訳記念論文集)
- 氏家典典・桑原滋郎・進藤秋輝ほか 1978 『伊治城跡I』(単)
- 宇田川洋 1965 『厚田村菜富士土遺跡発掘調査概報』 『Aynu Moshin』I所収
- 宇田川洋 1969 『由仁町岩内遺跡』 『由仁町の先史遺跡』所収
- 宇田川洋 1977a 『北海道考古学講座7』 檜文期。 『北海道史研究』13所収
- 宇田川洋 1977b 『北海道の考古学』2(単)
- 大井晴男 1970 『檜文文化とオホーツク文化の関係について』 『北方文化研究報告』4所収
- 大井晴男 1972 『北海道東部における古式の檜文式土器について』 『常呂』所収
- 大川 信・高橋 章・伊藤博幸 1969 『瀬谷子窟跡群緊急調査概報』(単)
- 藤谷昌彦・愛下 淳・橋本 晋・中田幹雄 1967 『日高の文化財(第1集)』(埋蔵文化財篇)(単)
- 大谷敏三編 1978 『祝梅三角山D遺跡における考古学的調査』 千歳市文化財調査報告書Ⅲ
- 大場利夫・石川 徹 1961 『浜益遺跡』(単)
- 大場利夫・松崎崇徳・渡辺兼庸 1961 『上ノ国遺跡』(単)
- 大場利夫・岡本幹二・児玉謙次 1962 『室蘭遺跡』(単)
- 大場利夫・榎瀬善一・金子右明 1963 『秀都遺跡』(単)
- 大場利夫・石川 徹 1966 『恵庭遺跡』(単)
- 大場利夫・石川 徹 1967 『千歳遺跡』(単)
- 岡田淳子・福田光明・西谷栄治・西本豊弘 1978 『赤穂貝塚』(単)
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974 『多賀城周辺における古代環形土器の変遷』 『(多賀城跡調査研究所)研究紀要』I所収
- 小山内照・杉本良也・北川芳男 1956 『5万分の1地質図幅説明書―札幌』(単)
- 街道重昭・福田友之・山田悟郎 1975 『大温川口遺跡』(単)
- 金盛典夫 1976 『ピラガ丘遺跡―第Ⅲ地点発掘調査報告』(単)

- 金子郡平・高野隆之 1914 「北海道人名辞典」(単)
- 菊池徹夫 1970 「縄文式土器の形態分類と編年についての一試論」『物質文化』15所収
- 北橋保男 1939 「北海道稚内町付近の先史時代遺跡調査報告」『上代文化』17所収
- 北林八洲晴 1972 「青森県陸奥沿岸の製塩土器(予報)」『考古学研究』18-4所収
- 久保 泰・小柳正夫・梶谷賢一 1975 「松前町建石遺跡、松前町大尽内遺跡」(単)
- 桑原滋郎 1976 「東北地方北部および北海道の所謂第1型式の土師器について」『考古学雑誌』61-4所収
- 桑原滋郎 1977 「津軽で作られた須恵器」『考古風土記』2所収
- 後藤力・曾根原武保 1934 「胆振国千歳郡志麻村の遺跡について」『考古学雑誌』24-2所収
- 後藤寿一 1935 「石狩国江別町の竪穴住居跡について」『考古学雑誌』25-2所収
- 後藤寿一 1937 「札幌市及び其附近の遺跡・遺物の二・三に就いて」『考古学雑誌』27-9所収
- 河野常吉 1899 「北海道先史時代の遺跡遺物並に人種」『北海道教育雑誌』79-81所収(1975『河野常吉著作集』
II所収)
- 河野広道 1932 「胆振国千歳村大山原下の竪穴遺跡」『人類学雑誌』47-5所収
- 河野広道 1934 「北海道の古墳様墳墓について」『考古学雑誌』23-2所収
- 河野広道 1959 「北海道の土器」『郷土の科学』23所収
- 河野正道・岩崎隆人・宇田川洋 1970 「先史時代」『江別市史』所収
- 斉藤 傑 1963 「空知郡栗沢町由良遺跡出土の土器」『北海道青年人類科学研究会誌』1所収
- 斉藤 傑 1967 「縄文文化初頭の問題」『古代文化』19-5所収
- 坂詰秀一 1969 「津軽・前田野日竪跡」(単)
- 坂詰秀一 1974 「津軽持子沢竪跡第2次調査概報」『北奥古代文化』6所収
- 桜井清彦 1958 「東北地方北部の土師器と乾穴に関する諸問題」『館址』所収
- 桜井清彦 1968 「東北地方の縄文文化について」『北奥古代文化』1所収
- 板田 隆編 1978 「青森市三内遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書37
- 佐藤忠雄・山田 忍 1974 「上島松遺跡」(単)
- 佐藤達夫 1972 「擦紋土器の変遷について」『常呂』所収
- 札幌史学会編 1897 「札幌沿革史」(単)
- 札幌市教育委員会編 1974, 1975, 1976, 1977 「札幌市埋蔵文化財台帳」(昭和49年3月現在), (昭和50年3月増補),
(昭和51年1月現在), (昭和52年3月現在) 札幌市文化財調査報告書II
- 札幌市史編纂委員会編 1958 「札幌市史(産業経済篇)」(単)
- 沙泊川遺跡調査団 1965 「沙泊遺跡(沙泊川遺跡群第1地点)の資料」『Field』2所収
- 其田良雄 1974 「上ノ国町四十九里沢A遺跡発掘報告書」(単)
- 高倉新一郎・河野広道 1956 「琴似町史」(単)
- 高杉博章 1977 「本州における縄文文化の様相」『考古風土記』2所収
- 高橋正勝編 1971 「柏木川」(単)
- 竹田輝雄・大嶋和夫ほか 1963 「発見岩陰遺跡」小樽市博物館紀要2
- 東京大学文学部編 1964a 「常呂の遺跡(続)」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』(下)所収
- 東京大学文学部編 1964b 「縄文土器とオホーツク土器」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』(下)所収
- 永田方正 1891 「北海道蝦夷諸地名解」(単)(1972復刻版)
- 名取武光・峰山 巖 1962 「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』17所収
- 成田滋彦・古市豊司編 1975 「黒石市牡丹南遺跡、浅瀬石遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書26
- 羽賀憲二 1975 「札幌市、琴似川流域にあった竪穴住居址群」『北海道考古学』11所収
- 藤本 強 1966 「オホーツク式土器について」『考古学雑誌』51-4所収

- ふじもとひでを 1968 『アイス研究史——ある断面』 (単)
- 北大解剖教室調査団 1963 『小幌洞窟遺跡』 『北方文化研究報告』 18所収
- 北大調査団 1955 『北大遺跡について』 『北方文化研究報告』 10所収
- 三浦圭介・杉山 武・成田滋彦・相馬信吉 1977 『濙常平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書39
- 峰山 巖・金子浩昌・松下 亘・竹田輝雄 1971 『天内山』 (単)
- 宮下正司 1967 『〔資料〕檜山国乙部町出土の土師器群』 “Field” 4所収
- 村越 潔 1968 『浮橋貝塚』 『岩木山』 所収
- 村越 潔・新谷 武 1974 『青森県前田野目砂田遺跡発掘調査概報』 『北奥古代文化』 6所収
- 山田秀三 1965 『札幌のアイヌ地名を尋ねて』 (単)
- 山道紀郎・三浦圭介・成田滋彦 1974 『近野遺跡(Ⅱ)』 青森県埋蔵文化財調査報告書22
- 横山英介・石橋孝夫 1975 『石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点調査報告書』 (単)
- 青崎昌一・横山英介・直井孝一ほか 1975 『紅葉山砂丘における考古学的調査報告』 (単)

図 版

土 器 縮尺 $\frac{1}{2}$ (完形土器)
縮尺 $\frac{1}{2}$ (破片)
土製品 縮尺 $\frac{1}{2}$
磔 縮尺 $\frac{1}{2}$



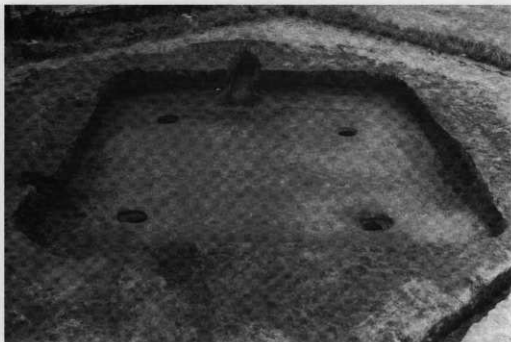
A 遺跡遠景 (北より)



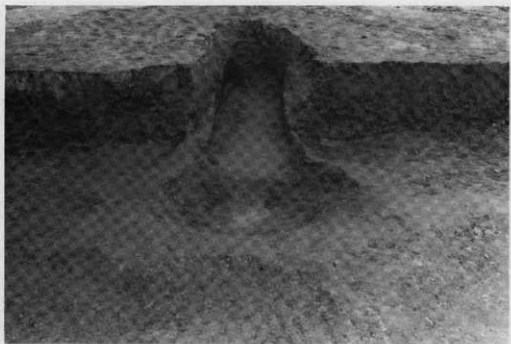
B 遺跡発掘風景



札幌市K436(1)、K41(2)遺跡出土土器



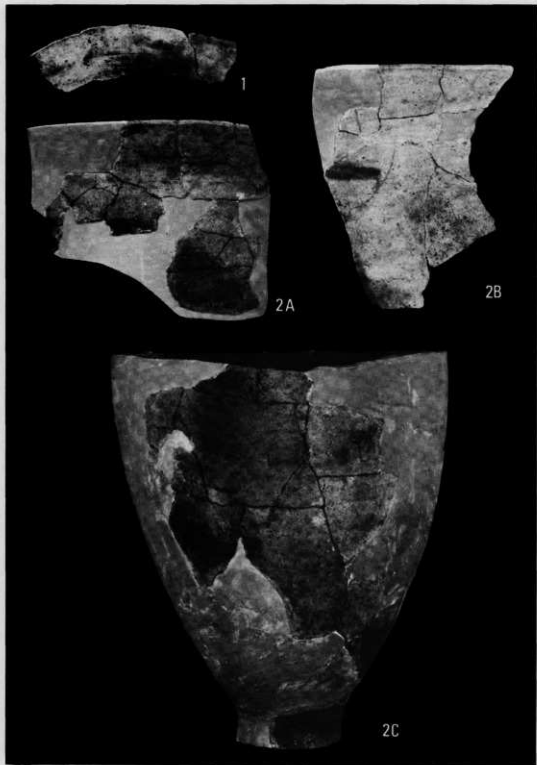
A 第1号竪穴住居址（南より）



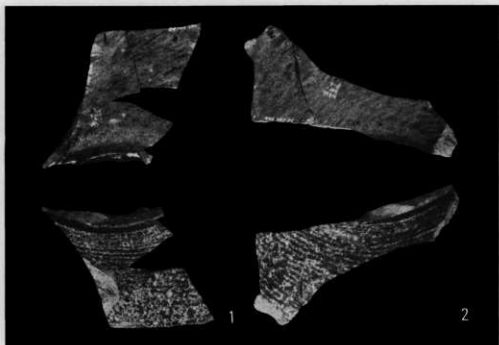
B 第1号竪穴住居址かまど址（南より）



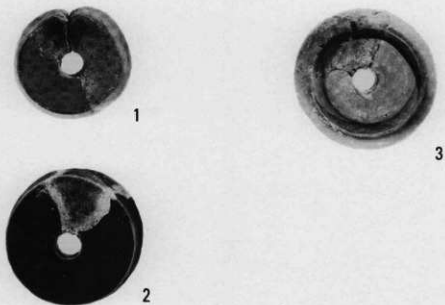
第1号壑穴住居址出土土器 (1)



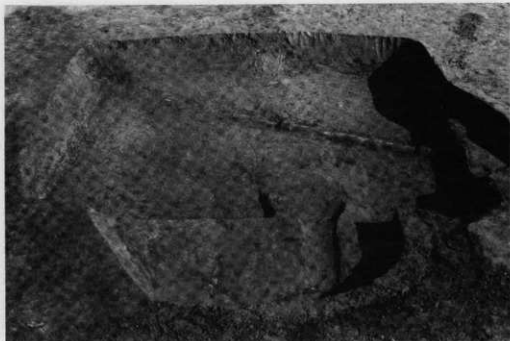
第1号竪穴住居址出土土器(2)



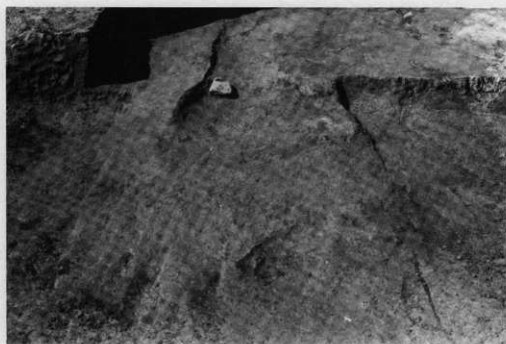
A 第1号雙穴住居址出土土器(3)(須恵器)



B 土製紡錘車(1、2：第1号雙穴住居址、3：第6号雙穴住居址)



A 第2、3号竪穴住居址（北より）



B 第2号竪穴住居址かまど址（南より）



A 第2号竪穴住居址土器出土状態(1) (かまど覆土、須恵器ほか、南より)



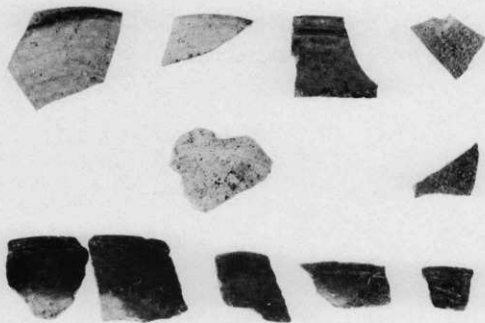
B 第2号竪穴住居址土器出土状態(2) (P-2, 第3号竪穴住居址かまど下部、西より)



第2号竪穴住居址出土土器(1)



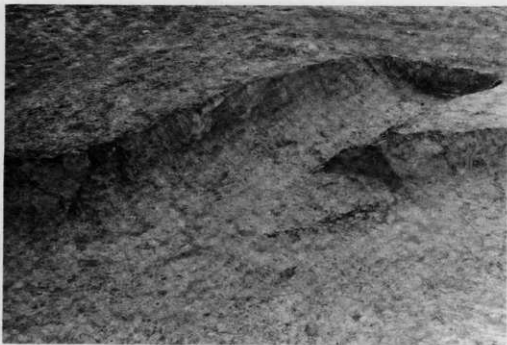
第2号(1~4)、第3号(5)竪穴住居址出土土器(2)



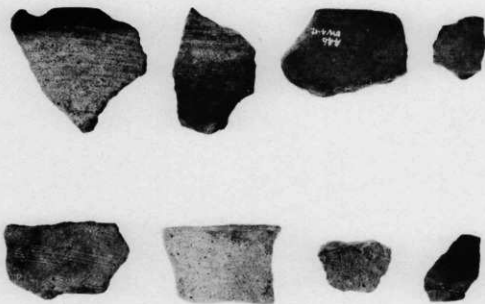
A 第2号竪穴住居址出土土器(3)



B 第4号竪穴住居址(西南西より)



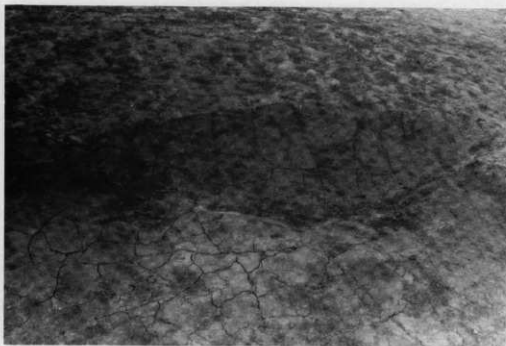
A 第4号竪穴住居址かまど址(西より)



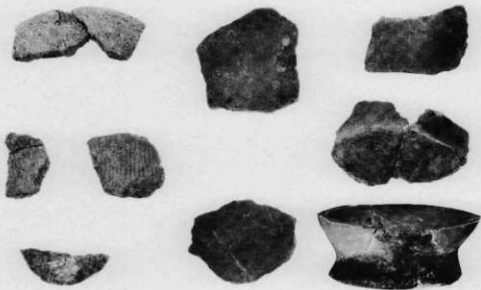
B 第4号竪穴住居址出土土器



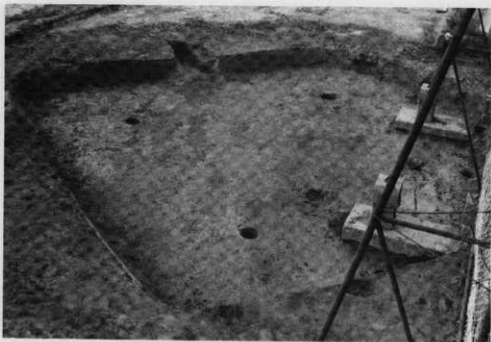
A 第5号竪穴住居址（南西より）



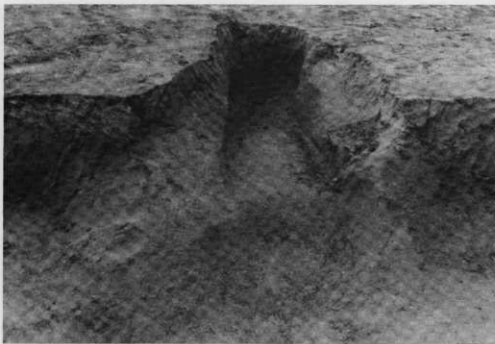
B 第5号竪穴住居址かまど址（南南西より）



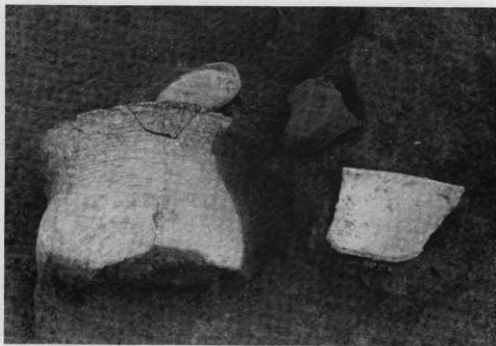
A 第5号竪穴住居址出土土器



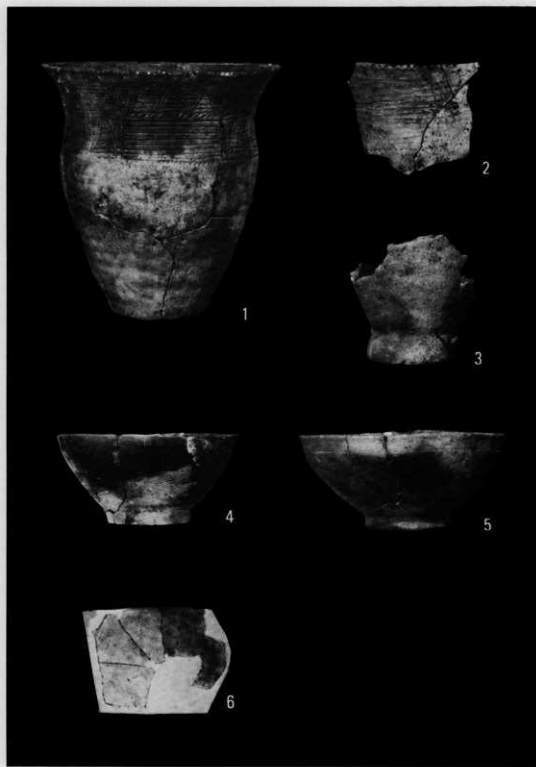
B 第6号竪穴住居址 (北西より)



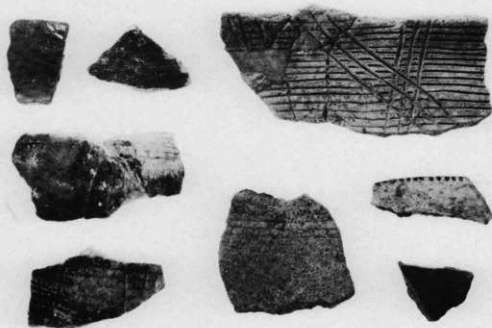
A 第6号竪穴住居址かまど址（北より）



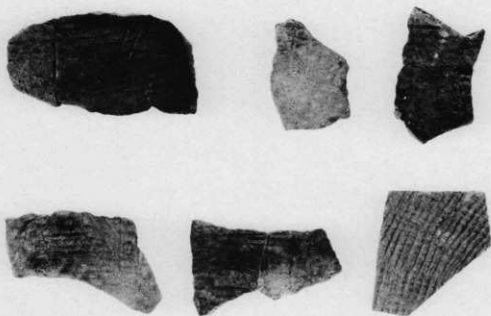
B 第6号竪穴住居址土器出土状態（北より）



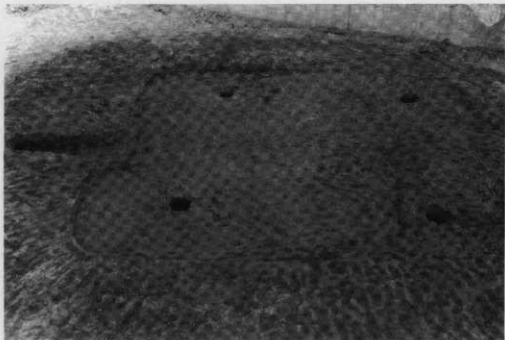
第6号壑穴住居址出土土器(1)



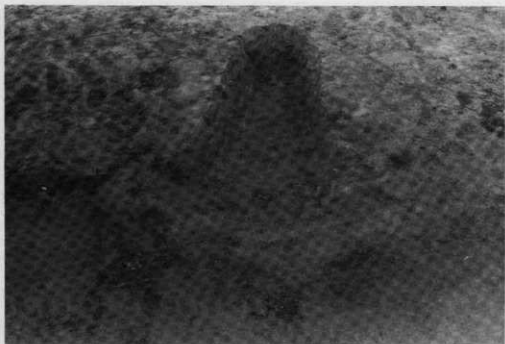
A 第6号竖穴住居址出土土器(2)



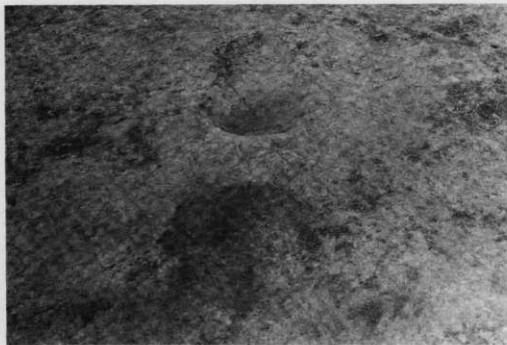
B 第6号竖穴住居址出土土器(3)



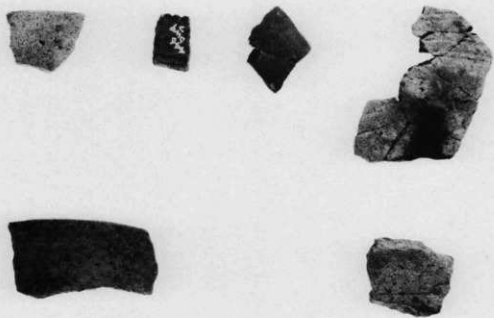
A 第8号竪穴住居址（北西より）



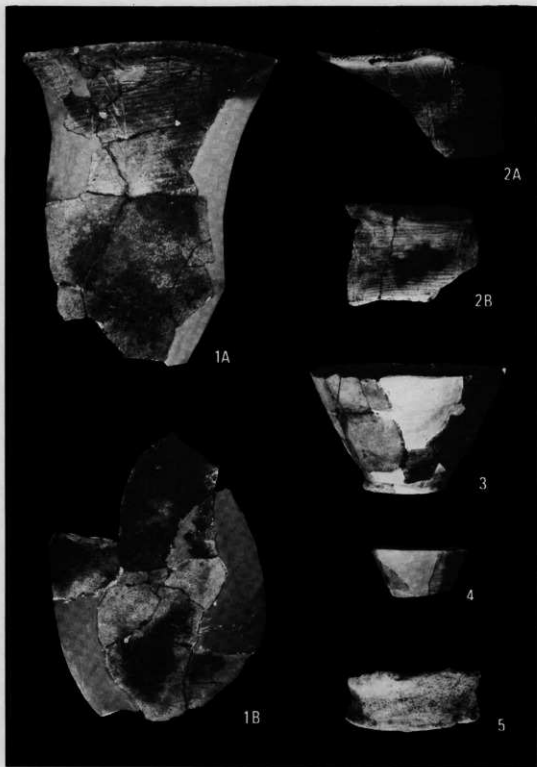
B 第8号竪穴住居址かまど址（南西より）



A 第7号壑穴住居址かまど址（北より）



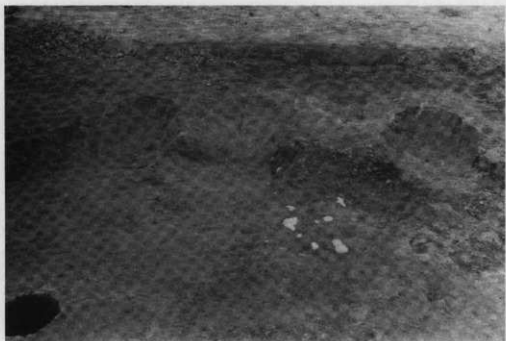
B 第9a,b号壑穴住居址出土土器(1)



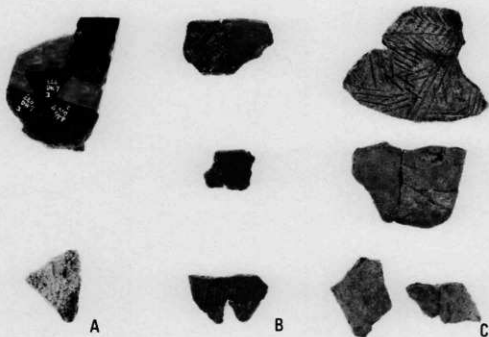
第 9a 号整穴住居址出土土器(2)



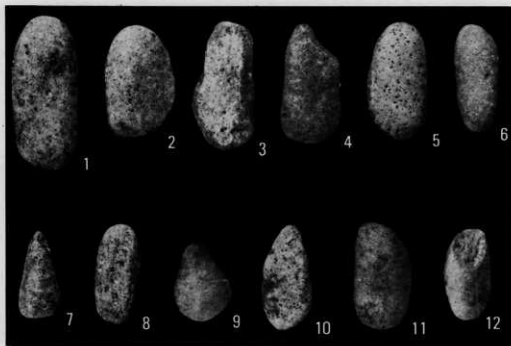
A 第10号竪穴住居址（北西より）



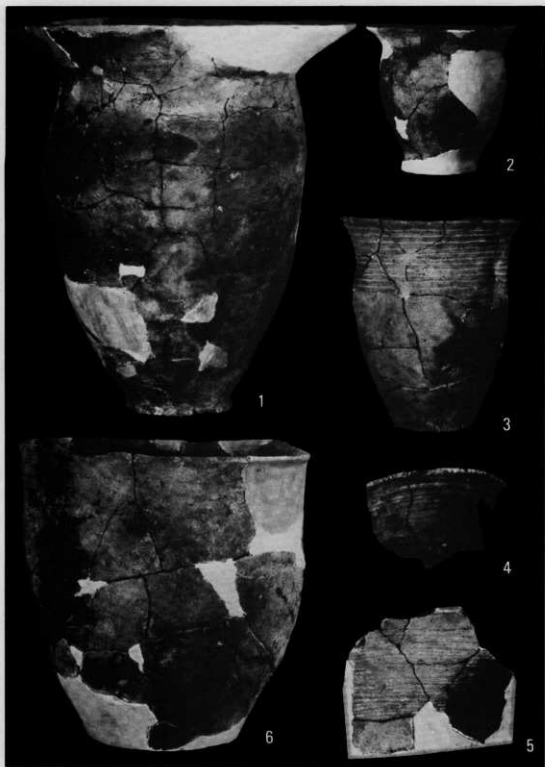
B 第10号竪穴住居址かまど址（北東より）



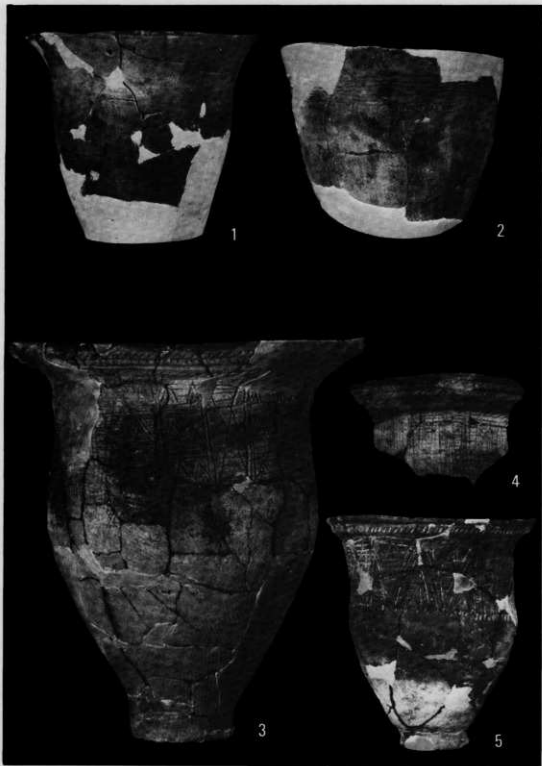
A 第7号(A),第8号(B),第10号(C) 竖穴住居址出土土器



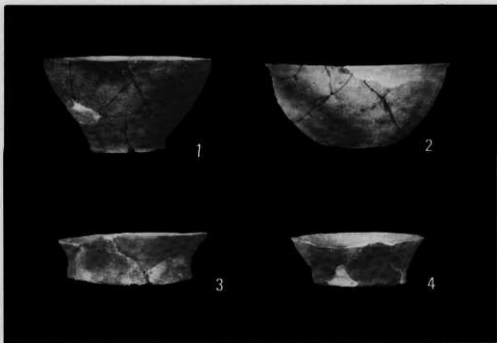
B 棒状罐 (1~5:第1号竖穴住居址,6:第4号竖穴住居址,7~11:第6号竖穴住居址,12:第9a号竖穴住居址)



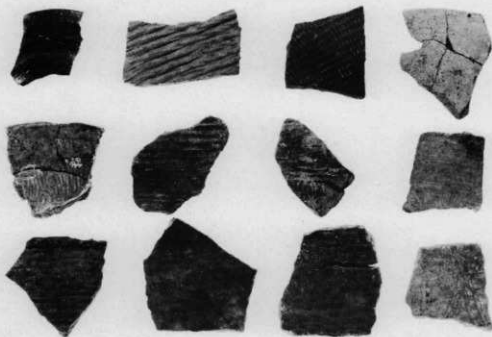
発掘区出土土器(1)



発掘区出土土器(2)



A 発掘区出土土器(3)



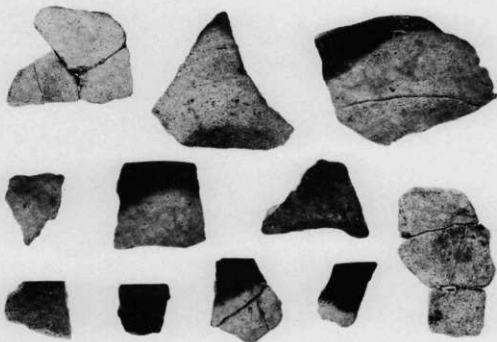
B 発掘区出土土器(4)



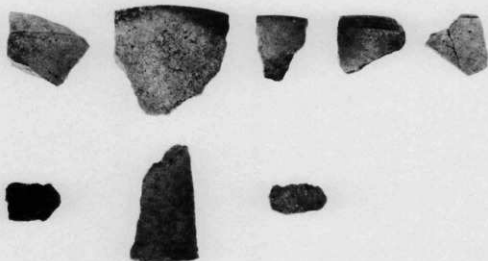
A 发掘区出土土器(5)



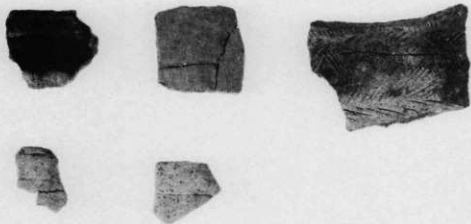
B 发掘区出土土器(6)



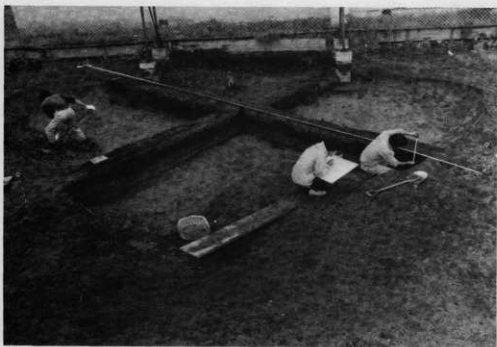
A 发掘区出土土器(7)



B 发掘区出土土器(8)



A SW地区発掘区出土土器



B 遺跡発掘風景

札幌市文化財調査報告書 XX

K 446 遺跡

昭和54年7月10日印刷

昭和54年7月20日発行

発行者 札幌市教育委員会

札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 富士プリント株式会社

札幌市中央区南16条西9丁目